

博士論文

ソーシャル・サポートが
恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響

平成 21 年 3 月

流通経済大学 教育学習支援センター

山下倫実

目次

第1章 恋愛関係崩壊に関する先行研究と本論文の目的

1. はじめに ー問題の所在ー	1
2. 青年における恋愛関係崩壊経験の深刻性	3
3. 恋愛関係崩壊後の立ち直りに関する先行研究	4
4. 恋愛関係崩壊後の立ち直りとそのプロセス	7
5. 恋愛関係崩壊研究におけるジェンダー差	8
6. 恋愛関係崩壊からの立ち直りを促進する要因	11
7. ソーシャル・サポートの機能的側面	12
8. ソーシャル・サポートの構造的側面	14
9. ソーシャル・サポートのジェンダー差	17
10. ソーシャル・サポート源の多様性及びソーシャル・サポート形態に 関する個人差	19
11. 本論文の枠組み	21
12. 本章の要約	22

第2章

対人関係におけるソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性に関する検討

1 研究1 ソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性に関する検討 ージェンダー差に着目してー	
問題	24
方法	27
結果	28
考察	30
2 研究2 性差観がソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性評価に 及ぼす影響	
問題	31
方法	35

結果	37
考察	40
3 総合考察	42
4 本章の要約	43

第3章 恋愛関係崩壊からの立ち直り段階尺度の確定とその妥当性の検討

1 研究3 恋愛関係崩壊からの立ち直り段階尺度の妥当性の検討	
問題	45
方法	48
結果	50
考察	55
2 本章の要約	57

第4章

恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響

1 研究4 ソーシャル・サポート源の多様性が恋愛関係崩壊後の立ち直りに及ぼす影響	
問題	59
方法	60
結果	62
考察	69
2 研究5 恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態に及ぼす影響	
問題	70
方法	73
結果	75
考察	80

3 研究6 恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響	
問題	82
方法	83
結果	85
考察	92
4 総合考察	95
5 本章の要約	97

第5章 総括と今後の課題

1. 本研究から得られた結果	98
2. 本論文を通して得られた新たな示唆	104
3. 本研究で示された結果の学術的意義と実践的意義	107
4. 今後の課題	111
5. 本章の要約	112

本論文の要約	115
--------	-----

引用文献	119
------	-----

資料	130
----	-----

第1章

恋愛関係崩壊に関する先行研究と本論文の目的

1. はじめに ー問題の所在ー

異性との親密な関係である恋愛関係は、多くの人々にとって幸福と満足感をもたらす重要な関係の1つである。しかし、このような関係は永遠に続くわけではなく、時間と共にお互いのパートナーに対する感情が薄れ、恋愛関係の崩壊を経験することも少なくない。このような恋愛関係崩壊という経験を完全に防ぐことは不可能であり、人は恋愛関係を築いた時から、一方で恋愛関係崩壊の危惧を抱くことになる。特に、恋愛パートナーに愛情を感じていればいるほど、また、将来を見越した真剣な恋愛関係であればあるほど、恋愛関係が崩壊した場合、強烈な苦悩を感じるようになる。では、人が恋愛関係崩壊という経験を乗り越え、新たな恋愛関係への希望を見出すためにはどうしたらよいのだろうか。このような問題について追究することを本論文の目的とする。

恋愛(romantic love)¹とは、性的に魅力を感じる対象に対する肯定的な感情として定義されている。それは、強烈な情動性、楽しさや苦悩、そして強力な生理的覚醒によって特徴づけられる。恋愛と好意の違いは、①恋愛においては理想が重要な部分を占めているが、好意はもっと現実と結びついている、②好意は時間が経つにつれてより強くなるが、恋愛は時間が経つにつれて弱まりやすい、③恋愛は正と負の感情を含み、人を愛することで希望や楽しさを味わうと同時に、苦悩や不安も経験するが、好意は正の感情のみを含むことである(藤原, 1997)。これまで恋愛の様々な種類やその要素について、様々な理論が提唱されている。たとえば、愛情の三角理論(Sternberg, 1986)では、愛情は「親密性(intimacy)」、 「情熱(passion)」、 「コミットメント(commitment)」という3つの要素から構成されている概念であることが提唱されている。また、恋愛の要素ではなく類型に着目した理論である恋愛の色彩理論(Lee, 1977; Hendrick & Hendrick, 1986; 松井, 1990)によると、恋愛はルダス(遊びの愛)、プラグマ(実利的な愛)、ストーゲイ(友愛的な愛)、アガペ(献身

¹ 多くの人にとって、恋愛は特定の異性との関係によって経験されるものであり、先行研究も異性との恋愛を対象としたものがほとんどである。最近、同性との恋愛関係、すなわち同性愛を対象とした研究も進んではいるが(WebSPIRSにより homosexualityで検索を行なったところ、2000~2007年の間に3875本の論文が検出された)、より多くの人に般化できる恋愛関係崩壊からの立ち直りモデルを提唱することを目的とすること、欧米と比較して、日本では十分なデータを得ることが困難であることから、本研究におけるこれ以降の議論では異性との恋愛経験、および恋愛関係崩壊経験をその対象とする。

的な愛), エロス (美への愛), マニア (狂気的な愛) の6つに分類されるという。さらに, 成人の愛着理論(Hazan & Shaver, 1987) では, 乳幼児期に養育者との間で形成された自己および養育者への期待や信念 (内的ワーキングモデル) が恋愛関係に影響を及ぼし, 恋愛行動に様々な個人差を生じさせることを明らかにしている。このように恋愛は多種多様であることが示唆されているが, 多くの場合, これまで経験したことのない脅迫的で執着的な感情, 切なさ, 嫉妬心などの強烈な感情を生じさせ, 一方で多大な満足感を与えると考えられる。

このように様々な感情を喚起する恋愛関係も崩壊する可能性は少なくない。先行研究によって, 恋愛関係崩壊時には様々なネガティブな情動が経験されることが示されている。たとえば, 悲しみ, 反省や自責, 苦悩, 否認, 罪悪感, 不安, 怒りなどである(e.g., 飛田, 1997; Simpson, 1987; Choo, Levin & Hatfield, 1996)。一方, 恋愛関係崩壊時にはポジティブな情動が経験されることも示されている。たとえば, その後の恋愛関係における自信と満足感の拡大(Buehler, 1987), 相手への配慮, 優しさ, 視野の拡大などを特徴とする肯定的変化 (宮下・白井・内藤, 1991), 社会的スキルの向上 (堀毛, 1994) などである。このように恋愛関係崩壊後の心理的反応にはポジティブな反応とネガティブな反応の両側面が認められるという知見は存在するものの, ネガティブな心理的反応からポジティブな心理的反応に移行する恋愛関係崩壊からの立ち直りプロセスについて, これまでの先行研究ではほとんど明らかになっていない。そこで, 本論文では恋愛関係崩壊というネガティブな出来事から立ち直り, ポジティブな変化を経験するためには何が必要なのかという問題について示唆を得ることを目的とする。

本論文で扱う恋愛関係崩壊の定義について述べる。本論文では先述したように, 恋愛関係崩壊による傷つきから回復する過程に焦点をあてることを目的としている。恋愛関係崩壊とは, 恋愛関係崩壊時の関係の種類 (恋愛関係・片想い) に関わらず, それを経験した者にとってネガティブなイベントであり, 一時的に心理的健康が損なわれ, 立ち直る必要性が高い状況であると考えられる。したがって, 本論文では恋愛関係崩壊時の関係の種類を問わず, 恋愛感情を伴う特定の異性との関係の崩壊を「恋愛関係崩壊」と定義する。また, 恋愛関係の終わり方には, ①自分から別れを切り出し, 別れに至る, ②相手から別れを切り出され, 別れに至る, ③別れの切り出しは明確ではないが, 別れに至るという3つがあると考えられる。誰が別れを切り出したかという別れの主導権が恋愛関係崩壊後の心理的反応に影響を与えることを見出した研究がある一方で(Fraizer & Cook, 1993;

Sprecher, 1994; Sprecher, Felmlee, Metts, Fehr & Vanni, 1998), 一時的にしか影響を及ぼさない(Pettit & Bloom, 1984), もしくは, 全く影響を及ぼさない(石本・今川, 2001)という研究も存在し, その結果は一貫していない。また, どちらが別れの主導者であったかが明確にならないことも多い(Hill, Rubin & Peplau, 1976; 飛田, 1989)。そこで, 本論文ではいずれの別れのパターンにおいても, 維持されていた恋愛関係が終わり, 恋愛関係が崩壊することを示すと考え, 別れの主導権についても問わないこととする。

2. 青年における恋愛関係崩壊経験の深刻性

一般的に, 小学校高学年から中学ぐらいに始まり, 高校卒業を迎えるまでの期間を「青年期」と称する(無藤・久保・遠藤, 1995)。しかし, 最近では社会文化が変化し, 高学歴化や晩婚化のために青年期の終わりは引き伸ばされる傾向にあり, 大学生もまた青年期から成人期への過渡期にあると考えられる。このような現代の青年にとって, 恋愛関係は重大な関心事であり, 最も重要な対人関係の1つである。和田・諸井(2002)によると“異性に近づいて親しくなりたいと思ったことがあるか”という質問に「ある」と回答した者は, 中学生では60%前後であるのに対し, 大学生では90%を超える(日本性教育協会, 2001)。また, “恋人と呼べる人”という質問に「いる」と回答した者は中学生では13%程度であるのに対し, 大学生では40%前後にもなる(日本性教育協会, 2001)。つまり, 中学, 高校, 大学と年齢の増大と共に, 異性に近づいて親しくなりたいと思う者が増加し, 実際に恋人がいる者も増加することが分かる。

では, なぜ中学から大学へと年齢が増大するにつれ, 恋愛が重大な関心事となり, 重要な対人関係となるのだろうか。1つには, 青年期には, 急激な身体的変化が生じ, 自分の性を受け入れていく中で性的成熟が進行する。この性的成熟の進行が性の欲求や性衝動を生じさせ, 異性との親密な関係を求めることにつながると考えられる。しかし, 青年が異性との親密な関係を築きたいと願うのは性的な欲求を満たすためだけではない。青年期には, 親への依存関係から徐々に脱し, 家族外対象との親密な関係を深めていく中で, アイデンティティの確立という新たな課題に直面する。アイデンティティとは, 自分とは何者であるかという自己定義, あるいは自分自身は社会の中でこう生きているのだという実感, 存在意識のことである。Erikson(1950)はアイデンティティを確立して初めて, 男女間の成熟した親密性が成立すると述べており, 配偶者を得て, 次の世代を育むという成人期の発達課題へ移行するためにアイデンティティの確立は重要なものであるといえる。アイデ

ンティティの確立には家族外対象との親密な関係を築くことが重要となるが、Erikson(1950)によると、青年期における多くの恋愛は、相手との関係を通して自己概念を確認しようとする行為である述べている。つまり、青年期の心理的発達にとって恋愛の経験は極めて重要な意味を持つと考えられる。しかし、この時期における恋愛は青年自身の不安定な内面的問題などにより成就することが難しく、関係が破綻してしまうことも多いこと(宮下他, 1991)、恋愛関係において生じる問題は若年者にとってありふれた出来事でありながら、強いショックを与え、ネガティブな心理的反応を誘発する可能性が高いこと(飛田, 1997)が示唆されている。つまり、青年にとっての恋愛関係崩壊経験は、非常に深刻な心理的問題を生じさせる可能性があるといえよう。

さらに、私たちの社会に存在する「恋愛関係にあることは望ましいことである」という暗黙の規範が、青年における恋愛関係の重要性を高めているという側面もある。このような規範が存在するために、青年たちはその規範に沿った行動を取ることができる自分を価値ある存在として評価しやすい。勝谷・若尾・天野(2003)は、恋人がいる人はポジティブな特性を持った人であり、恋人がいない人はネガティブな特性を持った人であると帰属する恋愛ポジティブ幻想と、恋人がいる人の割合を実際よりも高く見積もってしまう恋愛普及幻想が自尊心に与える影響を検討している。その結果、恋人がいない者において、ポジティブな特性を持つ限られた者だけに恋人がいると考えることが自尊心の高さにつながり、恋人のいない者も、恋人がいる者も特性には差がないはずなのに、みんなに恋人がいると考えることが自尊心の低さにつながることを示唆している。このような規範が存在する社会において、恋人がいないことはもちろんのこと、恋愛関係を維持することの失敗である恋愛関係崩壊経験も青年にとって大きな傷つきとなるであろう。

以上の議論をふまえ、恋愛関係崩壊によって深刻な心理的問題を抱えやすいと考えられる青年を対象とし、恋愛関係崩壊による傷つきから回復する過程について検討する。

3. 恋愛関係崩壊後の立ち直りに関する先行研究

先述したように、人は恋愛関係崩壊を経験すると、かなり強いショックを受け、ネガティブな情動を経験する。しかし、多くの方は恋愛関係崩壊後のこのようなネガティブな心理的健康状態から、より適応的な心理的健康状態へと移行していくと考えられる。つまり、恋愛関係崩壊からの立ち直りを経験するのである。しかし、どのような心理状態を恋愛関係崩壊からの立ち直りと判断するかについては研究によって様々であり、恋愛関係崩壊か

らの立ち直りの定義については非常に曖昧である。したがって、恋愛関係崩壊からの立ち直りに関する先行研究を概観することで、これまで何を恋愛関係崩壊からの立ち直りとして捉えてきたのかを明らかにする。また、恋愛関係崩壊からの立ち直りをどのように測定するかという点についても、非常に難しい問題として残されている。そこで、恋愛関係崩壊からの立ち直りを測定する尺度についても本節で検討する。

恋愛関係崩壊に関する先行研究を概観すると、恋愛関係崩壊後の立ち直りは主に以下の3つの観点から捉えられている(*Table 1-1*)。これらの観点を恋愛関係崩壊後からの時間軸に沿って整理する。

Table 1-1 恋愛関係崩壊からの立ち直りに着目した研究 (1976~2005年)

	指標の種類	著者リスト
心理的反応 (論文数:9)	①恋愛関係崩壊後の抑うつ	Monroe, Rohde, Seeley, Lewinsohn, 1999; Mearns, 1991; Ayduck, Downey & Kim, 2001
	②恋愛関係崩壊後のショック度	石本・今川, 2001; Sprecher, Felmlee, Metts, Fehr & Vanni, 1998; Fraizier & Cook, 1993
	③恋愛関係崩壊後の感情	Davis, Shaver & Verson, 2003; Sprecher, 1994; Lydon, Pierce & O'Regan, 1997
行動的反応 (論文数:12)	①別れの主導権	Hill, Rubin & Peplau, 1976; Helgeson, 1994; Davis, Shaver & Verson, 2003
	②別れの原因帰属	Sprecher, 1994; Lloyd & Cate, 1985; Hill, Rubin & Peplau, 1976
	③恋愛関係崩壊時の対処行動	Choo, Levine & Hatfield, 1996; 加藤, 2005; Davis, Shaver & Verson, 2003; Lloyd & Cate, 1985; Sorenson, Russell, Harkness & Harvey, 1993; 和田, 2000
立ち直り評価 (論文数:7)	①恋愛関係崩壊後の苦悩や立ち直り評価	加藤, 2005; Fraizier & Cook, 1993; 宮下・白井・内藤, 2001
	②恋愛関係崩壊後のストレス、新しい関係の希求の程度、肯定的な変化に関する評価	Helgeson, 1994; 石本・今川, 2003; Sorenson, Russell, Harkness & Harvey, 1993; Tashiro & Fraizier, 2003

まず、恋愛関係崩壊直後、もしくは恋愛関係崩壊後、短期間の間に測定されることが多い、抑うつやショック度、感情などの恋愛関係崩壊後の心理的反応(e.g., Monroe, Rohde, Seeley, Lewinsohn, 1999; Simpson, 1987; Mearns, 1991)を挙げることができる。これらの指標では、抑うつや感情的な傷つきの程度が低いことを恋愛関係崩壊後の立ち直りと捉えている。次に、恋愛関係崩壊後、立ち直りを容易にする行動がとれるか否かを、立ち直りを予測するものとして測定する恋愛関係崩壊時の対処行動などの行動的反応(e.g., Hill et al., 1976; Helgeson, 1994; Sprecher, 1994)を挙げることができる。間接的ではあるが、別れの切り出し、別れの原因帰属などを恋愛関係崩壊後の立ち直りを予測させるものとし

て捉えている。最後に、これらの過程を経て至った立ち直りの主観的評価を立ち直りと捉える恋愛関係崩壊後の立ち直り評価(e.g., 加藤, 2005; Fraizier & Cook, 1993; 宮下他, 1991) を挙げるができる。これらの指標では、恋愛関係崩壊からの立ち直りの評価や恋愛関係崩壊後の肯定的な変化に関する評価などを恋愛関係崩壊後の立ち直りと捉えている。このように時間軸に沿って先行研究を概観すると、恋愛関係崩壊から立ち直った状態とは、少なくとも恋愛関係崩壊後、ショックや苦悩を乗り越え、恋愛関係崩壊というネガティブな経験について肯定的な自己評価ができる状態であると推察される。

では、恋愛関係崩壊からの立ち直りを測定するために、どのような指標を用いたらよいのであろうか。まず、恋愛関係崩壊前後の行動的反応は、ある対処行動をとっていることが直接的に立ち直りを意味するとは限らないと考えられるため、恋愛関係崩壊からの立ち直りを反映しにくいと考えられる。恋愛関係崩壊後の立ち直りをもっと直接的に反映するのは、抑うつやストレス、ショック度、感情などの心理的反応や立ち直りの自己評価など、恋愛関係崩壊経験に伴う心理的变化であろう。しかし、ショック度、苦悩など恋愛関係崩壊直後の一時的な適応状態を恋愛関係崩壊からの立ち直りとして捉えることは一面的すぎると考えられる。なぜなら、死別や両親の離婚、恋愛関係の崩壊などトラウマティックな経験後に、自己概念、他者との関係の意味、人生哲学などがポジティブに変化することが示唆されており(Tedeschi & Calhoun, 1996)、恋愛関係崩壊直後の適応状態が一時的に悪化したとしても、一定期間経過後にはポジティブに変化する可能性が高いためである。また、心理的反応の中でも抑うつ・ストレスなどの心理的健康に関する測度は、恋愛関係以外の人間関係における悩み、健康上の問題、環境の変化など恋愛関係崩壊以外の要因の影響を受けやすい測度であり、恋愛関係崩壊以外の要因の影響が比較的少ない恋愛関係崩壊から経過期間が短い場合のみ有効な指標であると考えられる。

以上のような問題点をふまえ、本論文では恋愛関係崩壊後の肯定的な変化に関する自己評価を測定する。他の指標と比較して、①恋愛関係崩壊以外の要因に比較的影響されにくい、②恋愛関係崩壊後の一時的な適応状態だけでなく、一定のプロセスを経て至った長期的な適応状態についても検討できるというメリットがあるためである。

4. 恋愛関係崩壊後の立ち直りとそのプロセス²

それでは、人は恋愛関係崩壊からどのようなプロセスを経て、恋愛関係崩壊について「肯定的評価」が可能な状態に至るのであるか。そして、恋愛関係崩壊後、どのような肯定的評価ができるようになることが、恋愛関係崩壊後の立ち直りを意味するのだろうか。このような問いについて、十分に説明しうる恋愛関係崩壊に関するモデルは未だ提唱されていない。しかし、愛情や依存の対象を、その死によって、あるいは生き別れによって失う体験である「対象喪失」(小此木, 1997)からの立ち直りモデルより有効な示唆を得ることができる。

対象喪失からの立ち直り過程について Bowlby(1961) は以下のように述べている。人は対象喪失を経験すると、まず、情動的危機の段階を経験する。これは、一般に数時間から数週間持続する無感覚の段階で、次第に強烈な苦悩、怒りの爆発などが生じることもある。一種の心的ストレス反応であると考えられ、泣く、パニック、興奮などの情動的混乱やこれからどうしたらよいのか分からないといった無力感を経験する。また、不安を中核とした心細さ、挫折感、模索の心理が続く。次に、抗議-保持の段階を経験する。これは、失った人物を捜し求めることが数ヶ月～数年続く失った人物への未練を特徴とする段階である。具体的には、別れた相手とよりが戻ると信じたり、連絡を取ろうとしたりするなど、何度も再会して、相手の気持ちを取り戻す努力を続ける。また、本当に相手を失うという現実を否認する心理も働く。さらに、断念-絶望の段階を経験する。これは、もはや永久に相手が戻らないという喪失の事実を認める段階で、断念による本格的な対象喪失が経験される。激しい絶望と失意を特徴とする段階である。時には、引きこもり、抑うつ、無気力などを経験したり、別れた相手や自分、周囲の人に攻撃的になったり、失った相手を断念するために様々な試みを行う。最後に、離脱-再建の段階を経験する。この段階になると対象から心が離れ、自由になり、場合によれば別の対象に気持ちを向けることができるようになる。つまり、それまでの対象に対する愛着をあきらめ、新しい対象の発見と、それらとの結合に基づく新しい心のあり方を見出そうとする段階である。

本論文では、この離脱-再建の段階を「立ち直りの状態」と呼び、恋愛パートナーから心が離れ、恋愛関係崩壊を肯定的に捉えることができる状態を恋愛関係崩壊からの立ち

² 本論文では、恋愛関係崩壊からの立ち直りに向けてのプロセスという言葉を用いるが、対象喪失からの立ち直り段階については、相互に重なり合い、消失、逆戻り、停滞する(小此木, 1997)可能性が指摘されている。そのため、本論文では、各段階の経験度として扱うことに留め、時系列に沿った各段階の順番については問題にしない。

直りと定義する。一方、離脱-再建以外の段階は立ち直りに向けてのプロセスであると考えられるため、これらの各段階を個人が経験したかどうかを、本論文では「立ち直り過程の経験」と呼ぶ。以上の議論に基づき、本論文では、恋愛関係崩壊からの立ち直りのプロセスについて測定する尺度を確定し、「離脱-再建の段階」を恋愛関係崩壊後の立ち直り指標とすることの妥当性を確認する。

5. 恋愛関係崩壊研究におけるジェンダー差³

これまで恋愛関係におけるコミットメントや恋愛に対する態度など、恋愛行動には様々なジェンダー差が認められることが報告されてきた (e.g., 松井, 1990; 松井他, 1990; 和田, 1994)。恋愛関係崩壊後の行動や心理状態についても、様々なジェンダー差が報告されている (e.g., Monroe et al., 1999; Mearns, 1991; Sprecher, 1994)。恋愛関連行動の心理的法則性を明らかにしようとする場合、このようなジェンダー差についても説明可能なモデルを想定することが妥当であると思われる。しかし、恋愛関係崩壊に関する先行研究では、既存の理論に基づいてジェンダー差の発生原因を事後的に解釈しているものが多く、ジェンダー差の発生メカニズムについて直接的に取り組んだ実証的研究はほとんど存在しない。したがって、恋愛関係崩壊研究におけるジェンダー差について検討する必要性は高いと考える。本節では、恋愛関係崩壊からの立ち直りに関するジェンダー差はなぜ生じるのかという理論的示唆について述べ、先行研究においては、実際にどのようなジェンダー差が認められてきたのか整理する。

恋愛関係崩壊の立ち直りにジェンダー差が生じる原因として、これまで2つの理論的背景が提唱されている。まず、性役割の内在化を背景に、男性よりも女性が恋愛関係崩壊によって悪影響をうけることを示唆する研究がある。女性は関係の中で自己を定義し、親しい他者との関係を維持することが自尊心の維持につながること (Moran & Eckenrode, 1991; Hodgins, Liebeskind, & Schwartz, 1996; Josephs et al., 1992)、関係に

³ 本論文においては、ある事象に関する男性と女性の差異を必ずしも生物学的な要因に由来する差異ではなく、多くの社会的要因の影響を含んだ差異として解釈することが妥当であると考えられる。たとえば、恋愛という事象に関する男女の差異についても、愛とは赤ん坊の死亡率を低下させ、子孫を絶やさないために人間に備わった感情であり (Eibi-Eibesfeld, 1975; 金政, 2005 より引用)、生得的な性に基づいた遺伝子伝達のための戦略が異なることから生じると考える立場もある。しかし、現代においては、愛は非常に包括的で複雑な感情として発達し、社会的な文脈に多大な影響を受けていることが示唆されている (金政, 2005)。したがって、本論文においては、行動的・心理的特徴における男女間の差異を社会的要因の影響を含んだ差異として扱い、「ジェンダー (社会的性) 差; gender differences」と表記する。

生じた問題について男性より女性は敏感であり、その敏感さが抑うつ予測因である(Kenny, Molianen, Lomax, & Brabeck, 1993)といった先行研究より、親密な関係の維持は、男性よりも女性にとって重要である可能性が指摘されている。これらの知見を考慮するならば、恋愛関係崩壊後、立ち直りが困難であるのは男性よりも女性であるという予測が成り立つ。一方、コミットメントのジェンダー差を背景に、女性よりも男性が恋愛関係崩壊によって悪影響をうけることを示唆する研究がある。男性は恋愛関係初期から強いコミットメントを感じるのに対し、女性は交際が深まらなるとコミットメントを感じない(松井他, 1990; 和田, 1994)、男性は献身的恋愛傾向が強いが、女性は自己中心的もしくは合理的な恋愛傾向が強い(松井, 1990)といった先行研究より、女性より男性の方がコミットメントを感じやすいため、恋愛関係崩壊のインパクトが強い可能性が指摘されている。このような知見を考慮するならば、恋愛関係崩壊後、女性より男性の方が恋愛関係崩壊からの立ち直りは困難であると予測される。このように、異なる理論的背景から全く逆の予測が導かれ、実際、恋愛関係崩壊後の立ち直りのジェンダー差に関する結果は一貫していない。しかし、これらの研究を先に述べた立ち直り指標別に検討すると、次のような傾向が読み取れる(Table 1-2)。

Table 1-2 恋愛関係崩壊からの立ち直りに関するジェンダー差に着目した研究

	主な結果	主な論文
心理的反応 (論文数:9)	①恋愛関係崩壊後の抑うつが男性より女性の方が高い ②恋愛関係崩壊後のショック度が男性より女性の方が高い ③恋愛関係崩壊後の憎しみや怒りが男性より女性の方が高い ④恋愛関係崩壊後に感じる安らぎや楽しさは男性より女性の方が高い	Monroe et al., 1999; Mearns,1991 Sprecher et al.,1998;Fraizier & Cook,1993 Davis, Shaver & Verson,2003 Sprecher,1994
行動的反応 (論文数:12)	①別れの主導権は男性より女性にある ②別れの原因を男性よりも女性はパートナーに帰属しやすい ③恋愛関係崩壊への対処として、男性は回避的もしくは自己信頼的対処をとりやすく、女性は社会的対処をとりやすい	Hill et al.,1976; Helgeson,1994 Sprecher,1994;Lloyd & Cate,1985 Choo et al., 1996;加藤,2005; Davis et al.,2003
崩壊後の立ち直り (論文数:7)	①交際期間、関係へのコミットメント、代替肢の有無など恋愛関係の質が恋愛関係崩壊後の苦悩や立ち直りの評価に影響 ②恋愛関係崩壊時の主導権の有無、原因帰属、サポートの有無などが恋愛関係崩壊後のストレス、新しい関係の希求、肯定的な変化に影響	加藤,2005;Fraizier & Cook,1993;宮下・臼井・内藤,2001 Helgeson,1994;石本・今川,2003;Sorenson et al.,1993; Tashiro & Fraizier,2003

恋愛関係崩壊後の心理的反応に関する指標を用いた先行研究では9編中、5編において、男性より女性の方が抑うつや苦悩が高いというジェンダーの主効果が見出されており(e.g., Monroe et al., 1999; Mearns, 1991; Frazier & Cook, 1993), 3編においてはジェンダー差が見出されず(e.g., Simpson, 1987; Tashiro & Frazier, 2003), 1編においては、男性より女性の方がポジティブな感情を報告することが示唆されている(Sprecher, 1994)。残り1編についてはジェンダー差について、特に分析されていない(Lydon, Pierce & O'Regan, 1997)。これらの指標を恋愛関係崩壊後の傷つきの程度を表す指標と解釈すると、概ね男性の方が女性より傷つきの程度が低い傾向にあると考えられる。一方、恋愛関係崩壊後の立ち直りに関する自己評価という指標を用いた先行研究のジェンダー差に関する知見は一貫していない。ジェンダー差について特に分析がなされていない研究があるだけでなく(Helgeson, 1994; Tashiro & Frazier, 2003), ジェンダー差が認められなかった先行研究や(宮下他, 1991), 男性より女性の立ち直り評価が高いことを示唆する先行研究もあり(Frazier & Cook, 1993), ジェンダー差に関する有効な示唆を得ることはできない。しかし、別れの主導権を男性より女性がとることが多い(Hill et al., 1976; Helgeson, 1994), 男性よりも女性は別れの原因をパートナーに帰属しやすい(Sprecher, 1994)というように、行動特徴においてジェンダーの主効果が見出されている⁴。別れの主導権は自分にあった方が関係崩壊後の適応状態がよく(Helgeson, 1994; Frazier & Cook, 1993), 別れの原因帰属は自分に帰属しない方が肯定的評価に結びつきやすいこと(Tashiro & Frazier, 2003)などが示されており、女性の行動特徴の方が立ち直りにつながりやすいと予想される。

先行研究で得られている知見をまとめると、女性は男性より恋愛関係崩壊によって傷つく程度が大きい(e.g., Monroe et al., 1999)が、同時に立ち直りに結びつきやすい行動(別れの主導権や原因帰属において)をとることができる(e.g., Hill et al., 1976; Frazier & Cook, 1993)。この恋愛関係崩壊後の行動の適切さと、立ち直りの自己評価指標を用いた研究において男性の方が女性より立ち直り評価が高いことを示した研究が存在しないことを考慮すると、おそらく女性の方が男性より立ち直り評価は高い傾向があると予測される。

⁴ 性別と行動特徴との交互作用の効果を示唆した結果はほとんどなく、女性においては、自ら失恋相手を避けるような認知や行動を行う拒絶や未練といった対処行動がストレス反応の増大や回復期間の長期化に影響するが、男性は未練のみが影響する(加藤, 2005)という示唆が得られているのみである。

6. 恋愛関係崩壊からの立ち直りを促進する要因

これまでの議論を整理すると、恋愛関係崩壊は若年者にとってネガティブな心理的反応を誘発する出来事であり、対象喪失からの立ち直り過程(Bowlby, 1961)と同様の過程を経て、恋愛関係崩壊から立ち直る可能性が高い。また、このような恋愛関係崩壊からの立ち直りにはジェンダー差が認められ、男性より女性の方が恋愛関係崩壊からの立ち直り評価が高いと考えられる。それでは、どのような要因が恋愛関係崩壊からの立ち直りを促進するのであろうか。

これまで恋愛関係崩壊からの立ち直りには恋愛関係崩壊前の関係の質(交際期間や関係満足度など)が関連していることが示唆されている(Simpson, 1987; Mearns, 1991; Frazier & Cook, 1993; 和田, 2000)。しかし、立ち直りを促進するその他の要因については実証的な研究が少ない。そこで、愛情や依存の対象を死や生き別れによって失うという対象喪失からの立ち直りに関する知見も参考に、恋愛関係崩壊からの立ち直りを促進する要因について議論を進める。

対象喪失からの立ち直りには、安定した環境、対象喪失を経験した者の心の発達、及び耐え難い苦痛を感じている心を支え、助ける依存対象の存在が不可欠であることが示唆されている(小此木, 1997)。また、Harvey(2000)は、喪失経験の再解釈や親密な他者への喪失経験の告白が重要であることを示唆している。これらの知見が共通して挙げている要因は、他者への依存や告白など対人的な要因であり、援助してくれる他者の存在が立ち直りを促進する可能性が高いと考えられる。実際、Frazier & Cook(1993)は、ソーシャル・サポートが「自分は失恋から立ち直っている」という立ち直り評価を促進することを示唆している。また、恋愛関係崩壊を含む過去1年間に起こったストレスフルなイベントに関連した成長(対人関係のポジティブな変化、人生哲学を含む個人の資質、コーピングスキルなど)について、Park, Cohen & Murch(1996)はソーシャル・サポートの利用可能性とその満足度がストレスに関連した成長を促進することを示唆している。

恋愛関係崩壊への対処として、男性は回避的もしくは自己信頼的対処をとりやすく、女性は他者に相談する、なぐさめてもらうといった社会的対処をとりやすいことが報告されている(Choo et al., 1996; 加藤, 2005; Davis et al., 2003)。男性より女性の方が恋愛関係崩壊からの立ち直り評価が高いことを考慮すると、恋愛関係崩壊からの立ち直りには、他者に頼る対処行動をとることが重要である可能性が高い。

これらの知見より、ソーシャル・サポートは恋愛関係崩壊の痛手から心を解き放ち、成

長の知覚を通して恋愛関係崩壊に対する肯定的な意味づけを促進すると考えられる。また、ソーシャル・サポートは、環境や個人の心理的発達などの他の要因と比べても、自らコントロールしやすい要因であると考えられるため、本論文ではソーシャル・サポートに着目する。

7. ソーシャル・サポートの機能的側面

様々な研究者によって、ソーシャル・サポートの定義が試みられてきた。たとえば、Cobb(1976)は、①ケアされ、愛されている、②尊敬され、価値ある存在として認められている、③互いに義務を分かち合うネットワークの一員である、という3つのうち少なくとも1つ以上をその人に信じさせてくれるような情報であると定義した。また、Shumaker & Brownell(1984)は当人同士の認知を重視し、受け手の安寧が意図されていると送り手あるいは受け手によって知覚される、2人以上の間での資源の交換と定義した。しかし、ソーシャル・サポートの定義は循環論となりやすく、多くのソーシャル・サポート研究では、最も重要な変数であるソーシャル・サポートそのものについてアドホック(場当たりの)な操作的定義を行うことしかできなかったという問題点が指摘されている(浦, 1992)。このようにソーシャル・サポートの定義は非常に難しいものであるが、本論文では、ある個人を取り巻く様々な人からの有形・無形の資源の提供(南・稲葉・浦, 1988)という比較的広義の定義を採用する。

これまで多くの先行研究によって、ソーシャル・サポートが抑うつ状態の緩和、心理的満足感、死亡率の低減など個人の心身の健康と関連があることが示唆されてきた(e.g., Cohen & Wills, 1985; Blazer, 1982; Seeman & Syme, 1987; 和田, 1992)。たとえば、和田(1992)は、ソーシャル・サポートが少ない者と比較して、ソーシャル・サポートが多い者は、抑うつ気分が低く、孤独を感じず、大学生活の不安も少なく、大学満足度も高いことを示している。

では、なぜソーシャル・サポートが心身の健康にポジティブな影響を及ぼすのであろうか。この過程について、先行研究ではソーシャル・サポートとストレスとの関連から検討がなされてきた。Lazarus & Folkman(1984)によると、ストレスの原因となりうる生活上の出来事が生じた場合、その出来事が自分にとってどの程度有害であるかという評価(1次的評価)と有害であると評価された出来事にどのように対処できるかという評価(2次的評価)がなされ、自分のもつ対処資源が不足する場合や対処方略が機能しない場合にストレス

を感じるという心理的ストレス理論を提唱した。これらの理論に基づき、Cohen & Wills(1985)は、ストレスの原因となる出来事が心身の健康に悪影響を及ぼすプロセスにおいて、ソーシャル・サポートが以下の2つの段階で緩衝効果を持つことを示唆している。まず、ソーシャル・サポートはある出来事がどの程度有害であるかという評価に影響を及ぼすと考えられている。同じ出来事が生じた場合でも、自分をサポートしてくれる人々がいると認識できる者はそうでない者より、その出来事をストレスフルであると評価しにくいと推察される。次に、ある出来事がストレスフルであると認知された場合、その出来事が心身の健康に悪影響を及ぼす程度にソーシャル・サポートが影響を及ぼすと考えられている。たとえば、ストレスフルな出来事を解決するための適応的な対処行動を促進したり、ストレスの原因となった出来事について再評価を促したりすることによって、ストレスフルな出来事が心身の健康を損傷することを防ぐ効果を持つと推察される。

以上のような過程は、ソーシャル・サポートのストレス緩衝効果⁵と呼ばれている。Cohen & Wills(1985)の理論に基づくならば、あるストレスフルな出来事に対して、それに対処するための対処資源も対処方略も持たない場合に、ソーシャル・サポートの効果が発揮されると考えられる。つまり、自分自身で対処可能なストレスの低い状況ではなく、自分自身ではとても対処できそうにないストレスの高い状況において、ソーシャル・サポートはその効果を発揮するのである。

本論文で扱う恋愛関係崩壊という出来事は、非常にストレスフルな出来事の1つであると推測される。特に、青年の恋愛関係は恋愛関係に関わる問題に対処することを学ぶ前に始まるため、交際中に生じる問題に対するサポートが非常に重要になる(Weisz, Tolman, Callahan, Saunders, & Black, 2007) という指摘をふまえると、恋愛関係崩壊後も恋愛パートナーを失った苦悩を低減させる方法を見出すことができず、非常に辛い状況におかれると考えられる。このような状況において、ソーシャル・サポートは恋愛関係崩壊に関する深刻性の評価や、恋愛関係崩壊からの立ち直りのために適応的な対処行動を促進することに重要な役割を果たすと予測され、恋愛関係崩壊からの立ち直りをソーシャル・サポートの緩衝効果という枠組みより検討することは有意義であると考えられる。そのため、本論文では、恋愛関係崩壊経験の中でも苦悩や傷つきが大きかった経験を対象

⁵ この仮説に相反する仮説として、ストレスフルな出来事にさらされているか否かに関わらず、支持的な対人関係の中にいることが、ある個人の心身の健康に直接的な影響を持つという直接仮説を支持する研究もある(e.g., Rook, 1987)。

とし、恋愛関係崩壊からの立ち直りにおけるソーシャル・サポートの緩衝効果について検討を行なう。

それでは、どのような種類のソーシャル・サポートが恋愛関係崩壊からの立ち直りを促進するのであろうか。これまでソーシャル・サポートの種類については研究者によって様々な分類がなされてきたが、概ね2種類に大別されることが明らかとなっている。具体的には、個人の心理的な不快感を軽減したり、自尊心の維持・回復を促すような機能を提供する情緒的サポートと、個人が直面している問題そのものを直接的・間接的に解決するための機能を提供する道具的サポートである(橋本, 2005a)。これら2種類のソーシャル・サポートをさらに詳しく分類すると、情緒的サポートには愛情や愛着、親密性のような情緒的側面への働きかけと、評価やフィードバックのような認知的な側面への働きかけの2種類があり、道具的サポートにはストレス処理のための資源を提供したり、問題解決に介入するという形での直接的なサポートと、それらについての情報を提供するという形での間接的なサポートの2種類がある(浦, 1992)。これまで恋愛関係崩壊からの立ち直りとソーシャル・サポートとの関連について検討している先行研究は数少なく(Frazier & Cook, 1993; Park, Cohen & Murch, 1996)、どのようなソーシャル・サポートが恋愛関係崩壊からの立ち直りに役立つのかという問題について予測するのは困難である。しかし、対象喪失からの立ち直りには、①耐え難い苦痛を感じている心を支え、助ける依存対象の存在が不可欠であること(小此木, 1997)、②親密な他者への告白が重要であること(Harvey, 2000)など対人的な要因が挙げられている。つまり、自分の気持ちに共感してくれること、励ましてくれること、自分の話に耳を傾けてくれることなどが重要であると考えられる。以上をふまえるならば、恋愛関係崩壊後、様々なソーシャル・サポートの種類の中でも、個人の心理的な不快感を軽減したり、自尊心の維持・回復を促すような機能を提供する情緒的サポートが有効に機能すると予測される。したがって、本論文では主に情緒的側面への働きかけである情緒的サポートに着目する。また、ストレス処理のための資源を提供するといった直接的なサポート(道具的サポート)と、ストレス処理のための情報を提供するといった間接的なサポート(情動的サポート)については、探索的に検討を行なう。

8. ソーシャル・サポートの構造的側面

ソーシャル・サポートを受けることができる人数(ソーシャル・サポート・ネットワーク)やソーシャル・サポートを受けることができる関係の種類(ソーシャル・サポート源)

など、ソーシャル・サポートの構造的側面に着目した研究は、多くの対人関係を維持しているほうが適応的であることを示している(e.g., Berkman & Syme, 1979; House, Landis, Umberson, 1988; Cohen, 1988; Ross, Mirowsky, & Goldstein, 1990)。たとえば、配偶者がいない者がいる者より死亡率が高いこと(Ross et al., 1990)や、ソーシャル・ネットワークの少ない人より多い人の死亡率や病気の罹患率が低い(Berkman & Syme, 1979; Cohen, 1988)ことなどが示されている。もちろん、多くの対人関係を持つことは対人関係上のトラブルを引き起こす可能性もある(浦, 1992)。たとえば、全員が親密で直接的な関係を維持している対人関係にいる者は、そのような関係を維持するために多大な負担を強いられるため、必ずしも適応的でないことを示唆する研究がある(Hirsh, 1979, 1980)。しかし、多くの対人関係を維持することのメリットを示す研究の多さを考慮すると、関係を維持するためのコストが多大なものにならない限り、一般的には多くの対人関係を維持することが、心身の健康を維持するために役立つものと考えられる。それでは、なぜ多くの対人関係を維持することが、心身の健康の維持に役立つのであろうか。

1つ目の理由として、ソーシャル・ネットワークが広い(すなわち、対人関係の数が多い)ほど、ソーシャル・サポートの利用可能性や実行頻度なども高いことが示されており(Vaux & Harrison, 1985)、ソーシャル・サポートの構造的側面と機能的側面との間には正の相関が認められる傾向にあることが挙げられる。具体的には、ソーシャル・サポートを受容している、もしくは、受容できる可能性がある関係をソーシャル・サポート源と呼ぶが、多くのソーシャル・サポート源を持つことによって、ソーシャル・サポートが必要になった場合に、ソーシャル・サポートを受容できる可能性を高く見積もることができるという。また、実際に、自らが持つソーシャル・サポート源から受容できるソーシャル・サポートの量も多くなるという。以上より、多くのソーシャル・サポート源を持つことは、必要な場合に、十分な量のソーシャル・サポートを受容できることにつながるため、心身の健康の維持に役立つと考えられる。

2つ目の理由として、ソーシャル・ネットワークの広さとソーシャル・サポート源の多様さとの間に正の相関が認められる傾向にあることが挙げられる(福岡・橋本, 1997, 福岡, 2001)。これまで、ソーシャル・サポート源の種類によって提供するサポートの種類が異なることが示唆されており(Campbell, Marsden, & Hurlbert, 1986; Wellman & Wortley, 1989)、年齢、性別、所属(学校や職場の違いなど)、役割(先輩、後輩、先生、上司、部下など)など、背景の異なるソーシャル・サポート源は持っている資源が異なる

と考えられる。つまり、対人関係が多様であることは、様々な興味や関心、新しい価値観や考え、自分とは異なる物事への対処行動などに触れる機会を得ることにつながる。したがって、ソーシャル・サポート源が少ない者と比較して、ソーシャル・サポート源が多様な者は様々なストレス状況に適したソーシャル・サポートを選択できる可能性がある。

先述したように、恋愛関係に生じる様々な問題への対処方略を学んでいないため、青年にとって交際中に生じる問題に対するサポートは非常に重要であると指摘されている(Weisz et al., 2007)。たとえば、交際中に生じる問題の1つに恋愛パートナーから暴力を受けるというデート・バイオレンス(Dating Violence)という深刻な問題がある。しかし、相談相手となる友人がデート・バイオレンスの回避のためにいかに支援をしたらよいかという知識を持っていないことや、家族がDating Violenceの回避をサポートする存在として選択されないことから、若年者のソーシャル・サポートがデート・バイオレンスによる落ち込みの回復には役に立つが、その回避には役立たないことが示唆されている(Salazar, Wingood, DiClemente, Lang, & Harrington, 2004)。このような知見をふまえると、ソーシャル・サポートを受ける対人関係の多様性は、恋愛経験があまりなく、恋愛関係における様々な問題に対する対処方法を学んでいない若年者にとって特に重要であると考えられる。また、交際中に生じる問題だけでなく、多大な満足感の源であった恋愛関係が崩壊してしまった際にも重要な役割を果たす可能性が高い。おそらく恋愛関係崩壊時に多様なソーシャル・サポート源を有している者は、ソーシャル・サポート源が少ない者と比較して、恋愛関係崩壊からの立ち直りを経験しやすいだろう。したがって、本論文ではソーシャル・サポート源の多様性という観点から、恋愛関係崩壊からの立ち直りについて検討する。

これまでソーシャル・サポートの多様性として、ソーシャル・サポート源の人数(e.g., Berkman & Syme, 1979; House et al., 1988)、ソーシャル・サポート源の種類の数(e.g., 嶋, 1991; 尾見, 1999)、ソーシャル・ネットワークの密度(e.g., Hirsh, 1979; Lepore, 1992)などが検討されている。しかし、ソーシャル・ネットワークの密度を客観的に測定するには、そのソーシャル・ネットワークにいる全員全てのネットワークを測定しなければならず、調査を行なうコストが非常に大きい。また、1人の回答者が評価したソーシャル・ネットワークからその密度を推測する方法を採った場合、客観性が低いデータとなる危険性がある。もちろん、客観性を追求すれば、ソーシャル・サポート源の人数やソーシャル・サポート源の種類の数についても、そのソーシャル・ネットワークにいる全員全てに回答を求

める必要があるが、多くの先行研究において1人の回答者が評価する方法が用いられてきた(e.g., Griffith, 1985; 川浦・池田・伊藤・本田, 1996; 尾見, 1999)。したがって、本論文では、前者2つの指標を取り上げる。

9. ソーシャル・サポートのジェンダー差

恋愛関係崩壊後の立ち直りには多くのジェンダー差が認められることは先に述べた通りであるが、ソーシャル・サポートに関しても、ジェンダー差が数多く報告されている。

まず、ソーシャル・サポートとジェンダーの関連について、理論的にはどのように考えられるであろうか。社会において、人々は様々な役割を担いながら、もしくは暗黙のルールを共有しながら生活している。そのため、個人差はあるものの、社会における自分の役割や自分に対する社会の期待などにより、個人の考えや行動は規定される。特に、社会から個人に期待される役割のなかでも、頻繁に接する機会が多いと考えられる役割の1つは「性役割」であろう。性役割とは、ある文化や社会において男性と女性にそれぞれふさわしいと期待されている行動の仕方やパーソナリティのあり方である(宗方・佐野・金井, 2002)。性役割の内容は男性と女性で全く異なっており、男性の役割は家族と社会を結びつけて職業労働を行う道具的役割、女性の役割は家族内の精神的調和をはかり、育児や家事をする表出的役割であると言われている(Persons, 1970, 1971)。また、これらの役割を果たすために、男性あるいは女性に特に望ましいとされる特性のことを「男性性(masculinity)」、「女性性(femininity)」という。一般的に、男性性とは①職業的な成功、②肉体的・精神的な強さ、③独立心の強さ、④感情の表出の少なさ、⑤女々しくないことである(鈴木, 1994)。また、女性性とは、①従順、②依頼心の強さ、③繊細な神経を持つこと、④心配りができること、⑤外見が魅力的なことである(柏木, 1972)。理論上、どちらの役割を内在化しているかは性別とあまり関連しないはずであるが、女性には女性役割が、男性には男性役割が社会的に期待されるため、自分の性別に沿った役割を内在化しやすいと考えられる。橋本(2005a)によると、ソーシャル・サポートの授受もこれらの性役割の影響を受ける可能性が指摘されている。気遣いや情緒的表出性を強調する女性役割はサポート授受を促進するので、女性や女性性の高い人は、ストレス直面時にサポートを得やすくなる。しかし、達成や自律性、情緒的統制を強調する男性役割は、男性のサポート希求や入手を困難にするという。

ソーシャル・サポートの実証的研究では、このような理論的示唆を支持する方向のジェ

ンダー差が認められている。たとえば、女性は男性より多様なサポート源を有すること(e.g., Leavy, 1983; 嶋, 1991, 1992; 和田, 1992, 1998), 高齢者においては、女性は多様な関係からソーシャル・サポートを受けるが、男性は配偶者からのソーシャル・サポートに頼ること(Antonucci & Akiyama, 1987; 野辺, 1999), 男性にとって男性にソーシャル・サポートを求めるより女性に求める方が抵抗感が少ないこと(Nadler, Maler, & Friedman, 1984) が示されている。特に、サポートの種類のうち、情緒的サポートについてはこれらの傾向が顕著である(e.g., Antonucci & Akiyama, 1987; 和田, 1992; Hays & Oxley, 1986)。

このような先行研究をふまえるならば、婚姻関係ほどには社会的制約のない恋愛関係においても、女性は恋愛パートナーを含め多様な関係からソーシャル・サポートを受けるのに対し、男性はより親密な異性である恋愛パートナーからのソーシャル・サポートに依存しがちであると予測される。特に、このような傾向は情緒的サポートにおいて顕著である可能性が高い。そして、このようなソーシャル・サポート形態のジェンダー差は、恋愛関係崩壊からの立ち直りのジェンダー差に影響を与える可能性がある (Figure 1-1)。そのプロセスについて、以下に述べる。

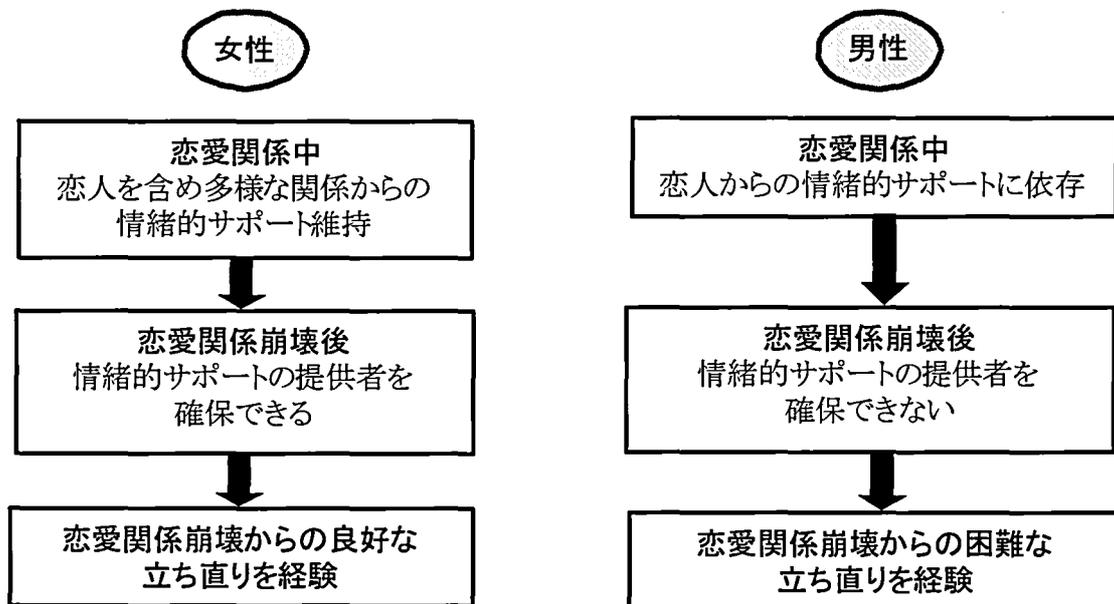


Figure 1-1 恋愛関係崩壊からの立ち直りに関するジェンダー差が生じるプロセス

女性は、恋愛関係崩壊前に、恋愛パートナーだけでなく様々な関係からのサポートを維持しているため、恋愛パートナーとの関係が崩壊しても対処するのに適したサポートを得られる可能性が高い。一方、男性は恋愛関係崩壊前には専ら恋愛パートナーにサポート（特に情緒的サポート）を求めため、恋愛パートナーとの関係が崩壊すると、情緒的サポート源が失われる、または極端に少ない状況におかれるであろう。そのため、恋愛パートナーとの関係が崩壊した場合、対処するのに適したサポートを得られる可能性が低い。したがって、女性の方が男性より関係崩壊からの立ち直りの程度が高くなると予測される。しかし、恋愛関係崩壊からの立ち直りにおけるジェンダー差がソーシャル・サポート源の多様性の違いによって生じているならば、男女にかかわらず、恋愛パートナーとの関係が維持されている段階から多様なソーシャル・サポート源を持っている者は、恋愛関係崩壊からの立ち直りの程度が高いことが予測される。本論文では、これらの予測が示す恋愛関係崩壊からの立ち直りのプロセスについて検討する。

最後に、本論文で用いるソーシャル・サポートに関する用語について整理する。ソーシャル・サポートがストレスを緩衝する際、ある出来事をどの程度有害な出来事であると評価するかという1次的評価に関連するのが、サポート・ネットワークや知覚されたサポート（必要があればサポートをしてもらえそうだという期待）であり、ストレスフルな出来事に対処できるか否か（2次的評価）を規定するのが、サポート・ネットワークや知覚されたサポートに加え、実行されたサポートの受容（他者から実際に「サポートを受けている」という認識）であることが示唆されている（谷口・福岡, 2006）。本論文では、恋愛関係崩壊というネガティブな出来事が生じた後の立ち直りに焦点を当てるため、実際にどのような関係からサポートを受けることが可能であったかを直接測定の方がソーシャル・サポートの効果をより詳細に検討できると考える。したがって、知覚されたサポートではなく、サポートの受容に焦点を当てる。また、ソーシャル・サポート源の多様性について、本論文においてはソーシャル・サポート・ネットワークの人数、及びソーシャル・サポートを提供されていると認識している関係の種類の数を取りあげる。さらに、どの関係の者からのソーシャル・サポート受容が多いかなど、ソーシャル・サポート受容のパターンをソーシャル・サポート形態と呼ぶ。

10. ソーシャル・サポート源の多様性及びソーシャル・サポート形態に関する個人差

ここまで述べてきたように、本研究では、恋愛関係崩壊からの立ち直りのよさにおける

ジェンダー差が、ソーシャル・サポート源の多様性とソーシャル・サポート形態におけるジェンダー差に由来するものだと考える。さらに、ソーシャル・サポート源の多様性とソーシャル・サポート形態におけるジェンダー差は、生物学的性差ではなく、社会における性役割に由来するものだと考えられる。そのため、本論文においては、ソーシャル・サポートの受容に影響を与える個人差の1つとして、性役割に対する意識に着目し、検討を行なう。特に、性役割を意識しやすい者や男性と女性の違いにこだわりのある者は、ソーシャル・サポートを受ける際にも性役割に沿って行動しようと動機づけられると予測される。

これまで伊藤(1997)は、人が自分を取り巻く環境を認知する際に使用する性(ジェンダー)に関する認知的枠組みを性差観と定義し、性差観が性役割態度を規定し、その態度に基づいて性役割の選択が行なわれることを明らかにした。このような研究をふまえるならば、性差観を測定することが性役割態度や性役割に基づく行動の予測には有効であることを示唆している。ソーシャル・サポートの授受も性役割に基づく行動の1つであると考えられるため、ソーシャル・サポートと性差観との関連を検討することは有意義であると考えられる。

性差観の定義をふまえると、性差観は自分と相手の性別の違いに着目し、様々な情報を性別の違いによって処理しようという動機づけに影響する可能性がある。したがって、基本的に、性差観の強い男性は性差観の弱い男性に比べ、男性は強くあるべきという考えに基づき、ソーシャル・サポート源をあまり持たないと予測される。一方、性差観の強い女性は性差観の弱い女性に比べ、女性は依頼心の強さを許されるという考えに基づき、多くのソーシャル・サポート源を持つと予測される。

それでは、性差観の強い男性は全くソーシャル・サポートの恩恵を受けようとしないのであろうか。これまで男性はサポート提供者が男性である場合より女性である場合の方がサポートを求めやすく、サポートの受容についてポジティブな反応を示すことが明らかとなっている(Nadler et al., 1984)。その理由として、女性は他者を支援するべきであるという性役割規範が存在するため、たとえ女性からソーシャル・サポートを受容しても、性役割規範から逸脱しないためであると推測されている。したがって、性差観の強い男性は、特に性役割規範から逸脱することを恐れるため、ソーシャル・サポートを他の関係より恋愛パートナーから得ようとするのが予測される。このような基本的な予測に基づき、本論文では、恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を与えるソーシャル・サポート源の多様性に関する個人差の1つとして、性差観に着目する。

11. 本論文の枠組み

本論文の目的は、恋愛関係のあり方と恋愛関係崩壊後の立ち直りとの関連のみに焦点が当てられてきた従来の恋愛関係崩壊研究を発展させ、恋愛関係崩壊からの立ち直りのプロセスにおいて、ソーシャル・ネットワークから受容するソーシャル・サポート（特に、情緒的サポート）がどのような影響を及ぼすのか検討することである。そのため、これまで恋愛関係崩壊研究において曖昧にされてきた恋愛関係崩壊からの立ち直りを定義し、恋愛関係崩壊からの立ち直りを測定するための尺度についても確定する。これまでの議論を整理し、本論文において検討する枠組みを *Figure 1-2* に示す。

本論文は、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程について、以下のプロセスを想定する。第1に、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源の多様性は恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響する。第2に、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源の多様性は、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態に影響を受ける。第3に、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態にはジェンダー差が認められるが、そのソーシャル・サポート形態は個人が持つ性差観によって影響されるという3つのプロセスである。具体的にどのように検討するかについて、各章ごとに説明する。

まず、第2章においては、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源の多様性にジェンダー差が認められるか検討する。具体的に、研究1では、恋愛関係にある者を対象に、家族（同性/異性）、友人（同性/異性）、恋人といった5つの対人関係から受容しているソーシャル・サポートにジェンダー差が認められるかという問題について検討する。また、研究2では、ソーシャル・サポート受容は性役割の影響を受けることが予測されるため、恋愛関係にある者を対象に、性差観がソーシャル・サポート形態に影響を与えるかという問題について検討する。

第3章では、対象喪失からの立ち直り過程(Bowlby, 1961)を参考に、以降の研究で用いる恋愛関係崩壊からの立ち直り過程を測定する尺度を確定する。そして、「離脱-再建の段階」を恋愛関係崩壊後の立ち直り指標とすることの妥当性を確認する。具体的に研究3では、恋愛関係崩壊からの立ち直り尺度を確定した後、その尺度と一般的な心理的健康(GHQ及び孤独感)、恋愛関係崩壊の特徴（失恋までの交際期間、失恋からの経過期間、失恋相手の重要度など）、恋愛関係崩壊後の肯定的な心理的变化を反映すると考えられる恋愛関係崩壊後の成長との関連を検討する。

第4章では、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直

りに及ぼす影響について検討する。具体的に、研究4では、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源の多様性が恋愛関係崩壊後の立ち直りに及ぼす影響について検討する。また、研究5では、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態を規定するプロセスについて検討する。さらに、研究6では、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について検討する。

最後に、第5章では得られた結果を整理し、Figure1-2に示した枠組みに沿って、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後の立ち直りに及ぼす影響過程について議論する。また、今後の展望についても述べる。

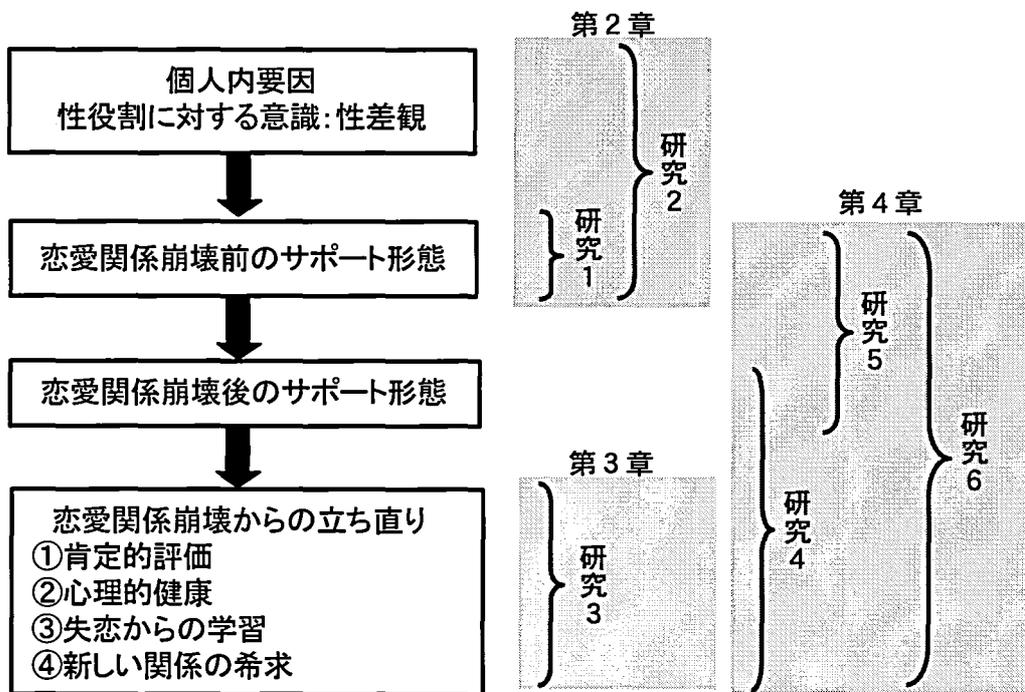


Figure 1-2 本論文において検討する枠組み

12. 本章の要約

はじめに、恋愛関係崩壊に関する先行研究を概観し、対象喪失研究からの理論的示唆についても考慮したうえで、恋愛関係崩壊からの立ち直りを「恋愛パートナーから心が離れ、恋愛関係崩壊を肯定的に捉えることができること」と定義した。また、恋愛関係崩壊後の立ち直りを促進する要因としてソーシャル・サポートに着目する理由について述べ、特に、ソーシャル・サポート源の多様性が重要である可能性について示唆した。最後に、恋愛関

関係崩壊に関する先行研究をジェンダー差という観点から概観すると、女性より男性の立ち直りが困難であるというジェンダー差が認められることを示した。そして、これらのジェンダー差の背景に恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態のジェンダー差が存在する可能性を示唆し、性差観について着目することを述べた。これらの論拠に基づいて、本論文の枠組みを示した。

第2章

対人関係におけるソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性に関する検討

本章の目的は、対人関係ネットワークからのサポート受容という観点から、対人関係における恋愛パートナーの重要性にジェンダー差があることを確認することである。第1章でも述べたように、恋愛関係崩壊に関する多くの先行研究では、恋愛関係崩壊からの立ち直りにジェンダー差が認められている。概して、女性よりも男性のほうが恋愛関係崩壊からの立ち直りが困難であることを示唆する研究が多い。本論文では、その原因の1つとして性役割に影響されたソーシャル・サポート受容をとりあげる。研究1では、現在、恋愛関係にある大学生を対象に、ソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性にジェンダー差が認められるか検討を行なう。また、研究2では、ソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性に関するジェンダー差だけではなく、ソーシャル・サポート源の選択に個人差を生じさせる要因として、性役割に対する意識（性差観）に着目した検討を行なう。

研究1 ソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性に関する検討

ージェンダー差に着目してー

問題

研究1では恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を与えると予測される恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポートの受容に関して、どのようなジェンダー差が認められるのか検討する。

第1章で述べたように、恋愛関係崩壊に関する先行研究においては多くのジェンダー差が認められている。恋愛関係崩壊の立ち直りにジェンダー差が生じる原因として、①性役割の内在化、②コミットメントのジェンダー差といった2つの理論的示唆が提唱されている。しかし、これらの理論的示唆から導かれる予測は、全く異なるものである。性役割の内在化を原因とする理論的示唆から導かれる予測は、親密な他者と関係を維持することの重要性が高いのは男性より女性であるため(e.g., Cross & Madson, 1997; Kenny et al., 1993)、恋愛関係崩壊によって被るダメージが大きいのは男性より女性であることから、女性の方が立ち直りにくいというものである。一方、コミットメントのジェンダー差を原因とする

理論的示唆から導かれる予測は、女性よりも男性の方が恋愛関係初期から強いコミットメントを感じやすく (e.g., 松井他, 1990), 恋愛関係の維持を重要視するため、恋愛関係崩壊後、女性より男性の方が立ち直りにくいというものである。

このような2つの理論的示唆から導かれる予測の複雑さを反映して、実際の恋愛関係崩壊からの立ち直り研究においてもジェンダー差に関する結果は一貫していない。これらの先行研究を概観すると、恋愛関係崩壊によって、女性は男性よりも傷つきやすいが(e.g., Monroe et al., 1999; Mearns, 1991), 恋愛関係崩壊後の対処行動が優れているため(e.g., Baumeister & Sommer, 1997; Sprecher, 1994), 恋愛関係崩壊後の適応状態については男性より女性の方が良好であると推測される。すなわち、男性より女性の方が恋愛関係崩壊による傷つきは大きいですが、同時に立ち直りも良好だと考えられるのである。

それでは、男性と比較して、女性の方がなぜ恋愛関係崩壊後の適応状態が良好なのだろうか。また、恋愛関係崩壊後の適応状態を左右する要因とは何であろうか。これまで、対象喪失や恋愛関係崩壊経験からの立ち直りを促進する要因として、小此木 (1997) は、①安定した環境、②対象喪失を経験した者の心の発達、③耐え難い苦痛を感じている心を支え、助ける依存対象の存在が必要であると述べている。また、Harvey(1995) は、①喪失経験の再解釈、②親密な他者への喪失経験の告白を挙げている。さらに、Fraizer and Cook (1993) は、①未練の低さ、②自尊心、③ソーシャル・サポートを挙げている。このように、恋愛関係崩壊からの立ち直りを促進する要因は、個人の発達段階や特性、失った恋愛関係への感情、対人的な要因など様々である。しかし、これらの研究者たちは共通に、恋愛関係崩壊からの立ち直りを促進する要因として、「サポートしてくれる他者の存在」について触れている。また、恋愛関係崩壊への対処として、男性は回避的もしくは自己信頼的対処をとりやすく、女性は社会的対処をとりやすいという結果も得られている (e.g., 加藤, 2005)。男性より女性の方が恋愛関係崩壊からの立ち直り状態が良いことを考慮すると、恋愛関係崩壊からの立ち直りには他者からサポートを受けることが必要不可欠であると考える。

以上のように、恋愛関係崩壊後からの立ち直りには、他者から受けるサポートが影響を与えることが予測される。ソーシャル・サポートとは、ある個人を取り巻く様々な人からの有形・無形の資源の提供 (南・稲葉・浦, 1988) と定義される。ソーシャル・サポートには、個人の心理的な不快感を軽減したり、自尊心の維持・回復を促すような機能を提供する「情緒的サポート」と、個人が直面している問題そのものを直接的・間接的に解決する

ための機能を提供する「道具的サポート」の2種類がある。この2種類のうち、特に、恋愛関係崩壊時に慰めや励まし、ありのままの気持ちの受容などが必要であることを考えると、恋愛関係崩壊からの立ち直りと直接関係があるソーシャル・サポートは、主に情緒的サポートであると考えられる。

ソーシャル・サポートの授受については様々なジェンダー差が認められている。たとえば、女性は男性より多様なソーシャル・サポート源を有していること(e.g., Leavey, 1983; 嶋, 1993; 和田, 1998)、高齢者において、女性は多様な関係からサポートを受けるが、男性は配偶者からのサポートに頼ること(Antonucci & Akiyama, 1987; 野辺, 1999)、男性は男性のパートナーより女性のパートナーに対してより親しい自己開示を行なうこと(Shaffer, Pegalis, & Bazzini, 1996)、男性にとってサポートを求める抵抗感が、男性が相手の場合より女性が相手の場合の方が少ないこと(Nadler et al., 1984) などである。

このような先行研究をふまえるならば、女性は恋愛関係が維持されている間も、恋愛パートナーを含めた多様なソーシャル・サポート源を維持し続け、恋愛パートナーはもちろん、友人や家族などからサポートを受容すると考えられる。一方、男性にとって女性は、そもそも自己開示しやすく、サポートを求める抵抗感が少ない相手であり、特に自分に好意を抱いている恋愛パートナーからサポートを受容することは容易いと推測される。したがって、恋愛パートナーのサポート源としての重要性は、様々な関係からサポートを受容できる女性に比べ、男性にとって特に高いと考えられる。そこで、研究1では恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を与える恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポートについて、以下のよう

予測

男性は他の関係より恋愛関係からソーシャル・サポート(特に、情緒的サポート)を得るが、女性は恋愛関係だけでなく多様な関係からソーシャル・サポートを得る

具体的な予測の検討方法について以下に記す。ソーシャル・サポートには、ソーシャル・ネットワークの特徴から捉えられる「構造的測度」と、実際に行われる対人的相互作用の内容から捉えられる「機能的測度」という2側面がある。また、機能的測度については、サポートが必要な時にどの程度入手可能だと思われるか、すなわち「利用可能性」の観点からサポートを捉える「知覚されたサポート」と、「サポート行動が実際にどの程度行われたか」という観点からサポートを捉える「実行されたサポート」という2種類に区分できるが(橋本, 2005b)、研究1では機能的測度の中でも実際に対人関係の中で行われているサ

サポート行動を反映する「実行されたサポート」について測定する。具体的には、家族（同性/異性）・友人（同性/異性）・恋人といった重要なネットワークメンバーを同定し¹、そのメンバーから受けているサポート（情緒的/道具的）について評価を求める。そして、現在、実際に恋人がいる者を対象とし、恋人と他の関係からのサポートを比較することによって、サポート形態のジェンダー差を検討する。

方法

調査協力者 質問紙の回答者は393名であった。回収率は53.7%であった。393名のうち、予測1を検討するために、「恋人」という関係からのサポート項目について回答していた、現在、恋人がいる大学生146名（男性56名、女性90名）を分析対象とした。恋人がいる大学生の平均年齢は20.39歳($SD=1.27$, レンジ18-25)であった。

手続き 2005年6月から2006年2月にわたり、4年制H大学及び4年制K大学の講義時間に質問紙及び封筒を配付し、「親密な対人関係」に関する研究の一環として、調査への参加を依頼した。依頼の際、プライベートな質問項目が含まれているため、自宅にて回答し、自分で封筒に封をしたうえで、1週間後の講義時間に提出する、もしくは設置されたポストに提出するよう教示し、匿名性に配慮した。また、思い出すことで不快な思いをする場合、その質問には回答する必要がないことについても教示した。

質問紙

1)各対人関係から提供されたサポートの測定

友人（同性/異性）、恋人、家族（同性/異性）という5つの関係について、普段の生活の中で、会う回数に関係なく最も重要な人を各1名想起させ、その人物を「Aさん」と表記した。なお、該当する人物がいない場合は、無理に挙げなくてもよいことについても表記

¹ 5つの関係を測定した理由は以下の通りである。①重要なサポート源として、友人、母親、配偶者、きょうだい、子ども、父親という順で挙げられることが示されており(Griffith, 1985), 実際、機能的なソーシャル・サポート源として（同性と異性の区別は様々であるが）家族、友人を測定している研究も多いため(e.g., 嶋, 1991, 1992; 和田, 1992; Davis, Morris, & Kraus, 1998), これらの5つの関係を選択した。②本研究は、恋愛関係崩壊経験前の恋人へのサポートの依存度が、その後の立ち直りを規定するという予測を検討する端緒となる研究であるため、恋愛関係からのサポート提供とその他の関係からのサポート提供を比較することを目的としていた。そのため、各関係の親密さを統制する必要があり、今回は親密な関係に絞って測定した。

した²。次に、大学生及び成人を対象に家族と友人からのソーシャル・サポートを測定するために用いられてきた福岡・橋本（1997）のソーシャル・サポート尺度より6項目を抜粋した。そして、「以下の項目のような援助をどの程度Aさんからしてもらっていますか」と尋ね、5件法で回答を求めた³。

情緒的サポート($\alpha > .81$)は、「私が落ち込んでいる時、元気づける」、「私が精神的にショックで動揺しているときなぐさめる」、「私がやっかいな問題に頭を悩ませているとき、冗談を言ったり、一緒に何かをやったりして、私の気をまぎれさせる」などの3項目であった。道具的サポート($\alpha > .74$)は、「私が忙しくしている時、ちょっとした用事(家事や簡単な仕事など)の手助けをする」、「私に引越しなどの大がかりな用事があるとき、その手伝いをする」、「私が病気で数日間寝ていなくてはならないとき、看病や世話をする」などの3項目であった。情緒的・道具的サポート各3項目の平均得点を各関係ごとに算出して、分析に用いた。

結果

まず、重要な家族として挙げられた関係について述べると、同性家族で父21.2%、母45.2%、兄15.1%、姉15.1%、弟0.7%であり、異性家族では、父41.8%、母28.1%、兄16.4%、姉8.9%、妹0.7%となっており、父/母もしくは兄/姉などが中心であった。

予測について検討するために、2（性別：参加者間）×5（関係：参加者内）の繰り返しのある2要因分散分析を行い、恋人の情緒的サポート源としての重要性にジェンダー差があるか検討した。その結果、性別と関係の交互作用が有意であった($F(4,125) = 12.37, p < .01$; Table 2-1)。下位検定の結果、有意であった部分について述べる。まず、男性におい

²分析対象者のうち、同性友人の無回答は2名(1.4%)、異性友人10名(6.8%)、同性家族4名(2.7%)、異性家族6名(4.1%)であった。

³本研究で用いた福岡・橋本（1997）によるソーシャル・サポート尺度は、大学生及び成人における家族と友人のソーシャル・サポートを測定するための項目として用いられている（福岡，1999，2000）。この尺度の情緒的サポート項目については、わが国でもっとも参照されることの多い久田・千田・箕口（1989）とも共通点が多く、道具的サポートについても和田（1992）、嶋（1991）などと類似した項目となっている。本来、アドバイス・指導、なぐさめ・励まし、物質的・金銭的援助、具体的行動による援助といった4つの下位因子が想定された12項目の尺度であるが、情緒的サポートのみに特化した9項目を用いた研究（福岡，1999）や情緒的内容3項目、手段的内容3項目といった6項目を用いた研究（福岡，2000）も存在している。本研究では、①5つの各関係の持つ情緒的サポート・道具的サポート機能を測定する必要があったが、回答者の負担を考慮し、質問項目数をできるだけ少なく抑える必要があったこと、②日常的なサポートでありながら、恋愛関係崩壊時にも影響するようなサポートを測定する必要があったことから、「なぐさめ・励まし」及び「具体的行動による援助」に特化したソーシャル・サポート尺度として用いた。

では、同性友人($M=3.44$), 異性友人($M=3.23$), 同性家族($M=2.78$), 異性家族($M=3.46$)と比較して恋人($M=4.44$)の情緒的サポート量が最も高かった($p<.019$). 一方、女性においても恋人($M=4.40$)の情緒的サポート量は高く、異性友人($M=3.71$), 同性家族($M=3.89$), 異性家族($M=3.24$)よりも恋人から情緒的サポートを受けていた($p<.01$). しかし、恋人($M=4.40$)と同性友人($M=4.08$)との間に差がなく、異性友人($M=3.71$, $p<.05$)や異性家族($M=3.24$, $p<.01$)より同性友人から情緒的サポートを受けていた。次に、男性より女性の方が同性友人($p<.01$), 異性友人($p<.05$), 同性家族($p<.01$)から情緒的サポートを受けていたが、恋人と異性家族においては差が認められなかった。よって、予測は概ね支持された。

Table 2-1 情緒的サポートの平均値と標準偏差

	同性友人	異性友人	恋人	同性家族	異性家族
男性	3.44	3.23	4.44	2.78	3.46
(n=49)	(0.13)	(0.15)	(0.11)	(0.17)	(0.19)
女性	4.08	3.71	4.40	3.89	3.24
(n=81)	(0.10)	(0.12)	(0.09)	(0.13)	(0.15)

()内が標準偏差

探索的に、道具的サポートについても同様の分析を行った。その結果、性別×関係の交互作用が有意であった($F(4,127) = 12.85$, $p<.01$; Table 2-2)。男性においては、同性友人($M=2.39$), 異性友人($M=1.92$)と比較して、同性家族($M=3.57$), 異性家族($M=4.05$), 恋人($M=3.84$)からの道具的サポート量が高かった($p<.01$)。また、同性家族より異性家族から道具的サポートを受けていたが($p<.05$), 恋人との間には差は認められなかった。女性においては、他の関係と比較して、同性家族($M=4.33$)の道具的サポート量が最も高かった($p<.01$)。また、女性においては、恋人($M=3.46$)と異性家族($M=3.51$)からのサポートが同性友人($M=2.36$), 異性友人($M=2.13$)の道具的サポートより高かった($p<.01$)。最後に、女性より男性の方が異性家族($p<.01$)からの道具的サポートを受けており、男性より女性の方が同性家族($p<.01$)からの道具的サポートを受けていた。

Table 2-2 道具的サポートの平均値と標準偏差

	同性友人	異性友人	恋人	同性家族	異性家族
男性	2.39	1.92	3.84	3.57	4.05
(n=51)	(0.16)	(0.15)	(0.17)	(0.15)	(0.14)
女性	2.36	2.13	3.46	4.33	3.51
(n=81)	(0.13)	(0.12)	(0.14)	(0.12)	(0.11)

()内が標準偏差

考察

予測は概ね支持された。男性は他の関係より恋愛パートナーから提供される情緒的サポート量が最も高いのに対し、女性は恋愛パートナーと同性友人の情緒的サポート量が同程度に高かった。この結果は、男性より女性の方が多様な対人関係ネットワークを有していることや(e.g., Leavy, 1983; 和田, 1992, 1998), 女性は多様な関係からサポートを受けるが、男性は配偶者からのサポートに頼る(Antonucci & Akiyama, 1987; 野辺, 1999) ことを示した先行研究と一貫した方向にあり、婚姻関係ほどには社会的制約のない恋愛関係においても同様のジェンダー差が見られることが明らかになった。また、女子は同性友人と個人的な悩みや家族関係、恋愛関係などの対人関係に関する話題についてよく話し、男子はスポーツや趣味など活動にまつわる話題についてよく話すことが示唆されている(Caldwell & Peplau, 1982)。このような知見をふまえると、男性と比較して、女性の方が同性友人に対して悩みを打ち明けやすく、情緒的サポートを受けるという解釈も可能であるかもしれない。一方、探索的に行なった道具的サポートについては、性別に関わらず女性の家族が重要なサポート源であることが示唆された。これらの結果は、女性に比べて男性の方が、特に情緒的サポートを恋愛パートナーに依存しがちであることを示唆している。ただし、研究1では、道具的サポートの項目が病気の看病、家事や簡単な仕事の手助けといった家庭という場面を想定しやすい項目であったため、女性家族の重要性が高くなった可能性がある。したがって、道具的サポート形態におけるジェンダー差については家庭という場面に限定されない項目を加えたうえで、今後も引き続き検討されるべきであろう。

また、これらのジェンダー差が認められる原因として、性役割の影響が考えられる。橋本(2005a)によると、女性役割はサポート授受を促進するため、女性や女性性の高い人は、ストレス直面時にサポートを得やすくなるという。一方、男性役割は、サポート希求や入手を困難にするため、男性や男性性の高い人は、ストレス直面時にサポートを得にくいという。理論上、どちらの役割を内在化するかは性別とあまり関連しないはずであるが、社会からの期待に沿って、自分の性別と一致した役割を内在化しやすいと考えられる。

ただし、性役割の内在化には個人差が認められる。特に、青年期は性的成熟の進行とアイデンティティの確立に特徴づけられ、ジェンダー・アイデンティティへの関心も高まる時期である。この時期には、それまで身につけてきた性役割行動、性役割観を再吟味し、自分が女性として、男性としてどう生きていくべきかという「自分なりの」ジェンダー・アイデンティティの模索が行なわれる(無藤他,1995)。そのため、性役割の内在化の程度

や、自分とは異なる性別の役割などについての価値観が個人によって異なり、これらの価値観や考え方が対人関係の構築やソーシャル・サポートの授受に影響を与えると考えられる。したがって、研究2では、性役割に対する意識（性差観）についても考慮し、ソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性について更なる検討を行なう。

研究2 性役割に対する意識がソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性評価に及ぼす影響

問題

研究1では、ソーシャル・サポート源としての恋愛パートナーの重要性にジェンダー差が認められるか検討を行なった。その結果、男性は情緒的サポートを他の関係より恋愛関係から得ているのに対し、女性は恋愛関係と同性友人の両方から得ているという結果が得られた。この結果より、ソーシャル・サポート源（特に、情緒的サポート源）として主な機能を果たすことから、女性より男性にとって恋愛パートナーの重要性が高い可能性が示された。

研究1で得られた結果は、序論で述べた本論文の主張を支持する方向の結果であるが、男性もしくは女性であるという生物学的な要因のみにソーシャル・サポート源の選択が規定されるとは考えにくい。むしろ、このようなプロセスにはある程度の個人差が存在すると考えられる。そこで、研究2では、ソーシャル・サポート源の選択に個人差を生じさせる要因として性役割に対する意識に着目し、検討を行なう。その際、①ソーシャル・サポートを異性に頼りやすいというジェンダー差は、特に情緒的サポートで認められやすいこと(e.g., Antonucci & Akiyama, 1987; 和田, 1992; Hays & Oxley, 1986), ②研究1の結果より、恋愛中のソーシャル・サポート源の選択に関するジェンダー差は情緒的サポートのみ認められたことをふまえ、情緒的サポートに着目する。

性役割とは、ある文化や社会において男性と女性にそれぞれふさわしいと期待されている行動特性やパーソナリティ特性に関する期待や規範を指す(鈴木, 1996)。これまで心理学においては、男女に期待される性役割に関して、男性性・女性性など性格特性を扱う性役割認知・性役割観に関する研究や、“男は仕事、女は家庭”などの性役割分業に対する態度を扱う性役割態度などの研究が行なわれてきた(伊藤, 1997)。性役割に関する概念は実に様々なレベルや側面から捉えられている。主な概念について以下に述べる。

まず、前者の研究においては、自己の性別についての基本的確信や自分自身の男らしさ・女らしさに対する自己認知や自己評価である性役割同一性(sex role identity)を含むジェンダー・アイデンティティ(gender identity)、及び性別化された自己概念である性役割パーソナリティなど、性役割認知に関する概念が検討されてきた。また、性に基づく社会からの役割期待の認知、および性役割に関する自己の価値観である性役割観についても検討が行なわれている。一方、後者の研究においては、性役割に対して、一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向である性役割態度(東・鈴木, 1991)について検討されている。さらに、人が様々な行動様式、人格特性、態度、意識などを性別化して捉えるための枠組みに関する研究も存在する。Bem(1981)は、多くの刺激情報の中から特に性と結びついた情報に注意を向け、記憶し、構造化するための1つの情報処理をジェンダー・スキーマと呼び、性に関するあらゆる情報がこのジェンダー・スキーマによって処理されると考えた。このジェンダー・スキーマの1つのあらわれとして、伊藤(1997)は性差観という概念を提唱している。性差観とは、人が自分を取り巻く環境を認知する際に使用する性(ジェンダー)に関する認知的枠組みのことである。

このように様々なジェンダーに関する概念が提唱されており、これまで多くの先行研究において、性役割パーソナリティとソーシャル・サポートの授受との関連が検討されてきた。たとえば、Burda, Vaux, & Schill(1984)は、大学生を対象に調査を行っており、男性性と女性性を共に内在化している両性具有型(Androgynous)及び伝統的女性型(Feminine)が、伝統的男性型(Masculine)及び未分化(Undifferentiated)より対人関係全体からの情緒的サポートや家族からのサポートを高く評価するという結果を示している。また、Butler, Giordano, & Neren(1985)は、女性性とソーシャル・サポート希求やソーシャル・サポート知覚との間には正の関連があり、特に、ソーシャル・サポート希求との関連のほうが強いことを示唆している。これらの結果より、女性性はソーシャル・サポートの希求や受容と関連があるが、男性性とは関連があまり認められないと考えられる。

一般的に、人は生物学的性に従って社会化され、生物学的性に沿った性役割を内在化しやすい環境にあるため、性役割パーソナリティとソーシャル・サポートの授受との関連を反映した結果は、ジェンダー差としても認められる。たとえば、女性は男性よりソーシャル・サポートの利用可能性や実行頻度を高く評価する傾向にあり、多くのソーシャル・サポートを受けることが心理的健康につながることを示されている(e.g., Antonucci & Akiyama, 1987; 嶋, 1992; 尾見, 1999)。一方、男性においては友人関係からのサポート

だけが心理的健康に影響を与え、家族からのサポートは心理的健康に影響していないことや(福岡・橋本, 1997), 結婚後, 配偶者のサポートのみを高く評価する傾向が示されており(Antonucci & Akiyama, 1987; Vaux, 1985), ソーシャル・サポート源及びその効果も女性と比較して限定的である。男性は期待されたジェンダー役割に違反し, 他者から嘲りを受けることを恐れており, 女性と比較して他者からの援助を期待しないと考えられる。

以上の先行研究をふまえるならば, 個人が性役割をどの程度内在化しているか, 性役割をどの程度重要であると評価しているかといった性役割に対する意識がソーシャル・サポートの授受に与える影響は大きいと考えられる。それでは, ソーシャル・サポート授受と最も強く関連する性役割の側面は何であろうか。

ソーシャル・サポートの授受を行なう際, 自分自身がソーシャル・サポートをどの程度期待するか, ソーシャル・サポートの授受をどの程度行うべきであるかといった個人のパーソナリティや個人的信念に関わる判断ばかりがなされるわけではないだろう。むしろ, ソーシャル・サポートの授受の際には, 誰が問題解決のためのソーシャル・サポートを提供することが可能か, 誰からソーシャル・サポートを受容すべきかといった他者に対する態度や信念に関わる判断がなされると考える。したがって, ソーシャル・サポートの授受と性役割パーソナリティとの関連を検討するだけでは不十分であると考え。また, 先行研究においては, 性役割パーソナリティと実際の性役割行動(Orlofsky & O'Heron, 1987) や性役割観(Spence & Helmreich, 1978) との関連が薄いことが指摘されている。実際, 先述した Butler et al.(1985)で得られた結果についても, 女性性とソーシャル・サポート希求との関連($r=.37$) 及びソーシャル・サポート知覚との関連($r=.19$) の両方において, その関連は中~弱程度であり, それほど強くない。以上より, ソーシャル・サポート授受について検討する場合, 性役割パーソナリティではなく, 性役割行動や性役割態度などに着目する必要があると考える。特に, 伊藤(1997) は性差観(ジェンダー・スキーマ) が性役割態度を規定し, その態度に基づいて性役割の選択が行なわれることを明らかにしており, 性差観を測定することが性役割態度や性役割に基づく行動の予測には有効であることを示唆している。研究2で検討するソーシャル・サポートの受容も性役割に基づく行動の1つであると考えられるため, 性差観との関連を検討することは有意義であると考え。したがって, 研究2では, 恋愛パートナーにソーシャル・サポートを求めらる程度に影響を与える要因として, 性差観に着目する。

ただし, 伊藤(1997)の性差観尺度については, 否定的な印象を与える測定項目が認め

られ (i.g., 女性は視野がせまい, 女が人前でタバコを吸うのは好ましくない), 調査協力者の回答傾向に影響を与えることが予想される。そこで, 研究2では, 伊藤 (1998) によって性差観と関連が強いことが見出されている性差意識尺度を基にした尺度を用いて検討を行なう。性差意識尺度は, 身体領域 (スピード, 持久力, 筋力, 敏捷性・瞬発力, 身体・生理), 内的領域 (勉強・学力, 性格, ものの考え方・価値観) の2因子からなるが, 特に, 内的領域に関する性差意識と性差観との関連が強いことが明らかとなっており, 非常に類似した概念を測定することが可能である。そこで, 研究2では内的領域に関する性差意識を性差観 (ジェンダー・スキーマ) として用いる。

最後に, 研究2の予測について述べる。前提として, 個人の性差観の強さは, 自分と相手の性別の違いに着目し, 様々な情報を性別の違いによって処理しようと動機づけられる傾向に影響すると考える。これまでの先行研究において, 性差観の強い者は, ①生育段階において早い段階から, 内的領域に関する性差意識が高く, 社会的地位や職業における男女間の差異を能力によるものだと考えること, ②自分とは異なる性として異性の存在を強く意識し, 異性への関心も異性からみた自己への関心も高いことが示唆されている (伊藤, 1998)。おそらく性差観の強いものは, 「男は仕事, 女は家庭」といった役割を果たすため, 男性には肉体的・精神的に強く, 独立心が強く, 感情を表さないとといった「男性性」が, 女性には従順で, 依頼心が強く, 気配りができるといった「女性性」が求められることを強く意識していると考えられる。したがって, 性差観の弱い男性に比べて, 性差観の強い男性は, 男性は強く自立的であるべきで, 他者からサポートを受けるべきでないという考えに基づき, 情緒的サポート源をあまり持たないと予測する。一方, 性差観の弱い女性に比べて, 性差観の強い女性は, 女性には従順で依頼心が強いことを許されているという考えに基づき, 多くの情緒的サポート源を持っていると予測する。

それでは, 実際のサポート受容についてはどのように考えられるだろうか。まず, 恋愛関係という関係が情緒的サポートの受容に与える影響を考慮すると, 人には恋愛・配偶者関係にあるパートナーが他の関係から情緒的資源 (気遣いや配慮) を得ることを防衛する感情が備わっているという知見が得られており (Buunk & Hupka, 1987), 恋愛関係における情緒的サポートの交換は望ましいという規範が存在することが推測される。そのため, 性別に関わらず, 恋愛関係が維持されている間は, 情緒的サポートを恋愛パートナーから得やすいと予測される。さらに, 恋愛関係においては, 性役割の内在化の程度に関わらず, 性役割に沿った行動をとりやすいことが示唆されており (土肥, 1996), 性差観の強い者は

より性役割規範に対する関心が高いため、性役割に沿った行動をとりやすくなると推測される。したがって、性差観の強い女性は、女性は依頼心が強いという性役割規範を恋愛パートナーに示すため、情緒的サポートを他の関係より恋愛パートナーから得ると予測する。一方、Nadler et al.(1984)は、男性は、サポート提供者が男性である場合より女性である場合の方がサポートを求めやすく、サポートの受容についてポジティブな反応を示すという結果を示している。このような結果が得られた理由として、女性は他者に対して親切にするべきであり、他者の世話をするべきであるという性役割が存在し、このような性役割にサポート行動が反しないためであると考察されている。特に、①恋愛関係は性役割に従って行動しようと強く動機づけられる状況であること(土肥, 1995)、②結婚後、男性は配偶者のサポートのみを高く評価すること(Antonucci & Akiyama, 1987; Vaux, 1985)などの結果をふまえるならば、恋愛関係という状況においてこれらの傾向は強くなると考えられる。性差観の強い男性は、他者をサポートするべきであるという女性役割を強く意識するため、基本的には、同性より異性に情緒的サポートを求めようとするだろう。しかし、男性は強く自立的であるべきだという規範を強く意識しているため、多くの異性から情緒的サポートを受容するというより、特に、親密な恋愛パートナーに多くの情緒的サポートを依存すると予測される。これらの予測を以下に整理する。

予測

1. 性差観の強い男性は、性差観の強い女性、性差観の弱い男性および女性と比較して、情緒的サポート源が少ない(特に、同性の情緒的サポート源)
2. 恋愛関係にある者は、性別に関わらず、性差観の強い者は性差観の弱い者と比較して、恋愛パートナーに情緒的サポートの多くを依存する

方法

調査協力者 質問紙の回答者は174名であった(男性92名、女性82名)。回収率は78.7%であった。「恋人」という関係からの情緒的サポートについて回答していた、現在恋人のいる大学生は68名(男性24名、女性44名)であった。平均年齢は20.31歳($SD=0.91$, レンジ19-24)であった。

手続き 講義時間に質問紙を配布し、「親密な対人関係」に関する研究の一環として、調査への参加を依頼した。ソーシャル・サポート尺度への回答方法が難しかったため、その

部分については回答方法を説明しながら、講義室内で回答してもらった。残りの質問項目についてはプライベートな質問項目が含まれているため、自宅にて回答し、封筒に封をしたうえで、1週間後の講義時間に提出するよう教示した。

質問紙 質問紙は表紙と以下に示す尺度によって構成された。表紙には、研究の目的と回答にあたっての注意点を記載した。初めに、プライベートなことについて尋ねる質問項目があるが、個人が特定できる形式で研究結果が公表されないことを記載した。

1) 各対人関係から受容している情緒的サポートの測定

人間関係について「会う回数とは関係なく、あなたが身近に感じる人との関係」と定義し、例として、家族、友人、恋人、先輩/後輩などを挙げた。なお、該当する人物がいない場合、無理に挙げなくてもよいことについても表記した。

①対人関係からの情緒的サポートの受容

「あなたに共感してくれることやあなたを信頼してくれることが多く、あなたを大切に思ってくれる人は誰ですか」という質問項目にあてはまる人物のイニシャルをできるだけたくさん挙げてもらった（最高10人まで）。次に、性別及び関係（友人/家族/恋人など）について回答を求めた。最後に、その人々から受けているサポート量の全てを100%とすると、各人物から受容している情緒的サポートはどの程度か、おおよその割合を割り当ててもらった。

なお、情緒的サポート人数とは、調査協力者が情緒的サポート提供者として挙げた人物の数である。次に、恋人からの情緒的サポート率とは、情緒的サポート提供者として挙げた人物全員から受けているサポートを100%として、恋人から受けているサポートのパーセンテージを指標化したものである。

②情緒的サポート満足度

「現在、あなたはこのようなサポートを、どの程度十分に受けられていますか？」という1項目について7件法で尋ねた。

2) 性差意識尺度

伊藤（1998）を参考に、「持久力（長くもちこたえる力）」、「筋力」、「敏捷性（動作のすばやさ）・瞬発力」、「身体・生理」、「行動力」、「勉強・学力」、「対人関係」、「性格」、「表現力（感情や精神など内面的なものを目に見える形で表す力）」、「感情」、「ものの考え方・価値観（ものを評価する基準）」の11項目からなる尺度を用いた。伊藤（1998）と異なる点

は、「敏捷性・瞬発力」と類似していたため、「スピード」を除外し、「行動力」、「対人関係」、「表現力」、「感情」の4つを加えたことである。これらの項目について、男女の差異を意識する程度を、全く意識しない（1点）～非常に意識する（6点）までの6件法で回答するよう求めた。

結果

予測1については、回答不備者8名を除いた165名（男性86名、女性79名）を対象に分析を実施し、予測2については、情緒的サポート提供者として恋人を挙げていた、現在恋人のいる68名（男性24名、女性44名）について分析を実施した。

1) 性差意識尺度の因子分析

まず、性差意識尺度の計11項目について因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。固有値の減衰、因子の解釈のしやすさなどを考慮し、2因子を抽出した。累積寄与率は43.41%であった。パターン行列を示す(*Table 3-1*)。第1因子は「表現力」、「感情」、「性格」などの項目に高く負荷しているため、内面的性差意識因子と名づけた。追加した項目以外は、伊藤(1997)の内的領域に関する性差意識とほぼ同様である。第2因子は「筋力」、「身体・生理」などの項目に高く負荷しているため、外面的性差意識因子と名づけた。伊藤(1997)の身体的領域に関する性差意識とほぼ同様である。また、下位尺度の信頼性については、内面的性差意識では $\alpha=.85$ であったのに対し、外面的性差意識因子は $\alpha=.62$ であった。以下の分析では、各因子に含まれる項目の平均得点を下位尺度得点として使用した。

2) 性差意識尺度に関する予備的分析

予測の検討を行なう前に、性差意識尺度の平均値について示す。まず、データ全体(165名)の平均値は、内面的性差意識3.46(男性3.73、女性3.17)、外面的性差意識4.17(男性4.01、女性4.33)であり、外面的性差意識の方が高かった。次に、恋愛関係にある者(68名)の平均値は、内面的性差意識3.25(男性3.35、女性3.18)、外面的性差意識4.21(男性3.98、女性4.34)であり、恋愛関係にある者についても外面的性差意識の方が高かった。

研究2においてジェンダー・スキーマの指標として用いる内面的性差意識について、2(性別：参加者間)×2(恋人の有無)の分散分析を実施したところ、交互作用が有意傾

向であった($F(1,161)=3.44, p<.10$)。下位検定の結果、女性については恋人有群($M=3.18$)、無群($M=3.15$)の差はなかったが、男性の恋人有群($M=3.35$)と無群($M=3.87$)との間に差が認められた。そこで、内面的性差意識の高低群の分類については、「女性(恋人有無群) $M=3.17$ 」, 「男性恋人有群 $M=3.35$ 」 「男性恋人無群 $M=3.87$ 」の各群の平均値を基準とし、高低群に分類した。

Table 3-1 性差意識の因子分析結果と因子間相関

	内面的性差意識	外面的性差意識
9 表現力	.87	.05
10 感情	.79	.08
8 性格	.78	-.02
7 対人関係	.67	-.06
11 ものの考え方・価値観	.55	.06
5 行動力	.48	.04
6 勉強・学力	.47	-.05
2 筋力	-.11	1.00
4 身体・生理	-.02	.48
3 敏捷性(動作のすばやさ)・瞬発力	.14	.43
1 持久力(長くもちこたえる力)	.15	.30
寄与率(%)	13.76	29.64
累積寄与率(%)	13.76	43.41
信頼性(α)	.85	.62
因子間相関	内面的性差意識	.08

3) 内面的性差意識と情緒的サポート人数との関連

予測1について検討を行なう前に、従属変数となる指標について説明する。まず、情緒的サポート人数を算出した。この指標は、情緒的サポート提供者としてイニシャルが挙げた人数をカウントしたものである。また、Nadler et al.(1984)によると、男性は、サポート提供者が男性である場合より女性である場合の方がサポートを求めやすく、サポートの受容についてポジティブな反応を示すことが示唆されており、内面的性差意識が、同性の情緒的サポート提供者の人数や異性の情緒的サポート提供者の人数と関連することが考えられる。そこで、情緒的サポートにおける同性の友人・その他の数と情緒的サポートにおける異性の友人・その他の数を算出した。この指標は、情緒的サポート提供者としてイニシャルが挙げた人物のうち、友人とその他関係として挙げた人物をカウントした指標である。家族からの情緒的サポートを除外した理由は、家族からのサポートの機能にジェンダー差が存在する可能性があり、他の関係と異なる性質を持っていると判断したため

である。実際、大学生にとって家族からのサポートは女性においては心理的健康に影響するが、男性においては心理的健康に影響しないというジェンダー差が認められるという知見が得られている（橋本・福岡, 1997）。

情緒的サポート人数を従属変数とし、2（性別）×2（内面的性差意識：高/低）の参加者間の2要因分散分析を行なったが、いずれの主効果、交互作用効果も認められなかった($F(1,161) = 1.28, p = .26$)。次に、2（性別）×2（内面的性差意識：高/低）×2（情緒的サポート人数：同性友人・その他/異性友人・その他）の混合デザインによる3要因分散分析を実施した。その結果、性別×内面的性差意識×情緒的サポート人数の3要因の交互作用が有意傾向にあった($F(1,161) = 3.76, p < .10$; *Figure 3-1*)。下位検定の結果、性別や内面的性差意識に関わらず、同性友人・その他の人数が異性友人・その他の人数より多かったが($p < .01$)、性差観の高い男性($M = 0.88$)が性差観の高い女性($M = 0.38$)より異性友人・その他の人数が多かった($p < .05$)。また、性差観の低い男性($M = 3.83$)が性差観の高い男性($M = 3.03$)より同性友人・その他の人数が多い傾向にあった($p < .10$)。したがって、情緒的サポート提供者の人数には予測したような違いは認められなかったが、性差観の強い男性は性役割規範意識が強いため、基本的に同性より異性の情緒的サポート源が多くなり、性差観の低い男性はそのようなこだわりが弱いため、同性からの情緒的サポートが多いといった傾向は概ね認められる傾向にあり、予測1を支持する方向の結果が得られた。

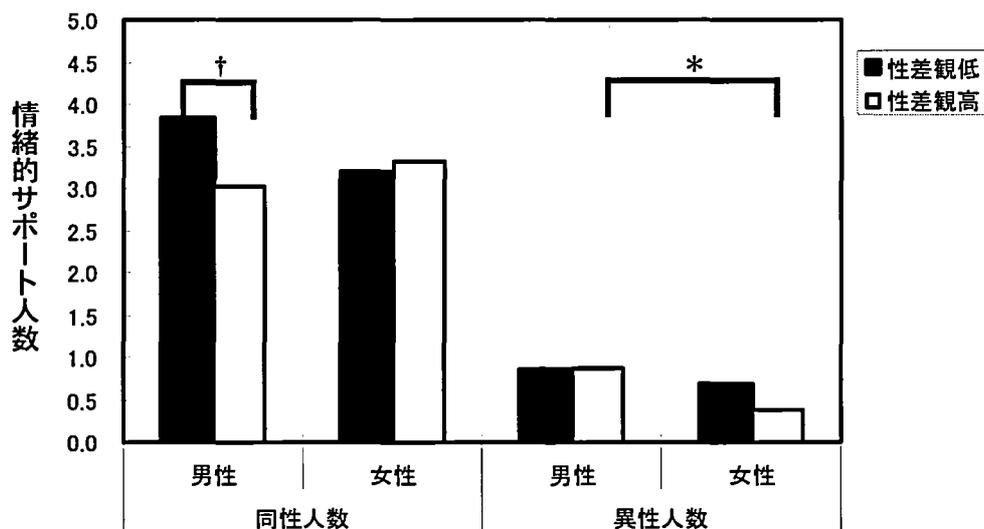


Figure 3-1 内面的性差意識×性別×情緒的サポート人数の交互作用 ($F(1,161) = 3.76, p < .10$)

† $p < .10$ * $p < .05$

4) 性差意識と恋人から提供されている情緒的サポートとの関連

予測2について検討するために、従属変数として恋人への情緒的サポート依存率を算出し、2(性別:参加者間)×2(内面的性差意識:高/低)の2要因分散分析を行なった。

恋人への情緒的サポート依存率を算出する際、調査参加者が回答した情緒的サポート人数には2~10名とばらつきがあり、恋人への情緒的サポート率に影響することが推測された。しかし、必ずしも情緒的サポート人数が少ないため、恋人への情緒的サポート依存率が高くなるとは限らず、恋人に依存して排他的になり、結果的に情緒的サポート人数が少なくなっているという両側面からの説明が可能であると考えた。そこで、情緒的サポート人数を共変量として扱わず、「恋人、友人、その他の関係から得ているサポート率の合計」を、「恋人、友人、その他(先輩、後輩、先生など)の合計人数」で割った数値を計算し、「1人あたりの情緒的サポート率(家族を除く)」を算出した。そして、その数値を恋人が上回っている程度を「情緒的サポート恋人依存率」とした。家族を除外した理由としては先述したとおりである。

分散分析を実施した結果、内面的性差意識の主効果が有意であった($F(1,64)=5.09, p<.05$)。下位検定の結果、内面的性差意識高群($M=15.52$)が、内面的性差意識低群($M=7.62$)より恋人への情緒的サポート依存率が高かった。つまり、性別に関わらず、内面的性差意識が強い者は内面的性差意識が弱い者と比較して、他の関係より恋人からの情緒的サポートに依存していることが示唆された。したがって、予測2は概ね支持された。

考察

研究2では、性に関するあらゆる情報に注意を向けるよう促し、記憶し、構造化させるジェンダー・スキーマ(Bem, 1981)の持つ機能に着目し、性差観(ジェンダー・スキーマ)の強い男性は、性差観の強い女性、性差観の弱い男性および女性と比較して、情緒的サポート源が少ないと予測した。特に、Nadler et al.(1984)の先行研究に基づくと、同性の情緒的サポート源が少なくなると予測した(予測1)。性差観の強い男性の情緒的サポート源が少ないという結果は認められなかったため、予測1は完全には支持されなかった。しかし、性役割規範意識に基づいて行動しようとする動機づけられる性差観の強い男性は、基本的に同性より異性の情緒的サポート源が多くなるが、性役割規範意識に対するこだわりが少ない性差観の低い男性は同性から情緒的サポートを受けることに抵抗がないという傾向は概ね認められる傾向にあり、予測1は一部で支持されたといえよう。

また、恋愛関係にある者は、性別に関わらず、性差観の強い者は性差観の弱い者と比較して、恋愛パートナーに情緒的サポートの多くを依存するという予測2は概ね支持された。結果として、性別に関わらず性差観の強い者は恋愛パートナーに頼りやすいという主効果が認められたが、女性と男性では性差観がソーシャル・サポートの受容に及ぼす影響過程は異なるものであると考える。「男性は強く、独立的で、女性は弱く、依存的である」という伝統的な性役割規範を意識しやすい性差観の強い女性は、同時に、女性は他者への依存が許される性であると意識しやすいと考えられ、多くの情緒的サポート源を持つことに抵抗がないと推測される。恋愛関係においても、その性役割規範に反することは自己脅威となり得るため、親密な異性である恋愛パートナーからの情緒的サポートに依存する方が適応的であろう。そのため、多くの情緒的サポートを保ちながら、恋愛パートナーからの情緒的サポートに頼る傾向が認められたと考える。一方、性差観の強い男性は「男性は強く、独立的で、女性は弱く、依存的である」という伝統的な性役割規範に反することは自己脅威となり得るため、基本的に他者から情緒的サポートを受けることに抵抗を感じやすく、情緒的サポート源をあまり持たないと考えられる。しかし、女性は他者をサポートする性であると意識しやすいため、異性からの情緒的サポートであれば、受容することの抵抗感が少ないと考えられる。特に、恋愛関係においては性役割に従って行動する傾向が高くなることが示唆されており(土肥, 1995)、恋愛パートナーからの情緒的サポートが得られやすい状況にあると考えられる。そのため、性差観の強い男性は、情緒的サポート源(特に、同性)を少なくし、恋愛パートナーから多くの情緒的サポートを受容する傾向が認められたと考える。

研究2で得られた結果は、総じてこのような過程を支持するものであった。この結果は、ソーシャル・サポート源の選択が生物学的な要因というより、性差観という個人差のある要因によって規定されるという示唆にとどまらず、ソーシャル・サポート源の多様性に関するジェンダー差は社会の性役割規範に由来するものであるという本論文の基本的な姿勢を支持するものであった。最後に、研究2の問題点と今後の展望について述べる。まず、研究2では性差観とソーシャル・サポートとの関連を検討するために、ソーシャル・サポートの受容に着目した。したがって、性差観と実際にソーシャル・サポートを受けている対人関係との関連については新たな示唆が得られたものとする。一方、性差観とソーシャル・サポートの受容の間には、男性と女性で異なる影響過程が存在する可能性も示唆された。今後、このような影響過程を明らかにするためには、Nadler et al.(1984)が測定し

たように、サポートの希求性やサポート受容への抵抗感を測定する必要があるだろう。次に、これまでの知見を整理すると、Nadler et al.(1984)の知見は質問紙実験で得られたものであり、性別以外の情報が極端に少ない状況における示唆である。また、男性の親密な異性への情緒的サポート依存に関する知見は(Antonucci & Akiyama, 1987)、既婚者を対象とした調査から得られたものであり、性役割分業がなされやすい婚姻関係で得られた知見である。これらの先行研究では、いずれもその結果の背景に性役割が存在することを示唆しており、研究2においてもこれらの知見を支持する方向の結果が得られている。しかし、恋愛関係における恋愛パートナーとの親密さは多様である可能性が高く、性役割に基づくソーシャル・サポート行動には、恋愛パートナーとの親密さという要因が影響を与えていると考えられる。特に、女性は結婚を考えるようなパートナーに対して、性役割に基づいた行動を取りやすくなる(赤澤, 1998)といった結果も得られており、今後は恋愛パートナーとの親密さ(i.g., 交際期間, 恋愛進展度, コミットメント, 熱愛度)という要因を統制したうえで、性差観の影響過程について再検討する必要があると考える。

総合考察

本章では、研究1、研究2という2つの研究をとおして、対人関係ネットワークにおけるソーシャル・サポートの受容に着目した検討がなされた。その結果、男性は情緒的サポートを他の関係より恋愛関係から得ているのに対し、女性は恋愛関係と同性友人の両方から得ているという結果が得られ、女性と比較して男性は、ソーシャル・サポート源として恋愛関係を重視するという示唆を得た(研究1)。これまで、既婚者のソーシャル・ネットワークとソーシャル・サポートとの関連を検討した先行研究は存在し、男性が配偶者をソーシャル・サポート源として選択しがちであるのに対し、女性は配偶者以外の家族、友人などをソーシャル・サポート源として選択するといった結果が報告されてきた(Antonucci & Akiyama, 1987; 川浦ら, 1996; 野辺, 1999)。しかし、婚姻関係のように、家計を共にするわけでもなく、社会的に1つのユニットとみなされ責任を共有するわけでもない、恋愛関係においても同様のジェンダー差が認められることは新たな発見である。

また、研究2において、ジェンダー・スキーマの強い男性は、ジェンダー・スキーマの強い女性より異性からの情緒的サポートが多く、ジェンダー・スキーマの弱い男性はジェンダー・スキーマの強い男性より、同性の情緒的サポート源が多いという結果が得られた。性別に関わらず、ジェンダー・スキーマの強い者は他の関係より恋愛パートナーから多く

の情緒的サポートを受けていたが、ソーシャル・サポート源の多さにはジェンダー差が認められる可能性が示唆された。

これらの結果をまとめると、男性は情緒的サポートを専ら恋愛関係から得ているのに対し、女性は恋愛関係をはじめとして、恋愛関係以外の関係からも情緒的サポートを得ており、この傾向は、特にジェンダー・スキーマの高い者において顕著である可能性が高い。その理由として、性差観が「男性は強く、自立的であり、女性は弱く、依存的である」という意識を活性化させ、男性にとっての性差観はソーシャル・サポート源を減少する機能、女性にとっての性差観はソーシャル・サポート源を拡大させる機能を持つためである。

最後に、ソーシャル・サポート源として恋愛関係のみに依存する危険性について述べる。研究2で得られた結果をふまえるならば、女性と比較して男性がこのような状況に陥りやすい。おそらく恋愛関係が維持されている間は、ソーシャル・サポート源が多様であっても、恋愛関係に依存した形態であっても、個人の心理的健康に違いはないと考えられる。しかし、恋愛関係が終わってしまった場合、この2つのソーシャル・サポート形態が心理的健康に与える影響は非常に大きいと考えられる。なぜなら、対象喪失や恋愛関係崩壊経験からの立ち直りには、援助してくれる他者の存在が不可欠であることが示唆されており(小此木, 1997; Harvey, 1995; Fraizer & Cook, 1993)、恋愛関係だけをソーシャル・サポート源としていた者は、恋愛関係崩壊によって全てのソーシャル・サポート源を失ってしまうと考えられるためである。つまり、恋愛関係崩壊から立ち直るための術を持っていないため、心理的健康度が著しく低下する恐れがあるのである。そこで、以降の章では、ソーシャル・サポート源の多様性が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について検討する。

本章の要約

本章では、対人関係ネットワークからのサポート授受という観点から、対人関係における「恋人」の重要性にジェンダー差が認められるか検討した。現在、恋愛関係にある大学生を対象に検討したところ、男性は他の関係より恋愛パートナーから提供される情緒的サポート量が最も高いのに対し、女性は恋愛パートナーと同性友人の情緒的サポート量が同程度に高いことが示された。この結果は、女性は多様な関係からサポートを受けるが、男性は配偶者からのサポートに頼るという先行研究(Antonucci & Akiyama, 1987; 野辺, 1999)と一貫した結果であり、婚姻関係ほどには社会的制約のない恋愛関係においても同

様のジェンダー差が見られることが明らかになった。このような結果の背景に、性役割観が存在する可能性について述べ、個人が持つ性差観とソーシャル・サポートの受容との関連が検討された。その結果、性別に関わらず、性差観の強い者は他の関係より恋愛パートナーから多くの情緒的サポートを受けていたが、ソーシャル・サポート源の多さにはジェンダー差が認められる可能性が示唆された。その理由として、性差観が「男性は強く、自立的であり、女性は弱く、依存的である」という意識を活性化させ、男性にとっての性差観はソーシャル・サポート源を減少する機能、女性にとっての性差観はソーシャル・サポート源を拡大させる機能を持つ可能性について述べた。

第3章 恋愛関係崩壊からの立ち直り段階尺度の確定とその妥当性の検討

本章の目的は、先行研究のレビューに基づき、これまで整理されてこなかった恋愛関係崩壊からの立ち直りを測定する尺度について、適切な尺度を確定することである。これまで様々な指標によって、恋愛関係崩壊からの立ち直りが測定されてきたが、恋愛関係崩壊後の立ち直り過程を包括的に捉えるための指標は少ない。したがって、Bowlby(1961)の提唱した対象喪失からの立ち直り過程を恋愛関係崩壊からの立ち直り過程に援用し、「離脱-再建の段階」を恋愛関係崩壊からの立ち直り指標とすることの妥当性を確認する。具体的には、恋愛関係崩壊後の立ち直り過程に関する尺度を作成し、一般的心理的健康を測定する尺度(GHQ, UCLA孤独感)及び恋愛関係崩壊後の成長との関連を検討し、恋愛関係崩壊後の立ち直り尺度の妥当性を確認する。

研究3 恋愛関係崩壊からの立ち直り段階尺度の妥当性の検討

問題

序論で述べたように、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程を十分に説明しうる恋愛関係崩壊に関するモデルは未だ提唱されていない。したがって、愛情や依存の対象を失う体験である「対象喪失」(小此木, 1997)からの立ち直りモデルを援用し、恋愛関係崩壊からの立ち直りについて議論する。

人は対象喪失を経験すると、「情動的危機の段階」、「抗議-保持の段階」、「断念-絶望の段階」といったプロセスを経て、「離脱-再建の段階」に至ると考えられている(Bowlby, 1961)。これを恋愛関係崩壊後の感情や行動に援用すると、情動的危機の段階は、恋愛関係崩壊直後の苦悩(悲しみや苦しさ)、涙があふれる、どうしたよいかわからないといったパニック、絶望感などを特徴とする段階であると考えられる。先行研究においては、悲しみ、動揺、混乱、落ち込みなど強いネガティブな情動体験(e.g., Simpson, 1987; 飛田, 1997; 和田, 2000)や抑うつ(e.g., Mearns, 1991; Monroe et al., 1999)などが検討されている。

また、抗議-保持の段階は何かにつけて別れた恋愛パートナーを思い出す、別れた恋愛パートナーともう一度交際したいと願う、別れた恋愛パートナーと会おうと試みるなど、恋愛関係が終わっているにも関わらず、その現実を否定し、恋愛関係の再構築への願いが断

ち切れない状態にあることを特徴とする段階であると考えられる。先行研究においては、「楽しかった頃を思い出す」、「何かにつけて、相手のことを思い出す」などの回顧的反応や「別れたことが信じられない」、「別れた後も相手を愛した」などの否認的反応などが検討されている (e.g., 松井, 1993; 和田, 2000)。

さらに、断念-絶望の段階になると、恋愛関係が終わったことを認めざるを得ない状況となり、ひどい落ち込みが経験されるのと同時に、このような状況へ追い込んだ別れた恋愛パートナーへの失望や幻滅、怒りや恨みなどの感情が生じる。先行研究では、「相手を避けようとした」、「よくデートした場所を避けた」など別れた恋愛パートナーの回避 (e.g., 松井, 1993; 栗林, 2001), 「相手に幻滅した」、「相手の悪口を言った」などの別れた恋愛パートナーへの失望 (e.g., 和田, 2000; 加藤, 2005), 「相手を恨んだ」、「相手に怒りを感じた」など別れた恋愛パートナーへの攻撃的な行動 (e.g., Roy, Sara, Arlene, 1993; 和田, 2000) などが検討されている。

これら3つの段階は、恋愛関係崩壊からの立ち直りに向けてのプロセスであると考えられ、崩壊してしまった恋愛関係に未だ影響を受け続けている段階である。しかし、離脱-再建の段階になると、別れた恋愛パートナーから心が離れ、場合によれば別の対象に気持ちを向けることができるようになるため、崩壊してしまった恋愛関係を肯定的に評価できる、新しい恋愛パートナーを探すといった特徴が認められるようになる。したがって、この離脱-再建の段階が「立ち直りの状態」であると考えられる。先行研究では、別の異性への接近 (松井, 1993), 別の事柄に打ち込むなどの気晴らし (e.g., 和田, 2000; 栗林, 2001), 失恋に対する肯定的な評価 (e.g., 宮下他, 1991; 石本・今川, 2003; 加藤, 2005) などが検討されている。

このような恋愛関係崩壊後の立ち直りの各段階の特徴をふまえると、恋愛関係崩壊後、情動的危機の段階、抗議-保持の段階、断念-絶望の段階にある者は、苦悩、無力感、絶望感、孤独感など様々なネガティブな情動を経験していると考えられ、心理的健康が損なわれている状態であると予測される。一方、離脱-再建の段階にある者は、崩壊してしまった恋愛関係を肯定的に評価できる状況、もしくは新たな恋愛関係に希望を持っている状況にあるため、ネガティブな情動を経験することが少なく、心理的健康も回復した状態であると予測される。これらの予測をまとめると、情動的危機の段階、抗議-保持の段階、断念-絶望の段階と心理的不健康度には正の相関が認められ、離脱-再建の段階とは負の相関が認められると考える。特に、心理的健康を反映すると考えられる孤独感については、仲間や

刺激の欠如から生じる社会的孤独感は友人の少なさから予測され、同情や愛情の欠如から生じる情緒的孤独感はデートや恋愛の相手の欠如から予測されることが示されており、恋愛関係崩壊は確実に孤独感を増加させるという(Buss, 1986)。したがって、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程のうち、情動的危機の段階、抗議-保持の段階、断念-絶望の段階と孤独感との間には正の相関が認められると考える。

また、恋愛関係崩壊後の立ち直りは恋愛関係崩壊前の関係の質に左右されることが示唆されている。たとえば、Simpson(1987)によると、恋愛関係崩壊後の苦悩は関係期間の長さ、別れた恋愛パートナーとの親密さ、代替肢の質と関連があることが示唆されている。具体的には、関係期間が長く、別れた恋愛パートナーとの関係が親密であったほど、また、他の恋愛パートナーをみつけることが困難であると感じているほど、恋愛関係崩壊後に苦悩を感じやすいことを示している。また、同様に栗林(2001)も、親密度の高かった者が別れると、悲しみや回顧の念が強く、未練がましく、自己制御(食欲や睡眠、酒の量の管理、情動の統制など)が効かなくなるという特徴を示すことを示している。さらに、Monroe et al.(1999)は、1年以内の恋愛関係崩壊が抑うつを予測することを示しており、恋愛関係崩壊からの経過期間も恋愛関係崩壊後の心理的健康を規定する要因であると予測される。恋愛関係崩壊からの立ち直り過程の各段階の特徴をふまえると、情動的危機の段階は恋愛関係崩壊初期の苦悩を反映していると考えられるため、情動的危機の段階と恋愛関係崩壊からの経過期間には負の相関があると予測する。また、情動的危機の段階、抗議-保持の段階、抗議-保持の段階と恋愛関係崩壊までの関係期間、別れた恋愛パートナーとの親密度もしくは、別れた恋愛パートナーの重要性には正の相関があると予測する。

最後に、恋愛関係崩壊後には否定的な心理的变化だけでなく、肯定的な心理的变化もみられることが示唆されており、恋愛関係崩壊後に経験されるポジティブな心理的反応にも着目すべきであろう。たとえば、最も印象に残っている恋愛関係崩壊後の心理的变化を検討した宮下他(1991)によると、もう恋愛をしたくない、異性を信じられない、自分を信じられないなどネガティブな心理的变化だけでなく、相手の気持ちや置かれている状況を考えるようになった、今までより優しい人間になれた、よい人生経験になった、交際範囲が広くなり、視野が広がったなどポジティブな心理的变化も認められるという。また、Park et al.(1996)によると、死別や恋愛関係崩壊などネガティブ・イベントを経験した場合でも、ネガティブ・イベントに関する肯定的な解釈やソーシャル・サポートなどがストレスに関連した成長を促進することが示唆されている。ここでいうストレスに関連した成長と

は、ネガティブ・イベントを乗り越えることで得られるポジティブな成果に着目した概念である。このような経験をとおして得られるポジティブな成果として、①社会的資源の質の向上（友人との関係が良好になるなど）、②個人的資源の質の向上（自己に関する評価が良くなるなど）、③新たなコーピングスキルの獲得やコーピングスキルの向上（問題解決能力の向上など）の3つを挙げている。このような知見をふまえるならば、恋愛関係崩壊後の苦悩を乗り越え、離脱-再建の段階に至ると、恋愛関係崩壊を経験したことによるポジティブな心理的变化を経験することが予測される。

以上の予測を検討するために、恋愛関係崩壊からの立ち直り段階と一般的な心理的健康（GHQ 及び孤独感）、恋愛関係崩壊の特徴（恋愛関係崩壊までの関係期間、恋愛関係崩壊からの経過期間、別れた恋愛パートナーの重要度など）、恋愛関係崩壊後の肯定的な心理的变化との関連を検討する。なお、恋愛関係崩壊後の肯定的な心理的变化については、宮下他（1991）及び Park et al.(1996)の先行研究をもとに、「恋愛関係崩壊後の成長尺度」を作成する。

予測

1. 「情動的危機の段階」、 「抗議-保持の段階」、 「断念-絶望の段階」とGHQ及び孤独感には正の相関、「離脱-再建の段階」とは負の相関がある
- 2-1. 「情動的危機の段階」と恋愛関係崩壊からの経過期間には負の相関がある
- 2-2. 「情動的危機の段階」、 「抗議-保持の段階」、 「絶望-断念の段階」と恋愛関係崩壊までの関係期間、別れた恋愛パートナーとの関係の重要性には正の相関がある
- 3-1. 「情動的危機の段階」、 「抗議-保持の段階」、 「断念-絶望の段階」と恋愛関係崩壊後の成長の否定的側面とは正の相関があり、肯定的側面とは負の相関がある
- 3-2. 「離脱-再建の段階」と恋愛関係崩壊後の成長の否定的側面とは負の相関があり、肯定的側面とは正の相関がある

方法

調査協力者 高校生以降に恋愛関係崩壊経験があり、現在、恋愛関係にない大学生50名（男性35名、女性15名）を対象とした。平均年齢は19.88歳（レンジ19～22歳）であった。

手続き 講義時間に質問紙及び封筒を配付し、「親密な対人関係」に関する研究の一環として調査への参加を依頼した。プライベートな質問項目が含まれているため、自宅にて回

答し、自分で封筒に封をしたうえで、1週間後の講義時間に提出する、もしくは設置されたポストに提出するよう教示し、匿名性に配慮した。

質問紙 質問紙は表紙と以下に示す尺度によって構成された。表紙には、研究の目的と回答にあたっての注意点を記載した。初めに、大変プライベートなことについて尋ねる質問項目があるが、コンピューターで統計的に処理するため、個人が特定できる形式で研究結果が公表されないことを記載した。また、思い出すことで不快な思いをする場合、その質問には無理に回答する必要がないことについても記載した。加えて、同様の内容について口頭でも説明した。

1) 心理的健康に関する尺度

①日本版GHQ28 (中川・大坊, 1996)

最近の身体的、心理的健康状態に関する28項目について(「私は落ち込んでいる」、「私は失望している」、「他の人への興味を失っている」など)、それぞれ0点~3点の4件法で回答するよう求めた。なお、得点が高いほど、心理的に不健康であることを示す。

②改訂版UCLA孤独感 (工藤・西川, 1983)

社会的孤独感及び情緒的孤独感という2種類の孤独感を包括的に捉えることができる改訂版UCLA孤独感尺度(「私には人とのつきあいが無い」、「親しい人はもう誰もいない」、「私は、孤立しているように思う」など)20項目について、決して感じない(1点)~しばしば感じる(4点)までの4件法で回答するよう求めた。

2) 恋愛関係崩壊に関する尺度

「恋愛とは、お互いに同意のうえで、特定の異性と交際した経験とする。片思いとは、特定の異性に思いを寄せた経験とする」と定義し、質問紙に記載した。また、「失恋とは恋に破れること」と定義し、「自分から別れを切り出した場合、相手から別れを切り出された場合、どちらからともなく別れることになった場合のいずれの経験も失恋に含む」、「片思いで自分からあきらめた場合や告白して断られた場合も失恋に含む」という点についても記載した。そして、中学生以降の失恋の中で最も辛かった経験について次の質問への回答を求めた。

①恋愛関係崩壊時のショック度

小此木(1997)を参考に、Bowlby(1961)の提唱した情動的危機の段階と対応する恋愛関係崩壊時の一時的ショックを測定する8項目を作成した。失恋した直後、各項目について

どの程度経験したかを5件法で尋ねた。

②恋愛関係崩壊後の立ち直り過程と立ち直り状態

失恋コーピング尺度（加藤, 2005）36項目から、過去形に直しても違和感のなかった29項目を抜粋した。失恋時点から現在までに各項目を経験した程度について5件法で尋ねた。

③恋愛関係崩壊後の成長

宮下他（1991）やPark et al.(1996)を参考に、恋愛関係崩壊後の成長を測定する30項目を作成した。失恋を経験して「現在」、各項目に同意する程度について5件法で尋ねた。

④恋愛関係崩壊前後の特徴（想起した失恋相手を「Aさん」とする）

a.失恋した相手との関係

片思い・恋愛関係の2件法で尋ねた。

b.失恋してからの経過期間

「Aさんとの失恋からどれくらい経ちましたか」と尋ね、（ ）年（ ）ヶ月の空欄に数字を記入するよう求めた。

c.失恋するまでの関係期間

「Aさんとの恋愛期間（片思いの人はAさんに想いを寄せていた期間）はどのくらいでしたか」と尋ね、（ ）年（ ）ヶ月の空欄に数字を記入するよう求めた。

d.失恋した相手との関係の重要性

「つき合っていた時、あなたにとってAさんは、他の関係（家族・友人など）の人と比べて、どの程度重要でしたか」という1項目について5件法で尋ねた。

なお、恋愛関係崩壊に関する尺度のうち①、②、③で測定した具体的な項目については、Table 4-1、Table 4-2に示す。

結果

1) 恋愛関係崩壊からの立ち直り過程・立ち直り状態の因子分析

まず、失恋時のショック度と失恋後の立ち直り過程・立ち直り状態の計37項目について因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。固有値の減衰，因子の解釈のしやすさなどから4因子を仮定した。その結果，ダブルローディングしていた5項目を削除し，4因子32項目を抽出した。累積寄与率は45.7%であった。パターン行列を示す（Table 4-1）。第1因子は「楽しい出来事を思い出した」，「関係が戻ると思った」などの項目に高く負荷しているため，「未練」因子と名づけた。第2因子は「自分の成長に役立つと思った」，「失恋

のよい面を見つけた」などの項目に高く負荷しているため、「希望」因子と名づけた。第3因子は「幻滅した」、「相手の人を恨んだ」などの項目に高く負荷しているため、「失望」因子と名づけた。最後に、第4因子は「生きている意味が分からない」、「涙があふれた」などの項目に高い負荷を示したため、「傷つき」因子と名づけた。なお、傷つきは対象喪失からの立ち直り過程の情動的危機の段階、未練は抗議-保持の段階、失望は断念-絶望の段階にあたりと考えられる。また、希望は離脱-再建の段階にあたり、立ち直りの状態を表すと考えられる。以下の分析では、これらの立ち直り過程及び立ち直り状態を「恋愛関係崩壊からの立ち直り」と呼び、各因子に含まれる項目の平均得点を下位尺度得点として使用した。下位尺度の信頼性は $\alpha=.79\sim.87$ であった。

2) 恋愛関係崩壊後の成長の因子分析

次に、恋愛関係崩壊後の成長の計 30 項目について因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。固有値の減衰, 因子の解釈のしやすさなどから 4 因子を仮定した。その結果, ダブルローディングしていた 5 項目を削除し, 4 因子 25 項目を抽出した。累積寄与率は 43.29%であった。パターン行列を示す (Table 4-2)。第1因子は「失恋前より交際範囲や視野が広がった」、「ありのままの自分を受け入れてくれる人がいる」、「自分の長所も短所も受け入れることができる」などの項目に高く負荷しているため、「視野の拡大」因子と名づけた。第2因子は「もっと自分を向上させたいと思う」、「失敗から学んだ, 恋愛に必要なことを活かしたい」などの項目に高く負荷しているため、「自己向上」因子と名づけた。第3因子は「もう人を好きになれないと思う」、「失恋は辛いので, もう恋愛したくない」などの項目に高く負荷しているため、「異性不信」因子と名づけた。最後に, 第4因子は「多くの人に支えられている実感がある」、「誰かに頼らず, 1人でも生きていけると思う (逆転項目)」などの項目に高い負荷を示したため、「関係の重視」因子と名づけた。なお, 視野の拡大, 自己向上, 関係の重視は関係崩壊後の成長尺度の肯定的側面であり, 異性不信は否定的側面である。以下の分析では, 各因子に含まれる項目の平均得点を下位尺度得点として使用した。下位尺度の信頼性は $\alpha=.67\sim.85$ であった。

Table 4-1 恋愛関係崩壊からの立ち直り過程・立ち直り状態の因子分析結果と因子間相関

	未練	希望	失望	傷つき
13 相手の人を思い出した	.80	-.05	.12	-.09
15 楽しい出来事を思い出した	.76	-.19	.00	-.10
19 失恋後、相手の人を愛した	.75	-.07	-.15	-.02
20 関係が戻ると思った	.72	-.09	.10	-.07
21 思い出の品を眺めた	.69	.04	-.13	-.12
10 連絡を取ろうとした	.56	-.08	.01	-.10
1 悲しかった(ショック度)	.47	.31	.01	.16
2 胸が締めつけられた(ショック度)	.47	.29	-.09	.23
4 苦しかった(ショック度)	.46	.32	.00	.22
2 相手の人と会おうとした	.43	-.03	.05	-.05
27 悔やんだ	.43	.02	-.05	.24
12 失恋を信じようとしなかった	.41	-.23	.17	.11
29 成長に役立つと思えるようになった	.00	.75	-.03	-.08
22 良い面をみつけられるようになった	-.08	.73	-.08	-.04
1 何かを学んだと思えるようになった	-.02	.70	-.04	.02
7 他の楽しいことを考えた	-.06	.60	.16	-.14
5 肯定的に捉えられるようになった	.05	.56	.03	.00
18 自分を磨く努力ができるようになった	-.02	.52	.16	-.03
25 スポーツや趣味に打ち込んだ	-.13	.47	.00	.08
8 次の恋を見つけようという気持ちになった	-.12	.38	.10	-.08
14 幻滅した	-.04	.03	.84	-.07
3 相手の人を恨んだ	.17	-.19	.79	.06
24 悪口を言った	.03	.13	.79	-.11
17 相手のことを考えると嫌だった	-.08	.01	.61	.21
9 愚痴を言った	.25	.06	.48	-.03
6 忘れてしまおうと思った	.00	.29	.48	-.07
28 相手の人を避けた	-.29	.07	.44	.24
6 生きている意味が分からない(ショック度)	-.18	-.10	.03	1.00
3 死んだほうがましだと思う(ショック度)	-.10	-.12	.10	.90
5 全てが失われた気がした(ショック度)	.23	.03	.06	.57
8 どうしたらいいのか分からない(ショック度)	.35	-.13	-.03	.53
7 涙がとめどなくあふれた(ショック度)	.13	.20	-.08	.50
寄与率(%)	22.59	9.95	8.62	4.56
累積寄与率(%)	22.59	32.54	41.16	45.72
信頼性(α)	.87	.79	.84	.86
因子間相関	未練	.32	.14	.61
	希望		.21	.24
	失望			.29

Table 4-2 恋愛関係崩壊後の成長の因子分析結果と因子間相関

	視野の拡大	自己向上	異性不信	関係の重視
20 失恋前より、交際範囲や視野が広がった	.71	-.05	.12	-.09
21 何があっても味方になってくれる人がある	.70	-.19	.00	-.10
1 ありのままの自分を受け入れてくれる人がある	.60	-.07	-.15	-.02
2 恋愛対象としての自分に自信が持てない	-.57	-.09	.10	-.07
6 辛いことが起こっても、希望を持てる	.54	.04	-.13	-.12
3 人生は悪いことばかり続くはずないと思う	.52	-.08	.01	-.10
8 自分の長所も短所も受け入れることができる	.51	.31	.01	.16
7 失恋前より、優しい人間になったと思う	.50	.29	-.09	.23
30 どんな悪いことが起こっても、乗り越えられる	.50	.32	.00	.22
22 今までより、他の人の気持ちを考える	.48	-.03	.05	-.05
13 自分の気持ちに正直に生きることができる	.46	.02	-.05	.24
19 相手と恋愛関係を持てたことに幸福を感じる	.41	-.23	.17	.11
2 もっと自分を向上させたいと思う	-.29	.81	-.15	.07
5 失敗から学んだ、恋愛に必要なことを活かしたい	.23	.65	.14	-.05
4 自分にとってかけがえのない人を大切にしたい	.11	.64	.07	.04
15 周囲の人にサポートを求められたら、力になりたい	-.05	.60	.04	.28
16 自分1人の時間も楽しめる	-.09	.49	-.16	-.02
23 もう人を好きになれないと思う	.07	.01	.82	-.11
17 失恋は辛いので、もう恋愛をしたくない	.04	-.07	.61	-.02
10 異性を信じられない	-.11	.02	.58	-.05
11 恋愛関係に関心が持てない	.01	-.11	.51	-.14
12 多くの人に支えられて生きている実感がある	.26	.08	.10	.68
29 誰かに頼らず、1人でも生きていけると思う	.21	.09	.33	-.57
26 いい出来事も、悪い出来事も人生の糧になる	.10	.25	-.12	.49
14 恋愛関係の大切さを感じる	.21	.07	-.06	.33
寄与率(%)	26.50	7.04	5.42	4.34
累積寄与率(%)	26.50	33.54	38.96	43.29
信頼性(α)	.85	.76	.76	.67
因子間相関				
自己向上		.52	-.35	.27
異性不信			-.37	.35
関係の重視				-.18

3) 恋愛関係崩壊からの立ち直りと心理的健康との関連

予測1の検討を行なうために、恋愛関係崩壊からの立ち直りと心理的健康との間で相関係数を算出した(Table 4-3)。なお、これらの心理的健康の指標は、得点が高くなればなるほど、心理的不健康度が高いことを示す。心理的健康に関する指標のうち、GHQに着目すると、GHQと傷つき(情動的危機の段階)の間には有意な正の相関が存在した($r=.28$)。また、GHQと希望(離脱-再建の段階)の間には有意な負の相関が存在した($r=-.34$)。さらに、孤独感と希望(離脱-再建の段階)の間にも有意な負の相関が存在した($r=-.37$)。これらの結果より、「抗議-保持の段階」、「断念-絶望の段階」と心理的健康に関する指標との間に

は関連性を見出すことはできなかったが、「情動的危機の段階」とGHQとの間には正の相関、「離脱-再建の段階」とGHQ及び孤独感との間には負の相関があるという予測1は概ね支持された。

Table 4-3 恋愛関係崩壊からの立ち直りと心理的健康との相関(N=50)

	GHQ	孤独感
傷つき(情動的危機の段階)	.28**	-.14
未練 (抗議-保持の段階)	.20	-.07
失望 (断念-絶望の段階)	.14	-.04
希望 (離脱-再建の段階)	-.34**	-.37**

* $p < .05$ ** $p < .01$

4) 恋愛関係崩壊からの立ち直りと恋愛関係崩壊前後の特徴との関連

予測2-1及び予測2-2の検討を行なうために、恋愛関係崩壊からの立ち直りと恋愛関係崩壊前後の特徴との間で相関係数を算出した(Table 4-4)。恋愛関係崩壊前後の特徴に関する指標のうち、恋愛関係崩壊からの経過期間に着目すると、経過期間と傷つき(情動的危機の段階)との間には有意な負の相関が存在した($r = -.26$)。この結果より、「情動的危機の段階」と恋愛関係崩壊からの経過期間には負の相関が認められ、予測2-1は支持された。

また、失恋した相手との関係の重要性に着目すると、重要性と傷つき(情動的危機の段階; $r = .29$)及び未練(抗議-保持の段階; $r = .41$)の間には有意な正の相関が存在した。恋愛関係崩壊までの関係期間との間には関連性を見出すことができなかったものの、「情動的危機の段階」、「抗議-保持の段階」と失恋した相手との関係の重要性には正の相関があり、予測2-2は概ね支持された。

Table 4-4 恋愛関係崩壊からの立ち直りと恋愛関係崩壊前後の特徴との相関(N=50)

	経過期間	関係期間	重要性
傷つき(情動的危機の段階)	-.26*	-.03	.29**
未練 (抗議-保持の段階)	-.20	-.03	.41**
失望 (断念-絶望の段階)	-.19	-.07	.06
希望 (離脱-再建の段階)	-.04	-.05	-.02

* $p < .05$ ** $p < .01$

5) 恋愛関係崩壊からの立ち直りと恋愛関係崩壊後の成長との関連

予測3-1, 3-2の検討を行なうために、恋愛関係崩壊からの立ち直りと恋愛関係崩壊後の成長との間で相関係数を算出した(Table 4-5)。恋愛関係崩壊後の成長のうち、否定的側面に

着目すると、異性不信と傷つき（情動的危機の段階; $r=.39$ ）との間には有意な正の相関が存在した。また、異性不信と未練（抗議-保持の段階; $r=.27$ ）及び異性不信と失望（断念-絶望の段階; $r=.27$ ）においては、正の相関が有意な傾向にあった。さらに、異性不信と希望（離脱-再建の段階; $r=-.26$ ）においては、負の相関が有意な傾向にあった。これらの結果より、「情動的危機の段階」、「抗議-保持の段階」、「断念-絶望の段階」と恋愛関係崩壊後の成長の否定的側面との間には正の相関があり、「離脱-再建の段階」と恋愛関係崩壊後の成長の否定的側面との間には負の相関が認められたため、予測3-1は概ね支持された。

一方、肯定的側面に着目すると、視野の拡大と希望（離脱-再建の段階; $r=.64$ ）の間には有意な正の相関が存在した。また、自己向上と未練（抗議-保持の段階; $r=.30$ ）及び希望（離脱-再建の段階; $r=.57$ ）の間にも有意な正の相関が存在した。さらに、関係の重視と希望（離脱-再建の段階; $r=.38$ ）の間にも有意な正の相関が存在した。これらの結果より、「離脱-再建の段階」と恋愛関係崩壊後の成長の肯定的側面との間には正の相関があり、予測3-2を支持する関連性が認められた。ただし、「抗議-保持の段階」と自己向上との関連性は予測しないものであった。

Table 4-5 恋愛関係崩壊からの立ち直りと恋愛関係崩壊後の成長との相関 ($N=50$)

	異性不信	視野の拡大	自己向上	関係の重視
傷つき(情動的危機の段階)	.39*	-.07	-.06	.07
未練 (抗議-保持の段階)	.27 [†]	.06	.30**	.18
失望 (断念-絶望の段階)	.27 [†]	-.03	-.00	-.12
希望 (離脱-再建の段階)	-.26 [†]	.64**	.57**	.38**

† $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$

考察

研究3の第1の目的は、恋愛関係崩壊からの立ち直りを測定する尺度について、適切な尺度を確定することであった。恋愛関係崩壊からの立ち直り段階を測定する尺度として、恋愛関係崩壊直後の苦悩を測定する自ら作成した8項目の尺度と、恋愛関係崩壊後の立ち直り過程および立ち直りの状態を測定する尺度として加藤（2005）の失恋コーピング尺度を改変した尺度を用いて検討をおこなった。その結果、対象喪失からの立ち直り過程と類似した傷つき($\alpha=.86$)、未練($\alpha=.87$)、失望($\alpha=.84$)、希望($\alpha=.79$)の4因子構造が認められ、信頼性の高さも確認された。

また、恋愛関係崩壊からの立ち直り段階尺度の妥当性を確認するために、心理的不健康度(GHQ, UCLA 孤独感など)、恋愛関係崩壊前後の特徴(失恋からの経過期間, 失恋相手

との一体感など)、恋愛関係崩壊後の成長との関連が検討された。その結果、研究3の予測は概ね支持された。「離脱-再建の段階」にあたる希望と、GHQや孤独感などの心理的不健康の尺度との間に負の相関が認められ、恋愛関係崩壊後の成長の肯定的側面との間には正の相関が認められた。つまり、離脱-再建の段階に至ることによって、心理的不適応状態から回復し、新たな考え方や価値観を受容したり、自分自身の成長のために努力したり、対人関係の重要性に気づくといったポジティブな変化を経験する可能性がある。したがって、恋愛関係崩壊後の立ち直り状態を「離脱-再建の段階に至ること」と定義することは妥当であると考えられる。

一方、「情動的危機の段階」にあたる傷つきと、心理的不健康度(GHQ)との間には正の相関が認められ、恋愛関係崩壊からの経過期間との間には負の相関が認められた。また、恋愛関係崩壊後の成長の否定的側面である異性不信との間には正の相関が認められた。情動的危機の段階は、恋愛関係崩壊後の初期に経験され、激しい苦悩やパニックを経験する段階である。この段階で経験する苦悩が強い程、新たな恋愛への不安を感じやすく、苦悩の原因となった異性への不信感は強いと考えられる。特に、恋愛関係崩壊からあまり期間が経っていない者にとって、その痛みの記憶は鮮明である可能性が高い。したがって、傷つきは恋愛関係崩壊直後の苦悩や心理的不適応を反映しており、Bowlby(1961)が提唱した概念と照らし合わせても、「情動的危機の段階」を測定する尺度として妥当であると考えられる。

未練と失望については予測をあまり支持しなかったものの、未練については失恋した相手との関係の重要性と正の相関が認められた。つまり、相手との関係が重要であったほど、恋愛関係崩壊後に未練が募るという結果である。この結果は、失恋した相手との親密さと恋愛関係崩壊後の苦悩や未練の関連を検討した先行研究(Simpson, 1987; 栗林, 2001)で示されてきた結果とも共通しており、概念的にも妥当な結果であると考えられる。したがって、「抗議-保持の段階」を測定する尺度として妥当であると考えられる。しかし、失望については心理的健康、恋愛関係崩壊前後の特徴、恋愛関係崩壊後の成長のいずれの変数ともほとんど関連性が認められなかった。唯一、恋愛関係崩壊後の成長のうち、否定的な側面である異性不信と正の相関が認められる傾向にあり、失恋した相手に幻滅したり、恨んだりしている程、異性への不信感を募らせ、新たな恋愛関係を望まないという傾向が認められた。「断念-絶望の段階」は、恋愛関係が終わったことを認めざるを得ない状況となり、ひどい落ち込みが経験されるのと同時に、別れた恋愛パートナーへの失望や恨みなどの感情

が生じる段階である。異性全般への不信感は、このような感情が般化したものであると考えられ、概念的には矛盾のない結果である。しかし、失望の項目の妥当性については、今後も検討する必要があるだろう。

予測していなかった結果として、未練と自己向上（恋愛関係崩壊後の成長の肯定的側面）との間に正の相関が認められた。抗議-保持の段階は、恋愛関係が終わっているにも関わらず、その現実を否定し、恋愛関係の再構築への願いが断ち切れない段階である。このような段階を経験することによって、「別れた恋愛パートナーに相応しい人物はどのような人物だったのか」、「別れた恋愛パートナーと関係を再構築するためにはどうしたらよいのか」など、関係回復のための自己向上に動機づけられる可能性がある。

総じて、本研究で確定した恋愛関係崩壊からの立ち直り段階尺度は、それぞれの段階の特徴を反映した妥当な尺度であることが示された。そのため、以降の研究ではこの指標を用い、恋愛関係崩壊からの立ち直りを検討する。しかし、本研究は横断的な調査であったため、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程を時系列的に確認することはできなかった。これまで対象喪失からの立ち直り過程においては、各段階を順番に経験し、立ち直りの状態に至ることが示されているが、個人によっては、特定の段階が消失したり、前の段階に逆戻りしたり、ある段階に停滞したりすることが示唆されている(小此木, 1997; 石本・今川, 2001)。そのため、今後は恋愛関係崩壊からの立ち直り過程を測定する尺度を時系列的に検討することも重要であると考えられる。

本章の要約

Bowlby(1961)の提唱した対象喪失からの立ち直り過程を恋愛関係崩壊からの立ち直り過程に援用し、「離脱-再建の段階」を立ち直り状態として捉えることの妥当性が検討された。その結果、離脱-再建の段階にあたる希望と心理的健康の指標（GHQ及び孤独感）の間には負の相関が存在した。また、恋愛関係崩壊後の成長のうち肯定的な側面（視野の拡大、自己向上、関係の重視）の間には正の相関が存在した。これらの結果より、離脱-再建の段階は、心理的健康度の回復や恋愛関係崩壊に伴う肯定的な変化と関連があることが示唆された。したがって、離脱-再建の段階を立ち直りの状態として定義することは妥当であると考えられる。以降の研究では同様の指標を用い、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程について検討する。

第4章

恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響

第1章において、恋愛関係崩壊前のサポート形態が恋愛関係崩壊後の立ち直りに影響を与える可能性について述べた。その根拠として、男性は恋愛関係崩壊前のサポート源が恋愛パートナーに限定されるのに対し、女性のサポート源は多様であることを挙げた。結果的に、男性と比較して、女性の方が恋愛パートナーとの関係が崩壊した後も立ち直りのために適したサポートを得やすいと予測される。これらのプロセスについて検討するために、まず、研究1では対人関係ネットワークからのサポート授受という観点から、対人関係における恋愛パートナーの重要性にジェンダー差が認められるか検討を行なった。その結果、女性と比較して、男性は情緒的サポートを恋愛パートナーに依存しており、情緒的サポート源としての恋愛パートナーの重要性が高いことが示された。このような結果をふまえ、本章では恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が、恋愛関係崩壊後の立ち直りに影響を及ぼすプロセスについて総合的に検討する。

具体的には、まず、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源の多様性と恋愛関係崩壊後の立ち直りとの関連を検討する(研究4)。本論文で仮定するような恋愛関係崩壊からの立ち直り過程が存在するのであれば、個人の持つ多様なソーシャル・サポート源が恋愛関係崩壊後の立ち直りのためにポジティブな機能を担っていると考える。そのため、このようなプロセスを検討する端緒の研究として、現在(質問紙回答時点)のソーシャル・サポート源の多様性から、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源を推測し、恋愛関係崩壊後の立ち直りに及ぼす影響について検討する。その際、親密度の高い関係のほうが変化しにくいネットワークであると考えられるため、変化が大きいと考えられる親密度の低い関係については扱わない。

次に、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態に及ぼす影響について検討する(研究5)。研究4においては、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源は恋愛関係崩壊後も変化しないことを前提としている。なぜなら、恋愛関係崩壊というネガティブなイベントを経験し、苦悩を感じている個人にとって、ソーシャル・サポート源を得るために、新たな対人関係を築くことは非常に困難であると考えられるためである。しかし、恋愛中のソーシャル・サポート形態が、恋愛関係崩壊を機に全く異なる形態へと変化し得るのであれば、恋愛関係崩壊後の立ち直りには影響を及ぼさ

ないと考えられる。そこで、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源を想起してもらい、これらが恋愛関係崩壊後のサポート形態に及ぼす影響について検討する。

最後に、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後の立ち直りに及ぼす影響について検討する(研究6)。研究4をさらに発展させ、想起してもらった恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直り過程に与える影響について示唆を得ることを目的とする。

以上の研究により、恋愛関係崩壊からの立ち直りに恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が影響を及ぼすプロセスが明らかとなり、また、恋愛関係崩壊からの立ち直りになぜジェンダー差が生じるのかという問題についても示唆を得られると考える。

研究4 ソーシャル・サポート源の多様性が恋愛関係崩壊後の立ち直りに及ぼす影響

問題

研究4では、現在恋愛パートナーのいない者を対象とし、最も辛かった恋愛関係崩壊を想起してもらい、ソーシャル・サポート形態と恋愛関係崩壊後の立ち直りとの関連を検討する。現在恋愛パートナーのいない者のみを対象とする理由として、現在恋愛関係にある者はその恋愛関係の満足感や幸福感、現在の恋愛関係へのコミットメントによって過去の恋愛関係崩壊の想起が影響を受ける可能性が高いと考えられるためである。

これまで、多くの恋愛関係崩壊研究では様々なジェンダー差が報告されており、女性は男性よりも別れの際に強靱であると考えられている(大坊, 1990)。第1章でも述べたように、別れをコントロールし(Hill et al., 1976; Helgeson, 1994)、恋愛関係崩壊後にポジティブな感情を経験する女性と比べ(Sprecher, 1994)、男性は恋愛関係崩壊のネガティブな影響から脱しにくい傾向にある(Frazier & Cook, 1993)。

では、なぜ女性よりも男性は恋愛関係崩壊後にネガティブな影響を受けやすいのだろうか。この問題について明らかにするために、本論文ではソーシャル・サポート提供者としての恋愛パートナーの重要性に着目してきた。ソーシャル・サポート提供は女性の性役割期待に沿った行動であるため、男性にとって、男性より女性にソーシャル・サポートを求めの方が、抵抗感が少ないという(Nadler et al., 1984)。つまり、男性は誰からソーシャル・サポートを受けるかという選択において、性別に対するこだわりが強い可能性がある。それに対して、女性は、ソーシャル・サポート利用可能性を高く評価すると共に、実際に

様々な人からソーシャル・サポートを受けることが心理的健康を維持することにつながること (Antonucci & Akiyama, 1987; 嶋, 1992, 1993; 和田, 1992, 1998; 尾見, 1999) が知られている。つまり、女性は男性と比較して、ソーシャル・サポート源についてのこだわりが少ないと考えられる。これらの知見をふまえると、様々な関係からサポートを利用し、心理的健康を維持しようとする女性に比べて、男性は親密な異性関係である恋愛関係からソーシャル・サポートを受けると予測される。実際、研究1においては、男性は恋愛関係崩壊前のサポート源が恋愛パートナーに限定されるのに対し、女性のサポート源は多様であることが示された。

しかし、恋愛関係崩壊からの立ち直りにおけるジェンダー差がソーシャル・サポート源の多様性の違いによって生じているならば、恋愛関係崩壊前から多様なソーシャル・サポート源を持っている者は、男女にかかわらず、恋愛関係崩壊からの立ち直りの程度が高いことが予測される。Harvey(2000)によると、喪失経験からの立ち直りにはその喪失についての解釈と、親密な他者への喪失経験の告白が効果的であるという。つまり、悩みを聞き、アドバイスを与えるといった親密な他者からのソーシャル・サポートが必要になると考えられる。そのため、恋愛関係崩壊時に同様に傷ついても、恋愛関係以外にも多くのソーシャル・サポート源を持つ者は、恋愛関係崩壊後も様々なソーシャル・サポートを受けられるため立ち直りが早いと考えられる。一方、ソーシャル・サポート源が限られている者は、恋愛関係崩壊後に十分なソーシャル・サポートを受けることができないであろう。したがって、研究4では、以下のように予測する。

予測

性別に関わらず、恋愛関係崩壊後に特定の関係からソーシャル・サポートを受けるより、多様な関係からソーシャル・サポートを受ける方が、恋愛関係崩壊後の立ち直り評価が高い

方法

調査協力者 質問紙の回答者は393名であった。回収率は53.7%であった。15歳以降に恋愛経験はあるものの、現在、恋人のいない大学生132名(男性56名、女性76名)を分析対象とした。平均年齢は20.41歳($SD=1.22$, レンジ18-25)であった。

手続き 研究1と同様に、講義時間に質問紙を配布し、「親密な対人関係」に関する研究

の一環として、調査への参加を依頼した。プライベートな質問項目が含まれているため、自宅にて回答し、封筒に封をしたうえで、1週間後の講義時間に提出する、もしくは設置されたポストに提出するよう教示した。

質問紙 質問紙は表紙と以下に示す尺度によって構成された。表紙には、研究の目的と回答にあたっての注意点を記載した。初めに、プライベートなことについて尋ねる質問項目があるが、個人が特定できる形式で研究結果が公表されないことを記載した。また、思い出すことで不快な思いをする場合、その質問項目には無理に回答する必要がないことについても記載した。

1) 各対人関係から提供されたサポートの測定

研究1と同様に、友人（同性/異性）、恋人、家族（同性/異性）という5つの関係について最も重要な人を1名想起してもらい、次の項目に回答を求めた。

① 関係満足度

想起した相手をAさんとし、「あなたはAさんとの関係にどの程度満足していますか」という1項目について5件法で尋ねた。

② 関係の重要性

想起した相手をAさんとし、「あなたにとってAさんは、挙げていただいた他の関係の人と比べてどの程度重要ですか」という1項目について5件法で尋ねた。

③ ソーシャル・サポート尺度（福岡・橋本，1997）

情緒的サポート($\alpha > .81$)、道具的サポート($\alpha > .74$)の観点から6項目ずつ抜粋し、提供されたソーシャル・サポートについて各関係ごとに5件法で尋ねた。

2) 恋愛関係崩壊後の心理的反応に関する質問

研究3と同様に、「恋愛」「失恋」についての定義を記載し、中学生以降の失恋経験の中で最も辛かった経験について次の質問への回答を求めた。想起した失恋相手を「Aさん」とした。

① 失恋からの経過期間

「Aさんとの失恋からどれくらい経ちましたか」と尋ね、()年()ヶ月の空欄に数字を記入するよう求めた。

② 失恋するまでの関係期間

「Aさんとの恋愛期間はどのくらいでしたか」と尋ね、「1. 1ヶ月以内」、「2. 1ヶ月

～3ヶ月未満」, 「3. 3ヶ月～6ヶ月未満」, 「4. 6ヶ月～1年未満」, 「5. 1年～2年未満」, 「6. 2年以上」の選択肢の中から選択するよう求めた。

③失恋後の立ち直し過程及び立ち直し状態

研究3で作成した恋愛関係崩壊からの立ち直し段階尺度37項目について、全くあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(5点)までの5件法で尋ねた。

④失恋した相手との関係

片思い・恋愛関係の2件法で尋ねた。

⑤失恋関係の重要性

「つきあっていた時、あなたにとってAさんは、他の関係(家族や友人など)の人と比べて、どの程度重要でしたか」という1項目について5件法で尋ねた。

⑥失恋相手との一体感

Inclusion of Other in Self scale(Aron, Aron, & Smollan, 1992)を邦訳した1項目を用いて「あなたとAさんとの関係を最もよく表しているものはどれですか」と7件法で尋ねた。この尺度は、他者が自己の中に含まれる程度を、自分と相手を表す2つの円環の重なりによって示した尺度である。この尺度は、The Relationship Closeness Inventory (Berscheid, Snyder, & Omoto, 1989)やThe Intimacy Scale (Sternberg, 1988)といった親密さを測定する尺度と相関があることが確認されており、2つの円環の重なりが大きいほど、心理的に近しいことを示す。

⑦失恋相手への関与度

Investment Model scale(Rusbult, Martz, & Agnew, 1998)のコミットメント尺度を邦訳し、過去形に改変した3項目について5件法で尋ねた。「私は、かつてAさんとの関係が続くことを望んでいた」、「私はかつてAさんとの関係を維持していこうという強い気持ちがあった」、「私は、かつてAさんとの関係にとっても深い結びつきを感じており、愛着があった」の3項目である。

結果

1) 恋愛関係崩壊からの立ち直し段階尺度の因子分析

恋愛関係崩壊からの立ち直し段階尺度の計37項目について因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。固有値の減衰, 因子の解釈のしやすさなどから4因子を仮定した。その結果, ダブルローディングしていた13項目を削除し, 研究3と同様に4因子24項目

を抽出した。累積寄与率は52.0%であった。パターン行列を示す(*Table 5-1*)。第1因子は「楽しい出来事を思い出した」、「関係が戻ると思った」などの項目に高く負荷しているため、「未練」因子と判断された。第2因子は「相手の人を恨んだ」、「幻滅した」などの項目に高く負荷しているため、「失望」因子と判断された。第3因子は「自分の成長に役立つと思った」、「失恋のよい面を見つけた」などの項目に高く負荷しているため、「希望」因子と判断された。最後に、第4因子は「苦しかった」、「悲しかった」などの項目に高い負荷を示したため、「傷つき」因子と判断された。なお、傷つきは対象喪失からの立ち直り過程の情動的危機の段階、未練は抗議-保持の段階、失望は断念-絶望の段階にあたりと考えられる。また、希望は離脱-再建の段階にあたり、立ち直りの状態を表すと考えられる。これらの因子構造は、研究3で得られた因子構造とほぼ同様であることが確認された。以下の分析では、各因子に含まれる項目の平均得点を下位尺度得点として使用した。下位尺度の信頼性は $\alpha = .80 \sim .88$ であった。

2) 崩壊した恋愛関係の特徴

予測の検討を行なう前に、研究4で用いるデータの特徴について述べる(*Table 5-2*, *Table 5-3*)。失恋からの経過期間には個人差があるものの、概ね2年程度経過した失恋が想起されていた。ちなみに、*Table 5-2*, *Table 5-3*に記載はないが、失恋相手との関係期間について男女別にみると、男性において、1ヶ月以内(4名, 7.1%), 1~3ヶ月(6名, 10.7%), 3~6ヶ月(8名, 14.3%), 6ヶ月~1年(8名, 14.3%), 1~2年(9名, 16.1%), 2年以上(15名, 26.8%), 不明6名(10.7%)となっていた。一方、女性において、1ヶ月以内(5名, 6.6%), 1~3ヶ月(6名, 7.9%), 3~6ヶ月(15名, 19.7%), 6ヶ月~1年(12名, 15.8%), 1~2年(27名, 35.5%), 2年以上(8名, 10.5%), 不明3名(3.9%)となっていた。これらを概観すると、3ヶ月未満の短い関係期間であった者はかなり少ない。

また、失恋相手との一体感は中程度と評価されたものの、失恋相手への関与度、失恋関係の重要性などの平均点はかなり高く、失恋相手との関係が非常に重要なものであったと推測される。失恋前のコミットメントや満足感が高いほど、失恋後の苦悩の程度が高い(e.g., Simpson, 1987)ことを踏まえるならば、最も辛い失恋が想起されていた可能性が高い。いずれの変数においても有意なジェンダー差は認められなかった。

Table 5-1 恋愛関係崩壊からの立ち直り過程・立ち直り状態の因子分析結果と因子間相関

	未練	失望	希望	傷つき
15 楽しい出来事を思い出した	.81	-.11	.09	.03
20 関係が戻ると思った	.78	.03	.04	.06
21 思い出の品を眺めた	.77	-.05	.07	-.17
19 失恋後、相手の人を愛した	.76	-.28	.09	.11
27 悔やんだ	.69	.08	-.07	.05
23 思い出の場所へでかけた	.65	.11	-.09	-.16
13 相手の人を思い出した	.62	.06	-.04	.11
10 連絡を取ろうとした	.57	.14	-.01	.01
2 相手の人と会おうとした	.50	.12	-.09	-.05
3 相手の人を恨んだ	-.02	.78	-.07	-.02
14 幻滅した	.01	.75	.17	-.08
24 悪口を言った	.07	.73	.04	-.08
9 愚痴を言った	.02	.60	.01	.10
17 相手のことを考えると嫌だった	-.02	.55	.11	.02
6 忘れてしまおうと思った	-.06	.50	-.22	.18
11 ほかの異性を好きになった	.11	.41	.20	-.11
29 成長に役立つと思えるようになった	-.13	.02	.83	.02
22 失恋の良い面を見つけられる	.18	-.08	.80	-.08
1 何かを学んだと思えるようになった	.04	.04	.67	.20
5 肯定的に捉えられるようになった	-.22	.10	.65	.03
18 自分を磨く努力ができるようになった	.07	.10	.49	.00
4 苦しかった(ショック度)	-.10	.00	.04	.99
1 悲しかった(ショック度)	-.05	-.07	.08	.83
2 胸が締めつけられた(ショック度)	.08	.03	.02	.75
5 全てが失われた気がした(ショック度)	.30	.16	-.14	.53
寄与率(%)	22.55	13.45	9.14	6.87
累積寄与率(%)	22.55	36.00	45.13	52.00
信頼性(α)	.88	.80	.82	.85
因子間相関	未練	.26	-.05	.47
	失望		.25	.29
	希望			.16

Table 5-2 失恋に関する変数の平均値と標準偏差①

	回答者の年齢			失恋からの経過期間(ヶ月)			失恋相手との一体感		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体
N	56	76	132	56	76	132	51	71	122
平均値	20.50	20.34	20.41	26.91	23.12	24.73	4.16	4.41	4.30
	(1.35)	(1.11)	(1.22)	(21.35)	(19.41)	(20.26)	(2.19)	(2.03)	(2.09)
最小値	18.00	18.00	18.00	0.50	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
最大値	25.00	24.00	25.00	96.00	96.00	96.00	7.00	7.00	7.00

()内が標準偏差

Table 5-3 失恋に関する変数の平均値と標準偏差②

	失恋相手への関与度			失恋関係の重要性		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体
N	54	74	128	50	71	121
平均値	4.27 (0.84)	4.15 (0.88)	4.20 (0.87)	4.24 (0.87)	4.11 (0.98)	4.17 (0.93)
最小値	2.00	1.33	1.33	2.00	1.00	1.00
最大値	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00

()内が標準偏差

3) サポート形態と恋愛関係崩壊後の立ち直り評価との関連

現在の情緒的サポート形態について、どのようなタイプが認められるのか検討するために、各関係からの情緒的サポート得点を標準化し、クラスタ分析を行なった。その結果、全ての関係から情緒的サポートを受ける多様型、相対的に同性友人から受ける情緒的サポートのみが高い同性友人型、全ての関係からのサポートが少ないサポート低型に分類された (Table 5-4)。また、道具的サポートについても同様の分析を行なったところ、全ての関係から道具的サポートを受ける多様型、相対的に家族から受ける家族型、全ての関係からのサポートが少ないサポート低型に分類された (Table 5-5)。ただし、情緒的サポート低型には 12 名しか分類されなかったため、性別という要因も考慮することを考えると、予測検討のために必要な分析を行うことができないため、今後の分析からは除外した。

Table 5-4 情緒的サポートのクラスタ分析結果 (標準化得点)

	N	同性友人	異性友人	同性家族	異性家族
多様型	53	.45	.47	.82	.61
同性友人型	42	.22	-.17	-.78	-.76
サポート低型	12	-1.67	-1.19	-.21	-.61

Table 5-5 道具的サポートのクラスタ分析結果 (標準化得点)

	N	同性友人	異性友人	同性家族	異性家族
多様型	36	1.09	.99	.47	.64
家族型	39	-.38	-.40	.11	.37
サポート低型	31	-.59	-.62	-.42	-1.26

情緒的サポート形態と失恋後の立ち直り評価との関連について検討するために、2 (性別: 参加者間) × 2 (情緒的サポート形態: 参加者間) × 4 (立ち直り評価: 参加者内) の 3 要因共分散分析を実施した。共変量を考慮した検討を行う理由は以下のとおりである。ま

ず、回顧法を用いて失恋後の立ち直り評価を測定したため、失恋からの経過期間が立ち直り評価に影響を与える可能性が考えられる。また、失恋後の立ち直り評価は失恋前の関係の質に影響を受けることも示唆されている(e.g., Simpson, 1987)。この2点の理由から、失恋からの経過期間、失恋関係の重要性、失恋相手との一体感、失恋相手への関与度、または情緒的サポート総量をそれぞれ投入する共分散分析を行った。しかし、失恋からの経過期間は共変量として有意ではなく、立ち直り評価に影響を及ぼしていなかった。その他の関係の質についても同様で、失恋関係の重要性以外は共変量として有意な効果を持っていなかった。そのため、失恋関係の重要性のみを共変量とし、3要因共分散分析を実施した。下位検定の結果、有意であった部分について述べる(*Table 5-6*)。

まず、性別×立ち直り評価の交互作用が有意傾向にあり($F(3,83) = 2.29, p < .10$)、男性及び女性において、傷つきの評価(男性 $M=4.14$; 女性 $M=3.93$)が未練(男性 $M=3.00$; 女性 $M=2.99$)、失望(男性 $M=2.32$; 女性 $M=2.76$)、希望(男性 $M=3.38$; 女性 $M=3.40$)より高く、失望よりも希望が高かった($ps < .01$)。また、男性は失望より未練の評価が高かった($p < .05$)。次に、情緒的サポート形態×立ち直り評価の交互作用は有意傾向にあり($F(3,83) = 2.45, p < .10$)、同性友人型($M=3.14$)と比較して、多様型($M=3.64$)の希望が高かった($p < .05$)。よって、予測1は概ね支持される傾向にあった。その他の立ち直り過程については、サポート形態による差は認められなかった。

また、探索的に道具的サポートについても、情緒的サポートと同様の3要因共分散分析を実施した。その結果、性別×立ち直り評価の交互作用が有意傾向にあった($F(3,91) = 2.63, p < .10$)。男性($M=2.21$)より女性($M=2.68$)は失望が高い傾向にあった。しかし、道具的サポートの効果は認められなかった。

Table 5-6 情緒的サポート形態の各群における立ち直り評価の平均値と標準偏差

情緒的サポート形態	男性		女性	
	同性友人型 (n=18)	多様型 (n=12)	同性友人型 (n=23)	多様型 (n=37)
傷つき	4.17 (0.19)	4.11 (0.22)	4.09 (0.16)	3.78 (0.13)
未練	2.95 (0.20)	3.05 (0.24)	2.93 (0.17)	3.05 (0.14)
失望	2.07 (0.24)	2.57 (0.29)	3.05 (0.21)	2.48 (0.16)
希望	2.98 (0.21)	3.77 (0.26)	3.31 (0.18)	3.50 (0.15)

()内が標準偏差

4) ソーシャル・サポート形態と立ち直り評価に関する分析

これまで、対象喪失からの立ち直り段階については、相互に重なり合い、消失、逆戻り、停滞する（小此木, 1997）という指摘がなされており、その経験には個人差があることが理論的に示唆されている。また、数少ない実証的な先行研究においても、「情緒的危機の段階」、「断念-絶望の段階」は経験されにくく、個人差があり、「抗議-保持の段階」、「離脱-再建の段階」は多くの人に経験されやすいことが示唆されている（石本・今川, 2001）。したがって、失恋からの立ち直り過程の経験パターンについて探索的に検討する必要があると考え、検討を行った。

本論文における立ち直りの定義をふまえると、「離脱-再建の段階」に至ることが立ち直りの状態であり、「離脱-再建の段階」にあたる希望と、その段階に至るまでに経験する立ち直り過程（傷つき、未練、失望）を区別することが適切であると考え。そこで、まず、希望を高低に分類し、立ち直りの状態によって2群に分類した。次に、傷つき、未練、断念の経験度の高さに着目し、3つの過程のうち、高群に分類された経験が1つ以下の者を経験少群、高群に分類された経験が2つ以上を経験多群とし、2群に分類した。最後に、この2つの観点の組み合わせによって、立ち直りのタイプ（以下、立ち直りタイプ）を4つに分類した（Table 5-7）。本来ならば、各段階の高低の組み合わせを全通り作ることが望ましいと考えるが、サンプル数が限られるため、4タイプの検討とする。

Table 5-8 は、情緒的サポート形態と立ち直りタイプの人数を集計したものである。 χ^2 検定を行なったところ、人数の偏りは有意傾向であった（ $\chi^2(3)=6.98, p<.10$ ）。そこで、どのセルがこの有意性に貢献したのか検討するために、残差分析（Haberman, 1974）を行なった結果、Table 5-8 にみられるように、経験多・未回復群において同性友人型が多く、多様型が少ないことが示されたことから、予測1は概ね支持される傾向にあった。

また、Table 5-9 は、道具的サポート形態と立ち直りタイプの人数を集計したものである。 χ^2 検定を行なったところ、人数の偏りは有意でなく（ $\chi^2(6)=9.95, p=.13$ ）、情緒的サポートと同様の効果は認められなかった。

Table 5-7 恋愛関係崩壊からの立ち直りタイプ例

立ち直りタイプ	傷つき	未練	断念	希望	N(人)
経験少・未回復	L	L	L	L	42
	L	L	H	L	
経験多・未回復	H	H	H	L	22
	H	H	L	L	
経験少・回復	L	L	L	H	28
	L	H	L	H	
経験多・回復	H	H	L	H	40
	H	H	H	H	

註) 表中の H は高群, L は低群を示している

Table 5-8 立ち直りタイプと情緒的サポート形態との関連

立ち直りタイプ	情緒的サポート形態			
		多様型	同性友人型	合計
経験少・未回復	度数	16	10	26
	%	61.5	38.5	100.0
	期待度数	14.0	12.0	26.0
	調整済み残差	0.9	-0.9	
経験多・未回復	度数	4	12	16
	%	25.0	75.0	100.0
	期待度数	8.6	7.4	16.0
	調整済み残差	-2.5 *	2.5 *	
経験少・回復	度数	13	7	20
	%	65.0	35.0	100.0
	期待度数	10.7	9.3	20.0
	調整済み残差	1.1	-1.1	
経験多・回復	度数	18	15	33
	%	54.6	45.4	100.0
	期待度数	17.7	15.3	33.0
	調整済み残差	0.1	-0.1	
合計	度数	51	44	95
	%	53.7	46.3	100.0

* $p < .05$

Table 5-9 立ち直りタイプと道具的サポート形態との関連

立ち直りタイプ	道具的サポート形態			合計	
	多様型	家族型	サポート低型		
経験少・未回復	度数	9	13	9	31
	%	29.0	42.0	29.0	100.0
	期待度数	10.5	11.4	9.1	31.0
	調整済み残差	-0.7	0.7	.0	
経験多・未回復	度数	4	7	8	19
	%	21.1	36.8	42.1	100.0
	期待度数	6.5	7.0	5.6	19.0
	調整済み残差	-1.4	.0	1.4	
経験少・回復	度数	5	11	6	22
	%	22.7	50.0	27.3	100.0
	期待度数	7.5	8.1	6.4	22.0
	調整済み残差	-1.2	1.4	-0.2	
経験多・回復	度数	18	8	8	34
	%	53.0	23.5	23.5	100.0
	期待度数	11.5	12.5	10.0	34.0
	調整済み残差	2.8	-1.9	-0.9	
合計	度数	36	39	31	106
	%	34.0	36.8	29.2	100.0

考察

予測1については概ね支持される傾向にあった。恋愛関係崩壊後、情緒的サポートを様々な関係から得ることができる多様型が、特定の関係からしか情緒的サポートを得られない同性友人型よりも立ち直り状態が良好であることが示唆された。この結果をふまえるならば、恋愛関係崩壊からの立ち直りのために、情緒的サポート源の多様性が重要な役割を果たすと考えられる。また、立ち直りタイプについても、様々な経験をしているにも関わらず立ち直り評価が低い経験多・未回復群には、同性友人という特定の関係から情緒的サポートを受ける者が多く、様々な関係から情緒的サポートを受ける多様型が少ないことが示唆された。つまり、多様な関係からのサポートに比べ、特定の関係からのサポートは内容が均質的になりやすく、恋愛関係崩壊からの立ち直りの限定的な側面にしか効果を発揮できない恐れがあると推察される。一方、ソーシャル・サポート源が多様であるほど、恋愛関係崩壊からの立ち直りに役立つソーシャル・サポートの選択肢が広がり、恋愛関係崩壊からの立ち直りが促進するのであろう。

研究4では、①多様な関係からサポートを受ける者が、特定の関係からサポートを受ける者より、恋愛関係崩壊からの立ち直り状態が良好であること、②恋愛関係崩壊からの立

立ち直り過程には個人差が認められ、それが、サポート形態と関連する可能性があること、以上2点について有効な示唆を得た。研究4で得られた結果より、青年期の恋愛関係はサポート源としても重要な対人関係であると考えられるが、このような限定されたサポート形態は青年の恋愛関係崩壊からの回復を困難にする可能性が高い。他の対人関係と比較して、恋愛関係は恋愛パートナーとの内閉的世界と共存感情を生じさせ（詫摩, 1973）、あたかも2人だけで生きているような感覚を喚起する関係である。特に、青年期から成人期への移行期にある大学生の対人関係は、親子関係から友人関係、親密な異性関係へと拡大し、親からの独立意識が高まる時期であり、親のサポートの重要性は軽減する方向にある。しかし、研究4の結果をふまえるならば、友人だけでなく家族からのサポートが恋愛関係崩壊後の立ち直りを支えており、恋愛関係崩壊からの立ち直りには、友人だけでなく家族のサポートも重要であると考えられる。

しかしながら、研究4では、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート源が恋愛パートナーに限定されていた者において、恋愛関係崩壊後、情緒的サポートを得ることができないため、恋愛関係崩壊からの立ち直りが困難になるというプロセスを検討することができなかった。そこで、研究5では、このプロセスについて検討を行う。

研究5 恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態に及ぼす影響

問題

研究5の目的は、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態に及ぼす影響について検討することである。

研究1では、恋愛関係が維持されている状況において、女性より男性は情緒的サポートを恋愛パートナーから得ており、情緒的サポート源としての恋愛パートナーの重要性が高いことが示された。また、研究4では、多様な関係からサポートを受ける者が、特定の関係からサポートを受ける者より、恋愛関係崩壊からの立ち直り状態が良好であることも示された。これらの結果は、恋愛関係崩壊前、男性はソーシャル・サポート源が恋愛パートナーに限定されるのに対し、女性は多様なソーシャル・サポート源を維持しているため、恋愛関係崩壊後、男性と比較して、女性の方が恋愛関係崩壊からの立ち直りに必要なソーシャル・サポートを得やすく、その結果、男性より女性の方が恋愛関係崩壊からの立ち直

り状態が良好であるという第1章で提唱した予測を支持する方向にある。

しかし、これらのプロセスが支持されるためには、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源が恋愛パートナーに限定されると、その他のソーシャル・サポート源が減少するため、恋愛関係崩壊後に立ち直りのために必要なソーシャル・サポート源が少なくなるという過程を明らかにする必要がある。恋愛関係崩壊前後でソーシャル・サポート源がどの程度維持されるのか、また変化するとしたらどのように変化するのかを検討した研究は見当たらない。概念的に考えれば、情緒的サポートは、相手の置かれた状態や相手の性格・価値観・態度などをある程度知っていなければ提供しにくいと考えられるため、恋愛関係崩壊後に新たに獲得した関係が情緒的サポート源となる可能性は高くないと思われる。しかし一方、恋愛パートナーと友人を共有していた場合には、恋愛関係崩壊後にソーシャル・サポート源が激減してしまうことも考えられ(Terhell, Broese van Groenou, & Van Tilburg, 2004)、恋愛関係崩壊前後のソーシャル・サポート源にほとんど関連がない可能性もある。したがって、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源が、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源に影響を与えるのか否かを確認する必要があると考える。

本論文の基本的な予測について述べる。これまで、親密な関係においては、その関係を特別視しやすく、特別視した関係からのサポート取得は容易に行なうが、その他の関係からのサポート取得は抑制しようとすることが示唆されている(相馬, 2005)。このような示唆をふまえるならば、恋愛関係が維持されている間、恋愛関係以外からソーシャル・サポートを得ようとせず、ソーシャル・サポート源を恋愛パートナーに限定してしまう傾向の高い者は、その他のソーシャル・サポート源を失ってしまう危険性が高い。また、恋愛関係崩壊後、失意と苦悩の中で、崩壊した恋愛関係以外のソーシャル・サポート源を探すのは非常に困難であろう。

特に、このような悪影響を受けやすいのは、女性より男性である可能性が高い。なぜなら、これまで述べてきたように、①男性にとって、ソーシャル・サポートを男性より女性に求める方がたやすいこと(Nadler et al., 1984)、②男性は配偶者からのサポートに頼りやすいこと(Antonucci & Akiyama, 1987; 野辺, 1999)が示唆されており、ソーシャル・サポート源として親密な異性との関係が重要な役割を果たしているためである。また、恋愛関係崩壊からの立ち直りのためには、喪失経験の再解釈や親密な他者への喪失経験の告白が重要であることが示唆されており(Harvey, 2000)、情緒的な関わりが重要であると考えられる。これまで、女性友人関係は情動的(個人的な悩みの相談、対人関係に関する会話など)

であるのに対し、男性友人関係は手段的（共行動、活動内容を共有する会話など）であることが示唆されている(Caldwell & Peplau, 1982; Hays, 1984)。しかし、大学生においては、家族や異性友人よりも同性友人がソーシャル・サポート源となりやすく（嶋, 1992）、同性友人関係が情緒的なサポート源として機能しやすい女性と比較して、男性は情緒的サポート源の確保が困難であると推測されるためである。

以上をふまえ、研究5では、実際に恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態について想起してもらい、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態に及ぼす影響について検討する。ただし、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態については、現在（質問紙回答時点）のソーシャル・サポート形態を恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態とみなすため、大学入学に伴う対人関係の変化の影響が少なく、恋愛関係崩壊から現在までの期間が比較的短い大学入学以降の恋愛関係崩壊経験について報告していた者を対象に分析を行なう。

また、研究1、研究4において、①心理的な不安を和らげる情緒的サポートと②問題の解決に直接寄与する道具的サポートに着目し、検討を行ってきた。しかし、道具的サポートについては、性別や関係に左右されやすく（研究1）、恋愛関係崩壊からの立ち直りにほとんど影響を与えない（研究4）ことが示唆されたため、研究5で検討するソーシャル・サポートについて再考する必要があると考える。そこで、研究5では、道具的サポートではなく情動的サポートに着目する。情動的サポートとは、個人が直面している問題を解決するためにアドバイスや知識を与えるといったサポートである。情動的サポートは様々な観点や方法で提供することが可能であり、性別や関係に左右されることが少ないと考えられる。また、生活を営む中で、問題解決に必要な知識やアドバイスを与えてくれる他者の存在は、個人の心理的健康を維持するために重要な役割を果たすと考えられる。したがって、研究5では情緒的サポートに加え、情動的サポートについても検討する。

予測

1. 恋愛関係崩壊前、ソーシャル・サポート源が恋愛パートナーに限定されるほど、その他のソーシャル・サポート源は少なく、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源も減少する
2. 予測1の影響過程は、女性よりも男性で顕著に認められる。

方法

調査協力者 質問紙の回答者は174名、回収率は78.7%であった。そのうち、大学入学後の失恋について回答した者は89名(男性47名、女性42名)であった。平均年齢は20.40歳($SD=0.89$, レンジ 19-24)であり、失恋から現在までの経過期間の平均値は11.03ヶ月($SD=10.03$, レンジ 0.5-36.0)であった。分析対象者の68.1%が経過期間から1年未満の者であった。

手続き 講義時間に質問紙を配布し、「親密な対人関係」に関する研究の一環として、調査への参加を依頼した。ソーシャル・サポート尺度の回答方法が難しかったため、その部分については回答方法を説明しながら、講義室内で回答してもらった。残りの質問項目についてはプライベートな質問項目が含まれているため、自宅にて回答し、封筒に封をしたうえで、1週間後の講義時間に提出するよう依頼した。

質問紙 質問紙は表紙と以下に示す尺度によって構成された。表紙には、研究の目的と回答にあたっての注意点を記載した。初めに、プライベートなことについて尋ねる質問項目があるが、個人が特定できる形式で研究結果が公表されないことを記載した。また、思い出すことで不快な思いをする場合、その質問項目には無理に回答する必要がないことについても記載した。

1) 現在、対人関係から受容しているソーシャル・サポート形態の測定

①対人関係からのソーシャル・サポートの受容

研究2と同様、人間関係について「会う回数とは関係なく、あなたが身近に感じる人との関係」と定義した。なお、該当する人物がいない場合は、無理に挙げなくてもよいことについて表記した。そして、①あなたに共感してくれることやあなたを信頼してくれることが多く、あなたを大切に思ってくれる人は誰ですか(情緒的サポート)、②あなたが個人的な問題や、人間関係、所属する集団における社会的な問題などに対処するために、必要な情報や知識を与えてくれる人は誰ですか(情報的サポート)の2項目について回答を求めた。

回答方法は以下のとおりである。まず、ソーシャル・サポートを受けているという人のイニシャルをできるだけたくさん挙げる(最高10人まで)。次に、性別及び関係(友人/家族/恋人など)について回答する。最後に、その人々から受けているサポート量の全てを

100%とすると、それぞれの人からどの程度サポートを受容しているか、おおよその割合を割り当てる。なお、研究5で検討する失恋後のソーシャル・サポート人数については、情緒的/情動的サポートを行なってくれる人物として、イニシャルが挙げられた人数をカウントし、算出した。

②ソーシャル・サポート満足度

情緒的/情動的サポート各項目について、「現在、あなたはこのようなサポートを、どの程度十分に受けられていますか？」という1項目について7件法で尋ねた。

2) 失恋前に対人関係から受容していたソーシャル・サポートの測定

研究3と同様に、「恋愛」「失恋」についての定義を記載し、過去3年以内の中でも、最近の失恋経験について以下の質問への回答を求めた。想起した失恋相手を「Aさん」とした。

①失恋前のソーシャル・サポートの受容

「Aさんと失恋する前」のソーシャル・サポートの受容状況について尋ねた。①Aさんと失恋する前に、あなたに共感してくれることやあなたを信頼してくれることが多く、あなたを大切に思ってくれた人は誰ですか（情緒的サポート）、②Aさんと失恋する前に、あなたが個人的な問題や、人間関係、所属する集団における社会的な問題などに対処するために、必要な情報や知識を与えてくれた人は誰ですか（情動的サポート）の2項目について回答を求めた。失恋相手であるAさんについては1番目に回答するよう教示した。

回答方法については、現在のソーシャル・サポート形態の測定と同様である。研究5で検討する失恋前の情緒的/情動的サポート人数については、Aさんと別れる前、情緒的/情動的サポートを行なってくれる人物として、イニシャルが挙げられた人数をカウントした。そして、失恋相手Aさんが必ず含まれているため、挙げられた人数から除算し、算出した。最後に、失恋前の情緒的/情動的サポートの恋人依存度については、受容したサポート量の全てを100%とし、失恋相手Aさんに割りふられた割合を用いた。

②失恋前のソーシャル・サポートが想起できた程度

「失恋する前のこのようなサポートの受け方について、あなたはどの程度、思い出すことができましたか？」という1項目について、情緒的/情動的サポートの受容ごとに、全く思い出せなかった（1点）～はっきりと思い出せた（7点）までの7件法で回答するよう求めた。

結果

失恋前のソーシャル・サポートが想起できた程度を尋ねた項目において、情緒的サポート、情動的サポートのどちらかを全く思い出すことができなかつたと判断される13名(この質問項目に1点、2点と回答した者)を分析から除外した。最後に、回答に不備のあつた7名を除外し、69名(男性37名、女性32名)が分析対象者となつた。

1) ソーシャル・サポート形態に関する特徴

予測の検討を行なう前に、研究5で用いるデータの特徴について述べる。それぞれの変数の平均値と標準偏差(*Table 6-1*, *Table 6-2*)については、以下のとおりである。

Table 6-1 本研究で用いる情緒的サポートに関する変数の記述統計

	失恋前の情緒的サポート恋人依存			失恋前の情緒的サポート人数			失恋後の情緒的サポート人数		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体
度数	37	32	69	37	32	69	37	32	69
平均値	30.54 (27.58)	25.03 (26.37)	27.98 (26.97)	4.27 (1.91)	5.16 (2.46)	4.68 (2.21)	5.97 (2.30)	7.16 (2.17)	6.52 (2.30)
最小値	0.00	0.00	0.00	1.00	2.00	1.00	2.00	4.00	2.00
最大値	100.00	80.00	100.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00

Table 6-2 本研究で用いる情動的サポートに関する変数の記述統計

	失恋前の情動的サポート恋人依存			失恋前の情動的サポート人数			失恋後の情動的サポート人数		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体
度数	37	32	69	37	32	69	37	32	69
平均値	23.65 (24.71)	15.38 (20.93)	19.81 (23.25)	4.41 (1.72)	5.31 (2.33)	4.83 (2.06)	4.76 (2.25)	5.22 (2.28)	4.97 (2.26)
最小値	0.00	0.00	0.00	2.00	1.00	1.00	1.00	2.00	1.00
最大値	85.00	100.00	100.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00

これらの変数間にジェンダー差が認められるか検討するために、*t* 検定を実施した。その結果、失恋前の情緒的サポート人数($t(67)=1.68, p<.10$)、失恋前の情動的サポート人数に差が認められる傾向にあり($t(67)=1.81, p<.10$)、女性と比較して、男性は失恋前の情緒的、情動的サポート人数が少ない傾向にあつた。さらに、失恋後の情緒的サポート人数に差が認められ($t(67)=2.18, p<.05$)、女性と比較して、男性は失恋後の情緒的サポート人数が少なかつた。

次に、変数間の0次相関について Table 6-3 に示す。まず、失恋前の情緒的恋人依存と情動的恋人依存との間($r=.73$)に認められたように、全体的に情緒的サポートと情動的サポートとの間には高い相関が認められた。また、失恋前の情緒的恋人依存と失恋後の情緒的サポート人数との間には負の相関が認められた($r=-.30$)。さらに、失恋前の情緒的サポート人数と失恋後の情緒的サポート人数($r=.41$)、失恋前の情動的サポート人数と失恋後の情動的サポート人数($r=.52$)との間には正の相関が認められた。

Table 6-3 重回帰分析において検討する変数間の0次相関($N=69$ 名)

	①	②	③	④	⑤
① 失恋前の情緒的恋人依存(%)					
② 失恋前の情動的恋人依存(%)	.73 **				
③ 失恋前の情緒的サポート人数	-.18	-.17			
④ 失恋前の情動的サポート人数	-.15	-.21	.69 **		
⑤ 失恋後の情緒的サポート人数	-.15	-.30 *	.41 **	.45 **	
⑥ 失恋後の情動的サポート人数	-.04	-.05	.52 **	.52 **	.51 **

* $p<.05$ ** $p<.01$

これらの変数間の相関に関するジェンダー差について述べる(Table 6-4, Table 6-5)。男性においては、失恋前の情緒的恋人依存と失恋前の情緒的サポート人数($r=-.34$)、失恋後の情緒的サポート人数との間に負の相関が認められ($r=-.39$)、失恋前に情緒的サポートを恋人に依存するほど、失恋前後に関わらず情緒的サポートを提供してくれる人数は少ないことが示された。しかし、女性においては、これらの関連がほとんど認められなかった。また、男性においては、失恋前の情緒的サポート人数と失恋後の情緒的サポート人数($r=.44$)、失恋前の情動的サポート人数と失恋後の情動的サポート人数($r=.59$)との間には正の相関が認められた。しかし、女性においては失恋前の情緒的サポート人数と失恋後の情緒的サポート人数($r=.34$)との関連は弱かった。

Table 6-4 重回帰分析において検討する変数間の0次相関(男性： $N=37$ 名)

	①	②	③	④	⑤
① 失恋前の情緒的恋人依存(%)					
② 失恋前の情動的恋人依存(%)	.83 **				
③ 失恋前の情緒的サポート人数	-.34 *	-.22			
④ 失恋前の情動的サポート人数	-.30	-.32	.70 **		
⑤ 失恋後の情緒的サポート人数	-.30	-.39 *	.44 **	.52 **	
⑥ 失恋後の情動的サポート人数	-.23	-.25	.51 **	.59 **	.69 **

* $p<.05$ ** $p<.01$

Table 6-5 重回帰分析において検討する変数間の0次相関(女性: N=32名)

	①	②	③	④	⑤
① 失恋前の情緒的恋人依存(%)					
② 失恋前の情動的恋人依存(%)	.57 **				
③ 失恋前の情緒的サポート人数	.01	-.06			
④ 失恋前の情動的サポート人数	.01	-.04	.66 **		
⑤ 失恋後の情緒的サポート人数	.09	-.09	.34	.33	
⑥ 失恋後の情動的サポート人数	.20	.25	.53 **	.46 **	.27

* $p < .05$ ** $p < .01$

2) 失恋前のソーシャル・サポート形態が失恋後のソーシャル・サポート形態に及ぼす影響

予測1について検討するために、基準変数を失恋後のソーシャル・サポート人数(情緒的/情動的)とし、Step1に失恋前のソーシャル・サポート恋人依存(情緒的/情動的)、Step2に失恋前のソーシャル・サポート人数(情緒的/情動的)を投入する階層的重回帰分析を実施した(ステップワイズ法)。ただし、情緒的サポートと情動的サポートには高い相関が認められたため、各サポートごとに分析を実施した。

失恋後の情緒的サポート人数についての結果をTable 6-6に示す。失恋前の情緒的サポート人数が失恋後の情緒的サポート人数と有意な正の関連を示した。失恋前の情緒的サポート恋人依存との関連は認められなかったが、失恋前の情緒的サポート人数が少なければ、失恋後の情緒的サポート源も少なくなることが示された。

Table 6-6 失恋前の情緒的サポート諸変数が失恋後の情緒的サポートに及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1					
失恋前の情緒的サポート恋人依存					
Step2					
失恋前の情緒的サポート人数	0.41	3.72	67	0.00	1.00

註) ステップワイズ法, $F(1,67)=13.83, p < .01, Adj.R^2=.16$

失恋前の情緒的サポート諸変数が失恋後の情緒的サポートに及ぼす影響に関するジェンダー差について検討するため、男女別に同様の分析を実施した。男性(N=37)の結果をTable 6-7に示す。失恋前の情緒的サポート恋人依存が失恋後の情緒的サポート人数と有意な負の関連を示した。また、失恋前の情緒的サポート恋人依存が失恋後の情緒的サポート人数に及ぼす影響は、失恋前の情緒的サポート人数を投入すると消失した。したがって、失恋後の情緒的サポート人数に及ぼす影響を失恋前の情緒的サポート人数が完全仲介することが示された。これは、予測1を支持する結果である(Figure 6-1)。

Table 6-7 男性における失恋前の情緒的サポート諸変数が失恋後の情緒的サポートに及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1					
失恋前の情緒的サポート恋人依存	-0.30	1.89	35	0.07	1.00
Step2					
失恋前の情緒的サポート恋人依存	-0.18	1.09	34	0.29	1.13
失恋前の情緒的サポート人数	0.38	2.34	34	0.03	1.13

註) ステップワイズ法, $F(2,34)=4.75, p<.05, Adj.R^2=.17$

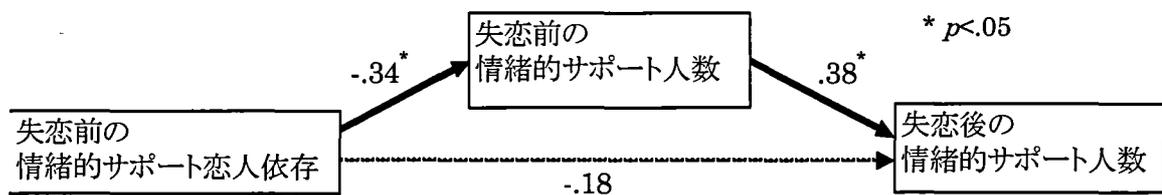


Figure 6-1 男性における失恋前の情緒的サポート形態が失恋後の情緒的サポート形態に及ぼす影響

次に、女性(N=32)の結果を Table 6-8に示す。失恋前の情緒的サポート人数が失恋後の情緒的サポート人数と有意な正の関連を示した。女性においては失恋前の情緒的サポート恋人依存との関連は認められなかったが、失恋前の情緒的サポート人数が少なければ、失恋後の情緒的サポート人数も少なくなることが示された。

Table 6-8 女性における失恋前の情緒的サポート諸変数が失恋後の情緒的サポートに及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1					
失恋前の情緒的サポート恋人依存					
Step2					
失恋前の情緒的サポート人数	0.34	1.97	30	0.06	1.00

註) ステップワイズ法, $F(1,30)=3.89, p<.10, Adj.R^2=.09$

男性では、失恋前の情緒的サポートを恋人に依存することによって、その他の情緒的サポート源の数が減少し、失恋後の情緒的サポート人数も減少するという過程が認められたのに対し、女性においては、失恋前に恋人以外の情緒的サポート源を多く維持していれば、

失恋後の情緒的サポート人数も多いといった過程のみ認められた。したがって、女性では、予測1で仮定したプロセス自体が認められず、予測2については概ね支持された。

失恋後の情動的サポート人数についての結果を Table 6-9 に示す。失恋前の情動的サポート人数が失恋後の情動的サポート人数と有意な正の関連を示した。失恋前の情動的サポート恋人依存との関連は認められなかったが、失恋前の情動的サポート人数が少なければ、失恋後の情動的サポート源の数も少なくなることが示された。失恋前の情緒的サポート諸変数が失恋後の情緒的サポートに及ぼす影響に関するジェンダー差について検討するため、男女別に同様の分析を実施した。その結果、性別に関わらず、全体の結果と全く同様の結果が得られた (Table 6-10, Table 6-11)。

Table 6-9 失恋前の情動的サポート諸変数が失恋後の情動的サポートに及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1 失恋前の情動的サポート恋人依存					
Step2 失恋前の情動的サポート人数	0.52	5.04	67	0.00	1.00

註) ステップワイズ法, $F(1,67)=25.03, p<.01, Adj.R^2=.26$

Table 6-10 男性における失恋前の情動的サポート諸変数が失恋後の情動的サポートに及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1 失恋前の情動的サポート恋人依存					
Step2 失恋前の情動的サポート人数	0.59	4.33	35	0.00	1.00

註) ステップワイズ法, $F(1,35)=18.80, p<.01, Adj.R^2=.33$

Table 6-11 女性における失恋前の情動的サポート諸変数が失恋後の情動的サポートに及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1 失恋前の情動的サポート恋人依存					
Step2 失恋前の情動的サポート人数	0.46	2.83	30	0.08	1.00

註) ステップワイズ法, $F(1,30)=8.01, p<.01, Adj.R^2=.18$

考察

予測1については、男性のみで支持された。恋愛関係崩壊前、情緒的サポートの多くを恋愛パートナーから得ている男性は、その他の情緒的サポート源を失い、その結果、恋愛関係崩壊後の情緒的サポート源も少なくなってしまうというプロセスが認められた。このようなプロセスは女性では認められず、恋愛関係崩壊前、情緒的サポートの多くを恋愛パートナーから得ているかどうかに関係なく、多くの情緒的サポート源を維持していた女性は、恋愛関係崩壊後も多くの情緒的サポート源を維持していることが示された。一方、情動的サポートについては、このようなジェンダー差は認められておらず、性別に関わらず、恋愛関係崩壊前、多くの情動的サポート源を維持していた者は、恋愛関係崩壊後も多くの情動的サポート源を維持していることが示唆された。

研究5で得られた結果より、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態は、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態に少なからず影響を受けており、恋愛関係崩壊前、恋愛関係以外のソーシャル・サポート源が減少すると、恋愛関係崩壊後、立ち直りのために必要なソーシャル・サポート源が少なくなることが示唆された。しかし、情緒的サポートと情動的サポートの結果を比較すると、情緒的サポートのみでジェンダー差が認められ、男性にとって、情緒的サポートを得ることができる恋愛関係は非常に特別な関係である可能性が示された。一般的に、男性あるいは女性としての役割を果たすために、特に望ましい特性は「男性性」、「女性性」として意識されている。男性性とは、①職業的な成功、②肉体的・精神的な強さ、③独立心の強さ、④感情の抑制、⑤女々しくないことによって特徴づけられており、女性性とは、①従順さ、②依頼心の強さ、③繊細さ、④気配り、⑤外見の美しさによって特徴づけられる(鈴木, 1994)。このような生まれつきの性別に基づいた望ましさが存在するために、男性にとって、他者に悩み事を打ち明けたり、傷ついているという感情を表出することは、自己脅威的な行動であると考えられる。特に、女性役割より男性役割の方が、普遍的で社会的に高い価値が認められており、男性の役割に対する規範意識が強いため(鈴木, 1996)、男性役割からの逸脱は厳しく非難される可能性がある。したがって、他者への気配りや支援を行なう役割である親密な女性から情緒的サポートを得られるようになると、男性役割から逸脱しているとみなされる危険性が高い他の関係からの情緒的サポートを抑制すると考えられる。一方、女性においては、恋愛パートナーを含め、様々な関係から情緒的サポートを受けても、女性役割から逸脱しているとみなされる危険性は低く、情緒的サポート源を減少させる必要性がないのであろう。つまり、研究

5 で得られた恋愛関係崩壊前の情緒的サポート形態が恋愛関係崩壊後の情緒的サポート形態に及ぼす影響過程のジェンダー差は、社会における性役割規範を反映した結果であると考えられる。最後に、情報のサポートにおいて、ジェンダー差が認められなかった理由として、情報のサポートは問題解決のための積極的な働きかけの結果であり、それほど男性役割から逸脱しているとみなされる危険性が高くなかったと考えられる。

研究5では、①男性において、恋愛関係崩壊前、情緒的サポートの多くを恋愛パートナーから得ると、その他の情緒的サポート源が少なくなり、その結果、恋愛関係崩壊後の情緒的サポート源も少なくなること、②性別に関わらず、恋愛関係崩壊前、恋愛関係以外のソーシャル・サポート源が少ないと、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源も少なくなること、以上2点について有効な示唆を得た。研究5は回顧法を用いた横断的な調査であったため、因果関係については断定的な結論を下すことはできない。特に①のプロセスについては、男性の恋愛関係崩壊前の情緒的サポート源が少ないから、情緒的サポートを恋人に依存せざるを得ない、という逆の因果関係が成り立つ可能性を排除することは困難である。しかし、夫婦関係や恋愛関係などの親密な関係に所属している者が外部の他者との関係を抑制しようとすることが示唆されている(遠矢, 1995)。その理由として、このような排他性が関係の継続性を高めると同時に、金銭的な利益、物質的な利益、及び精神的な利益(満足感、愛など)といった様々な資源を安定的に取得できるという安心感を高める(山岸, 1998)ことが挙げられる。このような議論をふまえるならば、基本的に、夫婦関係や恋愛関係などの親密な関係は情緒的サポート源として機能しやすく、親密な関係にあるパートナーに情緒的サポートを依存することは一般的な現象であると考えられる。したがって、女性と比較し、男性の恋愛関係崩壊前の情緒的サポート源が少ないから、男性は情緒的サポートを恋人に依存せざるを得ないというジェンダー差が存在するとは考えにくい。ただし、女性とは異なり、情緒的サポートを求めることが男性役割の逸脱と評価されやすく、情緒的サポート源が少ないほうが望ましいとされる男性において、恋愛パートナーから情緒的サポートを得ることが、その他の情緒的サポート源の少なさにつながる可能性は高いと考える。

最後に、恋愛関係崩壊のように親密な他者を失う経験からの立ち直りには、喪失経験の再解釈や親密な他者への喪失経験の告白が重要であることが示唆されており(Harvey, 2000)、このような恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態は恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を与える可能性が高い。しかし、研究5では恋愛関係崩壊前の情緒的サポー

ト源が恋愛パートナーに限定されていた者において、恋愛関係崩壊からの立ち直りが困難になるというプロセスを検討することができなかった。したがって、研究6で検討を行なう。

研究6 恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響

問題

研究6の目的は、恋愛関係崩壊前、ソーシャル・サポートの多くを恋愛パートナーから提供されていた者において、恋愛関係崩壊からの立ち直りが困難になるというプロセスを検討することである。

研究4では、恋愛関係崩壊後、多様な関係からサポートを受ける者が、特定の関係からサポートを受ける者より、恋愛関係崩壊からの立ち直り状態が良好であることが示唆された。また、研究5で得られた結果をふまえるならば、このような恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態は、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態に影響を受けており、恋愛関係崩壊からの立ち直りは恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態に規定されることが予測される。

性別に関わらず、恋愛関係崩壊前、多くのソーシャル・サポート源を維持していれば、恋愛関係崩壊後、それらのソーシャル・サポート源が恋愛関係崩壊からの立ち直りに重要な役割を果たすだろう。なぜなら、ソーシャル・サポートを受けられる多くの対人関係を維持することによって、①多くの人から受容され、共感を受ける機会が増える、②新しい価値観や考え、自分とは異なる物事への対処行動などに触れる機会が増えると考えられるためである。したがって、恋愛関係崩壊前からソーシャル・サポート源が多様であるほど、恋愛関係崩壊からの立ち直りに役立つソーシャル・サポートを選択できる可能性が広がる。実際、デート・バイオレンスという深刻な問題が生じて、問題解決に役立つソーシャル・サポート源を選択できないため(Molidor & Tolman, 1998)、問題が深刻化しやすい(Salazar et al., 2004)という知見も得られており、問題解決のためのソーシャル・サポート源の選択は重要である。ソーシャル・サポートを受容できる関係が多いからといって、ソーシャル・サポート源が多種多様であると断定することはできないが、少なくともソーシャル・サポート源が特定の人物に限定される状況と比較すると、多様な資源を得られる

可能性が高い。そこで、研究6では、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへのソーシャル・サポートの依存度、恋愛関係以外のソーシャル・サポート提供者の人数をソーシャル・サポート源の多様性の指標として用い、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源の多様性が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について検討する。

また、研究1、研究5の結果をふまえるならば、恋愛関係崩壊からの立ち直りに対し、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポートの恋愛パートナーへの依存度が与える影響には、ジェンダー差が認められる可能性が高い。研究1の結果より、女性と比較して、男性は情緒的サポートを恋愛パートナーから得ており、情緒的サポート源としての恋愛パートナーの重要性が高いことが示唆された。また、研究5の結果より、女性においては、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへのソーシャル・サポートの依存度と恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源の大きさとの間に関連が認められないが、男性においては関連が認められることが示されている。以上の結果をふまえるならば、男性においては、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへのソーシャル・サポート依存度が恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を与えるのに対し、女性においてはあまり影響しないと考えられる。したがって、研究6では男女別の分析も実施する。

予測

1. 性別に関わらず、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへのソーシャル・サポート依存度が低いほど、恋愛関係崩壊後の立ち直り評価が高くなる
2. 性別に関わらず、恋愛関係崩壊前、多くのソーシャル・サポート源を維持していたほど、恋愛関係崩壊後の立ち直り評価が高くなる
3. 予測1の影響過程は、女性よりも男性で顕著に認められる

方法

調査協力者 質問紙の回答者は174名であった。回収率は78.7%であった。過去3年間に失恋経験があると回答した大学生は102名（男性53名、女性49名）であり、平均年齢は20.27歳（ $SD=0.92$ 、レンジ19-24）であった。

手続き 研究5と同様であった。ソーシャル・サポート尺度については回答方法を説明しながら、講義室内で回答してもらった。残りの質問項目については自宅にて回答し、1週間後の講義時間に提出するよう教示した。

質問紙 質問紙は表紙と以下に示す尺度によって、構成された。表紙には、プライベートなことについて尋ねる質問項目があるが、個人が特定できる形式で研究結果が公表されないことを記載した。また、思い出すことで不快な思いをする場合、その質問項目には無理に回答する必要がないことについても記載した。

1) 失恋前に受容していたソーシャル・サポートの測定

研究3と同様に、「恋愛」「失恋」についての定義を記載し、過去3年以内の中で、最近の失恋経験について以下の質問への回答を求めた。想起した失恋相手を「Aさん」とした。

①失恋前のソーシャル・サポートの受容

研究5と同様、「Aさんと失恋する前」のソーシャル・サポートの受容状況について尋ねた。失恋相手であるAさんについては必ず1番目に回答するよう教示した。

- a. Aさんと失恋する前に、あなたに共感してくれることやあなたを信頼してくれることが多く、あなたを大切に思ってくれた人は誰ですか（情緒的サポート）
- b. Aさんと失恋する前に、あなたが個人的な問題や、人間関係、所属する集団における社会的な問題などに対処するために、必要な情報や知識を与えてくれた人は誰ですか（情報的サポート）

以上の2項目について、できるだけたくさんの方のイニシャルを挙げてもらった（最高10人まで）。次に、性別及び関係（友人/家族/恋人など）について回答を求めた。最後に、サポート量の全てを100%とすると、それぞれの人からどの程度サポートを受容していたか、おおよその割合を割り当てるよう求めた。

②失恋前のソーシャル・サポートが想起できた程度

「失恋する前のこのようなサポートの受け方について、あなたはどの程度、思い出すことができましたか？」という1項目について、全く思い出せなかった（1点）～はっきりと思い出せた（7点）までの7件法で回答するよう求めた。

2) 恋愛関係崩壊後の心理的反応に関する質問

①失恋からの経過期間

「Aさんとの失恋からどれくらい経ちましたか」と尋ね、（ ）年（ ）ヶ月の空欄に数字を記入するよう求めた。

②失恋相手との関係期間

「Aさんとの恋愛期間（片想いの人はAさんに想いを寄せていた期間）はどのくらいでしたか」と尋ね、（ ）年（ ）ヶ月の空欄に数字を記入するよう求めた。

③失恋相手との一体感

Inclusion of Other in Self scale(Aron et al., 1992)を邦訳した1項目を用いて「あなたとAさんとの関係を最もよく表しているものはどれですか」と7件法で尋ねた。

④失恋後の立ち直り過程及び立ち直り状態

研究3で作成した恋愛関係崩壊からの立ち直り段階尺度37項目について、全くあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(5点)までの5件法で尋ねた。

結果

研究5と同様、まず、失恋前のソーシャル・サポートが想起できた程度を尋ねた項目において、情緒的サポート、情動的サポートのどちらかを全く思い出すことができなかつたと判断される13名(この質問項目に1点、2点と回答した者)、誤回答や回答の不備が多かつた13名を分析から除外し、76名(男性41名、女性35名)が分析対象となつた。

1) 恋愛関係崩壊後の立ち直り段階尺度の因子分析

研究3, 研究4と同様に恋愛関係崩壊後の立ち直り段階尺度計37項目について因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。その結果, 研究3, 研究4とほぼ同様の4因子構造(31項目)を抽出した。累積寄与率は49.1%であつた。

第1因子は「苦しかつた」, 「悲しかつた」などの項目に高い負荷を示したため, 「傷つき」因子と判断された($\alpha=.89$)。第2因子は「楽しい出来事を思い出した」, 「関係が戻ると思つた」などの項目に高く負荷しているため, 「未練」因子と判断された($\alpha=.86$)。第3因子は「相手の人を恨んだ」, 「幻滅した」などの項目に高く負荷しているため, 「失望」因子と判断された($\alpha=.82$)。第4因子は「自分の成長に役立つと思つた」, 「失恋のよい面を見つけた」などの項目に高く負荷しているため, 「希望」因子と判断された($\alpha=.82$)。以下の分析では, 各因子に含まれる項目の平均得点を下位尺度得点として用いた。

2) 恋愛関係崩壊における様々な特徴

予測の検討を行なう前に, 研究6で用いるデータの特徴について述べる。それぞれの変数の平均値と標準偏差(Table 7-1, Table 7-2, Table 7-3)については, 以下のとおりである。失恋から約1年経過した失恋が想起されておる($M=11.96$), その失恋相手との関係期間についても約1年であつた($M=12.55$)。失恋前, 恋人へ情動的サポートを依存する割合

より($M=18.83$), 恋人へ情緒的サポートを依存する割合の方が高かった($M=27.45$)。失恋前の情緒的サポート人数, 情動的サポート人数として, 約3~4人ほどの人物が挙げられている。また, Table 7-1~7-3 には記載されていないが, 失恋直後の苦悩やショック度を示すと考えられる傷つきの得点については中程度($M=2.81$)であった。

Table 7-1 本研究で用いる失恋の特徴に関する変数の記述統計

	失恋からの経過期間			失恋相手との交際期間			失恋相手との一体感		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体
度数	41	35	76	38	35	73	40	35	75
平均値	14.23 (11.29)	9.30 (8.24)	11.96 (10.24)	12.60 (13.42)	12.49 (11.90)	12.55 (12.63)	4.45 (1.95)	4.51 (1.70)	4.48 (1.83)
最小値	0.50	0.50	0.50	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
最大値	36.00	31.00	36.00	48.00	51.00	51.00	7.00	7.00	7.00

Table 7-2 本研究で用いる失恋前の情緒的サポートに関する変数の記述統計

	失恋前の情緒的サポート恋人依存			失恋前の情緒的サポート人数		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体
度数	41	35	76	41	35	76
平均値	29.75 (29.02)	24.74 (25.90)	27.45 (27.56)	3.24 (1.88)	4.26 (2.52)	3.71 (2.24)
最小値	0.00	0.00	0.00	0.00	1.00	0.00
最大値	100.00	80.00	100.00	9.00	9.00	9.00

Table 7-3 本研究で用いる失恋前の情動的サポートに関する変数の記述統計

	失恋前の情動的サポート恋人依存			失恋前の情動的サポート人数		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体
度数	40	35	75	40	35	75
平均値	21.88 (24.56)	15.34 (20.24)	18.83 (22.74)	3.42 (1.69)	4.26 (2.27)	3.81 (2.01)
最小値	0.00	0.00	0.00	1.00	0.00	0.00
最大値	85.00	100.00	100.00	9.00	9.00	9.00

また, これらの変数間にジェンダー差が認められるか検討するために, t 検定を実施した。その結果, 失恋からの経過期間に差が認められ($t(74)=2.14$, $p<.05$), 男性と比較して女性の失恋からの経過期間が短かった。さらに, 失恋前の情緒的サポート人数($t(74)=2.00$,

$p<.05$)に差が認められ、失恋前の情動的サポート人数($t(73)=1.81$, $p<.10$)に差が認められる傾向にあった。女性と比較して、男性は失恋前の情動的/情動的サポート人数が少なかった。

次に、変数間の0次相関について Table 7-4に示す。全体的な傾向として、失恋相手との関係期間や失恋相手との一体感と、失恋前のソーシャル・サポート恋人依存度(情動的/情動的)との間には正の相関が認められた。つまり、失恋相手との関係期間が長いほど、失恋相手との一体感を感じるほど、失恋したパートナーからソーシャル・サポートを得ていたことを示している。また、失恋前の情動的恋人依存度と情動的恋人依存度($r=.74$)、失恋前の情動的サポート人数と情動的サポート人数($r=.69$)の間にも正の相関が認められた。最後に、失恋相手との関係期間と失恋相手との一体感($r=.34$)との間に正の相関が認められた。

Table 7-4 重回帰分析において検討する失恋に関する変数間の0次相関($N=76$ 名)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
① 経過期間										
② 関係期間	.11									
③ 一体感	-.05	.34 *								
④ 傷つき	.17	.06	.24 *							
⑤ 未練	.08	.10	.19	.58 **						
⑥ 失望	.04	.03	.08	.03	-.19					
⑦ 希望	.04	.09	-.05	.23 *	.10	.27 *				
⑧ 失恋情緒恋人依存度(%)	.14	.25 *	.48 **	.15	.18	.03	-.12			
⑨ 失恋情報恋人依存度(%)	.03	.24 *	.40 **	.16	.13	-.12	-.02	.74 **		
⑩ 失恋情緒的サポート人数	-.10	.13	.01	-.09	.10	-.05	.17	-.23	-.18	
⑪ 失恋情動的サポート人数	-.03	.16	.05	-.08	.02	-.01	.15	-.16	-.21	.69 **

* $p<.05$ ** $p<.01$

最後に、これらの変数間の相関に関するジェンダー差について述べる(Table 7-5, Table 7-6)。男性において特徴的であった点は、失恋前の情動的サポート恋人依存度と失恋前の情動的サポート人数との間に負の相関が認められたことである($r=-.37$)。また、情動的サポートにおいても同様の相関が認められた($r=-.31$)。つまり、交際中にソーシャル・サポートを恋人に依存すればするほど、ソーシャル・サポートを提供してくれる人数は減少することが示された。また、関係期間が長くなれば、一体感が高まるという正の関連が認められた($r=.43$)。しかし、女性においては、これらの関連が認められなかった。一方、女性においては未練と一体感との間に正の相関が認められ($r=.35$)、失望との間には負の相関が認められた($r=-.50$)。

Table 7-5 重回帰分析において検討する失恋に関する変数間の0次相関（男性：N=41名）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
① 経過期間										
② 関係期間	.13									
③ 一体感	.08	.43 **								
④ 傷つき	.06	.01	.28							
⑤ 未練	.14	.00	.07	.61 **						
⑥ 失望	.04	.03	.27	.40 *	.10					
⑦ 希望	-.05	.29	.01	.28	.17	.34 *				
⑧ 失恋情緒恋人依存度(%)	.30	.22	.42 **	.01	.07	.11	-.29			
⑨ 失恋情報恋人依存度(%)	.05	.21	.46 **	.13	.07	.01	-.07	.85 **		
⑩ 失恋情緒的サポート人数	-.12	.01	.07	-.11	-.12	-.01	.09	-.37 **	-.23	
⑪ 失恋情報のサポート人数	.03	.04	.01	-.13	-.15	.04	.08	-.30	-.31 *	.71 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 7-6 重回帰分析において検討する失恋に関する変数間の0次相関（女性：N=35名）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
① 経過期間										
② 関係期間	.09									
③ 一体感	-.29	.24								
④ 傷つき	.27	.12	.20							
⑤ 未練	-.06	.21	.35 *	.53 **						
⑥ 失望	.17	.03	-.18	-.38 *	-.50 **					
⑦ 希望	.19	-.17	-.15	.16	.01	.19				
⑧ 失恋情緒恋人依存度(%)	-.20	.30	.56 **	.30	.30	-.04	.13			
⑨ 失恋情報恋人依存度(%)	-.12	.29	.33	.15	.17	-.26	.03	.58 **		
⑩ 失恋情緒的サポート人数	.02	.24	-.05	.00	.34 *	-.18	.29	-.06	-.09	
⑪ 失恋情報のサポート人数	.00	.29	.07	.04	.21	-.12	.24	-.02	-.06	.65 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

3) 恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポートの源の多様性が恋愛関係崩壊からの立ち直り評価に及ぼす影響

予測について検討するために、基準変数を恋愛関係崩壊からの立ち直り評価4因子（傷つき、未練、失望、希望）とし、Step1に失恋からの経過期間、失恋相手との一体感¹、Step2に失恋前のソーシャル・サポート人数（情緒的/情動的）、Step3に失恋前のソーシャル・サポート恋人依存（情緒的/情動的）を投入する階層的重回帰分析を実施した（ステップワイズ法）。ただし、情緒的サポートと情動的サポートには高い相関が認められたため、各サポートごとに分析を実施した。

¹ 失恋相手との交際期間については、①失恋相手との一体感との中程度の相関が認められたこと、②失恋相手との一体感と失恋前のソーシャル・サポート恋人依存度（情緒的/情動的）との関連が、失恋相手との交際期間との関連より強かったことから、Step1に投入しなかった。

まず、傷つきについての結果を Table 7-7に示す。失恋相手との一体感が失恋後の傷つきと有意な正の関連を示した。この結果は、失恋相手との一体感を感じるほど、失恋後の傷つきも大きくなることを示している。また、失恋前の情緒的サポート諸変数が失恋後の傷つきに及ぼす影響に関するジェンダー差について検討するため、男女別に同様の分析を実施した(Table 7-8, Table 7-9)。男性においては、失恋相手との一体感が失恋後の傷つきと有意な正の関連を示す傾向にあった。また、女性においては、失恋前の情緒的サポート恋人依存が失恋後の傷つきと有意な正の関連を示した。概ね、傷つきは失恋相手との一体感と関連があったが、女性においては、失恋前の恋人への情緒的サポート依存の影響が認められ、失恋前、恋人から多くの情緒的サポートを得ていた女性ほど、恋愛関係崩壊後の傷つきが大きいことが示唆された。これは、予測1を支持する方向の結果であるが、失恋前の恋人への情緒的サポート依存の影響力が女性よりも男性で顕著であるという予測3を支持しない結果であった。

Table 7-7 失恋前の情緒的サポート諸変数が傷つきに及ぼす影響

	β	t 値	df	p 値	VIF
Step1					
失恋からの経過期間					
失恋相手との一体感	0.24	2.13	73	0.04	1.00
Step2					
失恋前の情緒的サポート人数					
Step3					
失恋前の情緒的サポート恋人依存					

註) ステップワイズ法, $F(1,73)=4.51, p<.05, Adj.R^2=.05$

Table 7-8 男性における失恋前の情緒的サポート諸変数が傷つきに及ぼす影響

	β	t 値	df	p 値	VIF
Step1					
失恋からの経過期間					
失恋相手との一体感	0.28	1.81	38	0.08	1.00
Step2					
失恋前の情緒的サポート人数					
Step3					
失恋前の情緒的サポート恋人依存					

註) ステップワイズ法, $F(1,38)=3.23, p<.10, Adj.R^2=.06$

Table 7-9 女性における失恋前の情緒的サポート諸変数が傷つきに及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1					
失恋からの経過期間					
失恋相手との一体感					
Step2					
失恋前の情緒的サポート人数					
Step3					
失恋前の情緒的サポート恋人依存	0.30	1.83	33	0.08	1.00

註) ステップワイズ法, $F(1,33)=3.34, p<.10, Adj.R^2=.06$

次に、未練についての結果を示す。ジェンダー差を考慮しない分析においては、失恋前の情緒的サポート諸変数はいずれも未練に影響を与えていなかった。そこで、失恋前の情緒的サポート諸変数が失恋後の未練に及ぼす影響に関するジェンダー差について検討するため、男女別に同様の分析を実施した。男性においては、いずれの変数も失恋後の未練とは関連がなかった。一方、女性においては、失恋相手との一体感と失恋後の未練が有意な正の関連を示した。この結果は、失恋相手との一体感を感じるほど、失恋後の未練も大きくなることを示している。また、失恋前の情緒的サポート人数と失恋後の未練も有意な正の関連を示した(Table 7-10)。失恋前の情緒的サポート人数が多くなればなるほど、失恋後の未練が高くなるという結果は予測していない結果であり、予測2の結果を支持しない方向の結果でもある。おそらく失恋前に情緒的サポート源を多く持つことによって、失恋後も失恋による苦悩や悲しみについて共感し、話を聞いてくれる人々が多く存在するので、何度も失恋や失恋相手について想起する機会が増えるためと推測される。

Table 7-10 女性における失恋前の情緒的サポート諸変数が未練に及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1					
失恋からの経過期間					
失恋相手との一体感	0.37	2.38	32	0.02	1.00
Step2					
失恋前の情緒的サポート人数	0.36	2.35	32	0.03	1.00
Step3					
失恋前の情緒的サポート恋人依存					

註) ステップワイズ法, $F(2,32)=5.37, p=.01, Adj.R^2=.20$

さらに、失望についての結果について述べる。ジェンダー差を考慮しない分析においては、いかなる変数も失望に影響を与えていなかった。そこで、失恋前の情緒的サポート諸変数が失恋後の失望に及ぼす影響に関するジェンダー差について検討するため、男女別に同様の分析を実施した。その結果、男性において、失恋相手との一体感が失恋後の失望と有意な正の関連を示す傾向にあった(*Table 7-11*)。女性については、失望にいかなる変数も影響を与えていなかった。

Table 7-11 男性における失恋前の情緒的サポート諸変数が失望に及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1					
失恋からの経過期間					
失恋相手との一体感	0.27	1.74	38	0.09	1.00
Step2					
失恋前の情緒的サポート人数					
Step3					
失恋前の情緒的サポート恋人依存					

註) ステップワイズ法, $F(1,38)=3.04, p<.10, Adj.R^2=.05$

最後に、失恋からの立ち直りの良好さを示す希望に関する結果について述べる。ジェンダー差を考慮せず行なった分析において、いかなる変数も希望に影響を与えていなかった。そこで、失恋前の情緒的サポート諸変数が失恋後の希望に及ぼす影響に関するジェンダー差について検討するため、男女別に同様の分析を実施した。その結果、男性において、失恋前の情緒的サポート恋人依存が希望と有意な負の関連を示す傾向にあった(*Table 7-12*)。つまり、失恋前、情緒的サポートの多くを恋愛パートナーに依存していた男性ほど、失恋からの立ち直りが困難であることを示している。また、女性については、失恋前の情緒的サポート人数が希望と有意な正の関連を示す傾向にあった(*Table 7-13*)。つまり、失恋前、多くの情緒的サポート源を持っていた女性ほど、失恋からの立ち直り状態がよいことを示している。これらの結果は、予測1、予測2で述べたように、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源の多様性の効果を支持するものであるが、男性と女性で異なる影響過程が存在することを示している。

最後に、失恋前の情動的サポートの諸変数についても同様の分析を実施した。しかし、性別に関わらず、これらの変数は失恋からの立ち直り(傷つき、未練、失望、希望)に全く影響を及ぼしていなかった。

Table 7-12 男性における失恋前の情緒的サポート諸変数が希望に及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1 失恋からの経過期間 失恋相手との一体感					
Step2 失恋前の情緒的サポート人数					
Step3 失恋前の情緒的サポート恋人依存	-0.29	1.86	38	0.07	1.00

註) ステップワイズ法, $F(1,38)=3.46, p<.10, Adj.R^2=.06$

Table 7-13 女性における失恋前の情緒的サポート諸変数が希望に及ぼす影響

	β	t値	df	p値	VIF
Step1 失恋からの経過期間 失恋相手との一体感					
Step2 失恋前の情緒的サポート人数	0.29	1.73	33	0.09	1.00
Step3 失恋前の情緒的サポート恋人依存					

註) ステップワイズ法, $F(1,33)=2.99, p<.10, Adj.R^2=.06$

考察

まず、全体的な結果として、恋愛関係崩壊相手との一体感が、傷つき、未練、失望などの恋愛関係崩壊からの立ち直り過程に影響を与えていた。恋愛パートナーとの一体感は、恋愛中の親密さ(Sternberg, 1988)や恋愛関係へのコミットメント(Berscheid, Snyder,& Omoto, 1989)などと関連が高いことが示唆されており、恋愛関係崩壊からの立ち直りには交際期間や関係満足度、コミットメントなど恋愛関係崩壊前の関係の質が関連する(e.g., Simpson, 1987; Mearns, 1991; 和田, 2000)といった先行研究と一貫した結果である。

一方、恋愛関係崩壊からの経過期間は、恋愛関係崩壊からの立ち直り評価にほとんど影響を与えていなかった。これまで、縦断的な調査(3ヶ月~1年)によって恋愛関係崩壊からの経過期間が抑うつや苦悩と関連することが示唆されている(Monroe et al., 1999; Simpson, 1987)。しかし、研究6と分析手法は異なるものの、情動的危機の段階(傷つき)と離脱-再建の段階(希望)という両方の段階に着目した先行研究においては、恋愛関係崩壊からの経過期間と恋愛関係崩壊からの立ち直り過程の関連は認められているが、恋愛関

係崩壊からの経過期間が長いほど、他の恋愛関係を求めないといった解釈が困難な結果が多く得られており、一義的な関連を見出すことができていない(石本・今川, 2001)。また、本論文においては、中学生以降の失恋のうち、最も辛かった失恋について尋ねた研究3においては、恋愛関係崩壊からの経過期間が影響を与えていた。しかし、進学や引越しなどの物理的な変化によるソーシャル・サポート源の変化を極力減らすため、最近の失恋について尋ねた研究6では経過期間の影響が認められなかった。研究6においても、失恋による傷つきが高いことは確認されているが($M=2.81$ 点:5件法)、恋愛関係崩壊による傷つきのインパクトは研究3の方が大きかったと考えられる。以上の結果より、失恋による傷つきが大きかった場合にのみ、恋愛関係崩壊からの経過期間は情動的危機の段階(傷つき)と関連するが、その場合でも離脱-再建の段階(希望)に至るまでの期間については個人差が大きく、恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響は少ないと推測される。

次に、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポートの多様性が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について述べる。研究6においては、①性別に関わらず、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへのソーシャル・サポート依存度が低いほど、恋愛関係崩壊後の立ち直り評価が高くなる、②性別に関わらず、恋愛関係崩壊前、多くのソーシャル・サポート源を維持していたほど、恋愛関係崩壊後の立ち直り評価が高くなると予測し、検討を行なった。なぜなら、恋愛関係崩壊前からソーシャル・サポート源が多様であるほど、恋愛関係崩壊からの立ち直りに役立つソーシャル・サポートの選択肢が広がると考えられたためである。確かに、恋愛関係崩壊前の情緒的サポートの多様性は、恋愛関係崩壊からの立ち直り(特に、希望)に影響を及ぼすことが示唆された。しかし、男性と女性ではその影響の様相が異なっていた。

女性において、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへの情緒的サポート依存が影響したのは、恋愛関係崩壊時のショックを反映する傷つきのみであった。むしろ、恋愛関係崩壊後の未練に加え、恋愛関係崩壊を肯定的に評価できる立ち直り段階を反映している希望に影響するのは、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート人数であった。一方、男性において、希望に影響するのは恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへの情緒的サポート依存であった。具体的には、恋愛関係崩壊前、多くの情緒的サポートを恋愛パートナーに依存していた男性は、恋愛関係崩壊後、立ち直りが困難になることが示唆された。

これらの結果が得られた理由について、研究5の結果も合わせて考察する。男性においては、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへの情緒的サポート依存は、恋愛関係崩壊後の情

情緒的サポート源の数に影響を与えていた。具体的には、恋愛関係崩壊前に、恋愛パートナーから多くの情緒的サポートを得ていた男性は、恋愛関係崩壊後、情緒的サポートを得られる人々の数が少なかった。一方、女性においては、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへの情緒的サポート依存と恋愛関係崩壊後の情緒的サポート源の数に関連が認められず、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート源の数が恋愛関係崩壊後の情緒的サポート源の数に直接影響していた。これらの結果をふまえるならば、男性においては、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへ情緒的サポートを依存することが、恋愛関係崩壊後、立ち直りに役立つ情緒的サポートの選択を困難にさせ、立ち直りが困難になるというプロセスが存在すると考えられる。一方、女性においては、恋愛関係崩壊前、多くの情緒的サポート源を維持することが、恋愛関係崩壊後、立ち直りに役立つ情緒的サポートの選択を容易にさせ、立ち直りの良好さにつながるというプロセスが存在すると考えられる。両者の大きな違いは、恋愛関係崩壊前、恋愛パートナーへ情緒的サポートを依存することが、その他の情緒的サポート源の縮小につながるか否かである。研究2の結果をふまえると、このようなジェンダー差は、「男性は強く、独立的で、女性は弱く、依存的である」という伝統的な性役割規範の内化によって生じた結果であると考えられる。

研究6では、①恋愛関係崩壊からの立ち直り過程（傷つき、未練、失望）に最も影響を与えるのは、恋愛パートナーへの一体感であること、②男性において、恋愛関係崩壊からの立ち直り状態（希望）に最も影響を与えるのは、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへの情緒的サポート依存であること、③女性において、恋愛関係崩壊からの立ち直り状態（希望）に最も影響を与えるのは、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート源の数であること、以上3点について有効な示唆を得た。しかし、恋愛関係崩壊前の情動的サポートの多様性は恋愛関係崩壊からの立ち直りに全く影響を与えていなかったことから、このような影響過程が認められるのは、情緒的サポートに限定される可能性がある。おそらく情動的サポートについては、恋愛関係の維持によってサポート源が左右されない、もしくは、恋愛関係崩壊後に新たなソーシャル・サポート源を獲得しやすいといった情緒的サポートと異なる特徴があるのであろう。今後、このような可能性をふまえ、情動的サポートの多様性が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について検討する必要があると考える。

総合考察

第4章では、研究4、研究5、研究6という3つの研究を通して、恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を与える恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポートの多様性の影響について検討を行なった。

研究4においては、恋愛関係崩壊後、情緒的サポートを様々な関係から得ることができ者が、特定の関係(研究4では同性友人)からしか情緒的サポートを得られない者より、恋愛関係崩壊からの立ち直り状態が良好であることが示唆された。また、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程を分類したところ、恋愛関係崩壊からの立ち直りに向けて様々な経験をしているにも関わらず、立ち直り評価が低い人々には、同性友人という特定の関係から情緒的サポートを受ける者が多く、様々な関係から情緒的サポートを受ける者が少ないことも示唆された。これら2つの分析によって、恋愛関係崩壊からの立ち直りには、情緒的サポート源の多様性が重要な役割を果たす可能性が示唆された。

次に、研究5においては、恋愛関係崩壊後の立ち直りに恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が影響を与えるというプロセスを明らかにするために、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態と恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態との関連について検討を行なった。その結果、男性において、恋愛関係崩壊前、情緒的サポート源が恋愛パートナーに限定されると、その他の情緒的サポート源が減少するため、恋愛関係崩壊後、立ち直りのために必要な情緒的サポート源が少なくなるという過程が認められることを示した。一方、女性においては、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへの情緒的サポート源の依存度と情緒的サポート源の数との関連が認められず、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート源の数が、直接的に恋愛関係崩壊後の情緒的サポート源の数に影響を与えることを示唆した。

さらに、研究6においては、恋愛関係崩壊後の立ち直りに恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が影響を与えるというプロセスについて検討を行なった。その結果、男性において、恋愛関係崩壊からの立ち直りに最も影響を与えるのは、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへの情緒的サポートを依存する程度であり、恋愛関係崩壊前に、多くの情緒的サポートを恋愛パートナーから得ていると、恋愛関係崩壊後に立ち直りが困難になることが示唆された。一方、女性において、恋愛関係崩壊からの立ち直りに最も影響を与えるのは、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート源の数であり、恋愛関係中、その他の関係からの情緒的サポートを維持できなければ、恋愛関係崩壊後の立ち直りが困難になることが示唆された。

これらの結果をふまえるならば、本論文の予測は概ね支持され、男性は恋愛関係崩壊前には専ら恋愛パートナーに情緒的サポートを求めるため、恋愛パートナーとの関係が崩壊すると、情緒的サポート源が極端に少ない状況に置かれ、恋愛関係崩壊からの立ち直りが困難になるというプロセスが存在すると考えられる。一方、女性は恋愛関係崩壊前に、恋愛パートナーに依存しているか否かに関わらず、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート源の数が恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響する。研究5、研究6と一貫して、恋愛関係崩壊前のサポート人数や恋愛関係崩壊後のサポート人数が男性より多いことが示されている。つまり、女性は恋愛関係崩壊前に情緒的サポート源を男性より多く維持している可能性が高いと考えられ、このようなソーシャル・サポート形態の違いが、先行研究で認められてきた恋愛関係崩壊からの立ち直りのジェンダー差の1つの原因であると考えられる。

最後に、本章で行なわれた3つの研究に関する課題と今後の展望について述べる。

まず、研究4、研究6では回顧法を用いて、ソーシャル・サポートが恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について検討を行なった。これまで恋愛関係崩壊に関する23編の論文のうち、縦断的手法で立ち直りを検討した論文は9編であり、回顧法を用いた検討の方が相対的に多い。特に、傷つきといった一時的な心理的状态の検討だけでなく、恋愛関係崩壊から一定期間を経た後の「恋愛関係崩壊からの立ち直り」という現象を捉えるためには、回顧法を用いることが有効であると考えられる。特に、本研究では恋愛関係崩壊とソーシャル・サポート源という記憶に残りやすい出来事に焦点を当てているため、回顧法による記憶の歪みの影響は比較的受けにくいと思われる。しかし、それでも恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態について(研究5、研究6)、1割程度の者が思い出すことができないと回答していた。これらの問題を解決するためには、今後、縦断的な調査を行い、本研究で得られた知見と一貫した結果が得られるか検討することが必要であると考ええる。

次に、恋愛関係崩壊前後のソーシャル・サポート源の多様性について、研究4では関係の種類、研究5、研究6ではサポート源として挙げられた人数として捉え、様々な視点から多様性について検討を行った。しかし、年齢、性別、関係性などの点でどのような特徴をもったサポート源から情緒的サポートを得ることが立ち直りに対して有効なのかについては、今後、明らかにされる必要があるだろう。最後に、研究5では、恋愛関係崩壊前のサポート源の数は恋愛関係崩壊後もあまり変化しないことが示唆されたが、恋愛関係崩壊からの立ち直りを早めるために、恋愛関係崩壊後に新たな対人関係を積極的に構築しよう

とする者がいる可能性は否定できない。通常は、恋愛関係崩壊後の苦悩のため、ソーシャル・サポート源の獲得は容易ではないと考えられるが、ソーシャル・サポート源の変化と恋愛関係崩壊後の立ち直りについても、今後検討する必要があるだろう。

本章の要約

3つの研究を通して、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源の多様性が、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態に影響を与え、恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を及ぼす過程について検討された。まず、恋愛関係崩壊後の情緒的サポート源の多様性は恋愛関係崩壊からの立ち直りにポジティブな影響を及ぼしていた。また、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態に及ぼす影響過程にはジェンダー差が認められた。恋愛パートナーへの情緒的サポート依存度が恋愛関係崩壊後の情緒的サポートの多様性に影響するのは男性だけであった。最後に、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後の立ち直りに及ぼす影響について検討された。その結果、男性については恋愛パートナーへの情緒的サポート依存度が、女性については恋愛関係崩壊前の情緒的サポートの人数が、それぞれ恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を及ぼすことが示唆された。

第5章

総括と今後の課題

第1章で述べたように、本研究では、これまでの恋愛関係崩壊研究において曖昧にされてきた「恋愛関係崩壊からの立ち直り」を、「恋愛パートナーから心が離れ、恋愛関係崩壊を肯定的に捉えることができること」と定義した。そして、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程として、Bowlby(1961)の対象喪失からの立ち直りモデルを理論的背景とした4段階（情動的危機の段階、抗議-保持の段階、断念-絶望の段階、離脱-再建の段階）を想定し、最後の「離脱-再建の段階」を立ち直り指標とした。このような観点から、恋愛関係崩壊からの立ち直りに関する研究を展望し、女性の方が男性より恋愛関係崩壊からの立ち直り評価が高い可能性を示した。このジェンダー差は、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態のジェンダー差に由来する可能性がある。すなわち、女性は恋愛パートナーを含め多様な関係からソーシャル・サポートを受けるため、恋愛関係崩壊後も立ち直りに必要なサポートを受容できるのに対し、男性はより親密な異性である恋愛パートナーからのソーシャル・サポートに依存しがちであるため、恋愛関係崩壊後に立ち直りに必要なサポートを受容しにくい、ということである。さらに、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態のジェンダー差は、社会における性役割を内在化することによって生じる可能性がある。以上の議論を踏まえて、本論文では、恋愛関係中のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を及ぼすプロセスについて実証的に検討すると共に、恋愛関係崩壊からの立ち直りのジェンダー差を社会における性役割の観点から説明できる可能性について探究した。

本章では、本論文で実施された6つの研究を通して得られた知見を総括し、恋愛関係中のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について述べる。そして、これらの実証的な検討を通して、恋愛関係崩壊からの立ち直りに関するジェンダー差についてどのような説明が可能であるかを考察し、恋愛関係崩壊からの立ち直りに関するジェンダー差が、社会における性役割に規定された恋愛関係中のソーシャル・サポート形態によって生じる可能性について論じる。さらに、本研究で得られた知見の一般化可能性について言及し、最後に今後の展望について述べる。

1. 本研究から得られた結果

まず、第2章では対人関係ネットワークからのサポート授受という観点から、対人関係における恋愛パートナーの重要性にジェンダー差が認められるか検討した(研究1)。その結果、男性においては、他の関係より恋愛パートナーから提供される情緒的サポート量が最も高いのに対し、女性は恋愛パートナーと同性友人の情緒的サポート量が同程度に高いことが示された。この結果は、女性は多様な関係からサポートを受けるが、男性は配偶者からのサポートに頼るという先行研究(Antonucci & Akiyama, 1987; 野辺, 1999)と一貫した結果であり、女性より男性にとって、恋愛パートナーが情緒的サポート源として重要な役割を果たしている可能性が示された。

また、ソーシャル・サポート源の選択に個人差を生じさせる要因としてジェンダー・スキーマに着目し、ソーシャル・サポート源の選択とどのような関連が認められるかについても検討した(研究2)。まず、性別に関わらず、ジェンダー・スキーマの強い者は他の関係より恋愛パートナーから多くの情緒的サポートを受けるという結果が得られた。つまり、性別に関わらず、性差観は恋愛パートナーへの情緒的サポート依存度を高めると考えられる。また、ジェンダー・スキーマの強い男性は、ジェンダー・スキーマの強い女性より異性の情緒的サポート源が多く、ジェンダー・スキーマの弱い男性より同性の情緒的サポート源が少ないという結果も示された。つまり、性差観の強い男性は弱い男性に比べて、性役割に沿って情緒的サポートを異性に依存する傾向が強いと考えられる。以上の結果より、性役割の内在化の程度によって、ソーシャル・サポート源の選択が規定されることが示唆された。

第3章では、これまで整理されてこなかった恋愛関係崩壊からの立ち直りを測定する尺度について、適切な尺度を確定した(研究3)。これまで恋愛関係崩壊後の立ち直り過程を包括的に捉える指標が少なかったため、Bowlby(1961)の提唱した対象喪失からの立ち直り過程を援用し、「離脱-再建の段階」を恋愛関係崩壊からの立ち直りの指標とすることの妥当性が確認された。具体的には、恋愛関係崩壊後の立ち直り過程に関する尺度と一般的心理的健康を測定する尺度(GHQ, UCLA 孤独感)及び恋愛関係崩壊後の成長との関連が検討された。概ね予測を支持する結果が認められた。まず、離脱-再建の段階と心理的不健康度との間に負の相関が認められ、恋愛関係崩壊後の成長の肯定的側面との間には正の相関が認められた。つまり、離脱-再建の段階に至ることによって、心理的不適応状態から回復し、ポジティブな心理的变化を経験する可能性が示された。その他の段階についても、

情動的危機の段階と心理的不健康度、及び恋愛関係崩壊後の成長の否定的側面である異性不信との間には正の相関、恋愛関係崩壊からの経過期間との間には負の相関が認められた。つまり、情動的危機の段階は恋愛関係崩壊直後の苦悩や心理的不適応を反映していると考えられる。さらに、抗議-保持の段階については別れた恋愛パートナーとの関係の重要性和正の相関が認められた。つまり、相手との関係が重要であったほど、恋愛関係崩壊後に未練が募ると考えられる。これらの結果を Bowlby(1961)が提唱した概念と照らし合わせても、各段階を測定する尺度として妥当であることが示唆された。

第4章では、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後の立ち直りに影響を及ぼすプロセスについて、3つの研究を通して総合的な検討を行った。その影響過程とは、恋愛関係崩壊前、男性はソーシャル・サポート源が恋愛パートナーに限定されるのに対し、女性は多様なソーシャル・サポート源を維持しているため、恋愛関係崩壊後、男性と比較して、女性の方が恋愛関係崩壊からの立ち直りに必要なソーシャル・サポートを得やすく、男性より女性の方が恋愛関係崩壊からの立ち直り状態が良好であるというプロセスである。

まず、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源の多様性と恋愛関係崩壊後の立ち直りとの関連について検討が行なわれた(研究4)。性別に関わらず、恋愛関係崩壊後、多くのソーシャル・サポート源を持つ者は様々なソーシャル・サポートを受けられるため、恋愛関係崩壊からの立ち直りが良好であると予測した。予測は概ね支持され、恋愛関係崩壊後、情緒的サポートを様々な関係から得ることができる者が、特定の関係からしか情緒的サポートを得られない者よりも立ち直り状態が良好であることが示唆された。また、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程の経験度に関する個人差を考慮し、立ち直り過程を4つのパターンに分類した分析においても同様の傾向が認められた。様々な経験をしているにも関わらず立ち直り評価が低い経験多・未回復群には、同性友人という特定の関係から情緒的サポートを受ける者が多く、様々な関係から情緒的サポートを受ける者が少ないという結果が得られている。これらの結果より、性別に関わらず、恋愛関係崩壊からの立ち直りには情緒的サポート源の多様性が重要な役割を果たしている可能性が示唆された。

次に、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態に及ぼす影響について検討した(研究5)。本論文で提唱するプロセスが支持されるならば、恋愛関係崩壊前、ソーシャル・サポート源が恋愛パートナーに限定されると、その他のソーシャル・サポート源が減少するため、恋愛関係崩壊後、立ち直りのために必

要なソーシャル・サポート源が少なくなるという過程が存在すると予測した。そして、これらの傾向は女性より男性で顕著であると予測した。検討の結果、予測は男性のみで支持された。また、予測が情緒的サポートで支持され、情動的サポートでは支持されなかったことを考慮すると、男性にとって、恋愛パートナーは情緒的サポート源として特別に重要な存在である可能性が示された。恋愛関係崩壊前に、恋愛関係以外のソーシャル・サポート源が少ないと、恋愛関係崩壊後もソーシャル・サポート源が少なくなるというプロセスについては性別に関わらず認められたが、女性については、恋愛関係崩壊前に情緒的サポート源が恋愛パートナーに限定されるからといって、その他の情緒的サポート源が少なくなるという関係は認められなかった。

最後に、恋愛関係崩壊前、ソーシャル・サポートの多くを恋愛パートナーから得ていた者において、恋愛関係崩壊からの立ち直りが困難になるというプロセスについて検討された（研究6）。恋愛関係崩壊前に多くのソーシャル・サポート源を維持していれば、恋愛関係崩壊後も多くの他者から励ましや共感、及び様々な対処行動のアドバイスを受けることができるかと推測した。恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源の多さに関連する要因として、恋愛関係崩壊前にソーシャル・サポートを恋愛パートナーに依存していた程度と恋愛関係以外のサポート源の数に着目した。そして、①恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへのソーシャル・サポート依存度が低いほど、恋愛関係崩壊後の立ち直り評価が高くなる、②恋愛関係崩壊前、多くのソーシャル・サポート源を維持していたほど、恋愛関係崩壊後の立ち直り評価が高くなるかと予測し、①の影響過程は、女性よりも男性で顕著に認められると予測した。その結果、性別に関わらず、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート人数が恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を及ぼすことが示唆され、予測2は支持された。しかし、恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響する要因は、女性においては恋愛関係崩壊前の情緒的サポート人数であったのに対し、男性においては恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへの情緒的サポート依存度であった。

第4章の結果より、恋愛関係崩壊前の情緒的サポートの多様性及び恋愛パートナーへの依存度が、恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響の様相に、ジェンダー差が認められる可能性が示された。

以上、研究1～研究6で得られた結果について総括する。本論文においては、恋愛関係崩壊からの立ち直りには他者からの励ましや共感が不可欠であることに加え、適切な対処行動をとるために様々な人からソーシャル・サポートを受けることが重要であると論

じてきた。そして、本論文における研究から、恋愛関係崩壊前から多様な情緒的サポート源が維持されることによって、恋愛関係崩壊後の立ち直りが促進される可能性が示唆された。具体的には、恋愛関係崩壊からの立ち直りには、①恋愛関係崩壊前、恋愛パートナーから情緒的サポートを受けている程度、②恋愛関係崩壊前の情緒的サポート源の数、③恋愛関係崩壊後の情緒的サポート源の数が影響を与えていることが示唆される。ただし、その影響過程にはジェンダー差が認められた。最も特徴的である点は、男性において恋愛関係崩壊前、多くの情緒的サポートを恋愛パートナーから得ることが、恋愛関係以外の情緒的サポート源の縮小をもたらすことである。女性では、恋愛関係崩壊前、多くの情緒的サポートを恋愛パートナーから得ることと、恋愛関係以外の情緒的サポート源の縮小との間には関連が認められていない。

このようなジェンダー差を踏まえて、本論文の結果を図示したものが *Figure 8-1, 8-2* である。男性(*Figure 8-1*)は、恋愛関係中、恋愛パートナーから多くの情緒的サポートを得ている(研究2)。恋愛関係が維持されている間、恋愛パートナーから多くの情緒的サポートを得ることができるため、恋愛関係以外の関係から情緒的サポートを得ようとしなくなり、恋愛関係崩壊後の情緒的サポート源が減少してしまう(研究5)。恋愛関係崩壊からの立ち直りには、多様な情緒的サポート源を有していることが有効に機能するが(研究4)、恋愛関係崩壊前に情緒的サポートを恋愛パートナーに依存することによって、男性は恋愛関係崩壊からの立ち直りが困難になってしまう(研究6)。

一方、女性(*Figure 8-2*)は、恋愛関係中、恋愛パートナーに加えて、同性友人からの情緒的サポートも受けており(研究2)、恋愛関係が維持されている間も恋愛関係以外の関係から情緒的サポートを受けている可能性が高い。恋愛関係崩壊前、多くの情緒的サポート源を維持することができれば、恋愛関係崩壊後も多くの情緒的サポート源が維持される(研究5)。先述したように、恋愛関係崩壊からの立ち直りには、多様な情緒的サポート源を有していることが有効に機能する(研究4)と考えられ、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート源が多様であれば、恋愛関係崩壊から立ち直ることができる(研究6)。

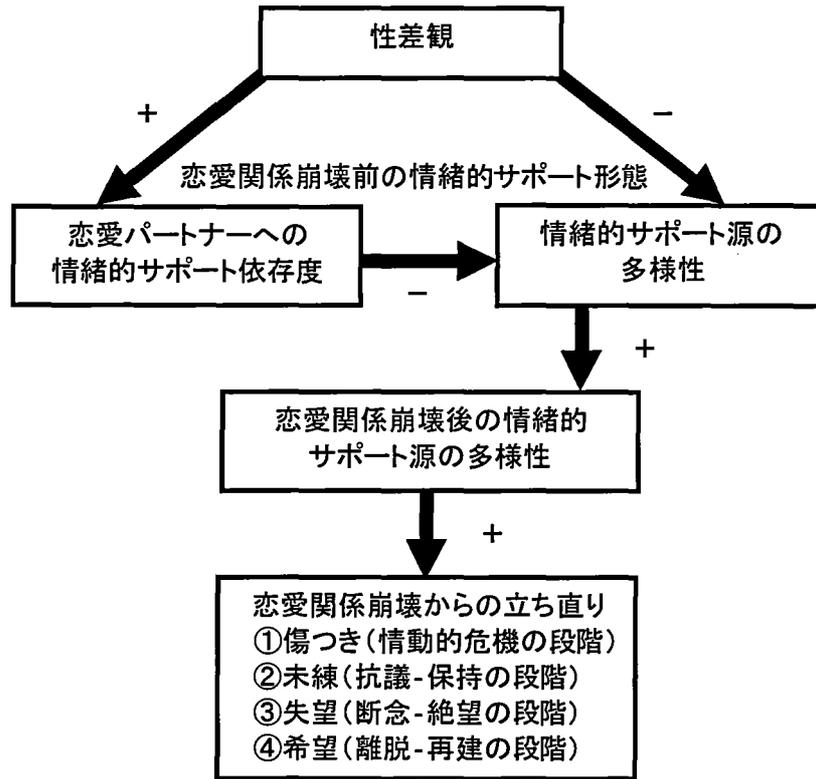


Figure8-1 男性において認められた恋愛関係崩壊からの立ち直り過程

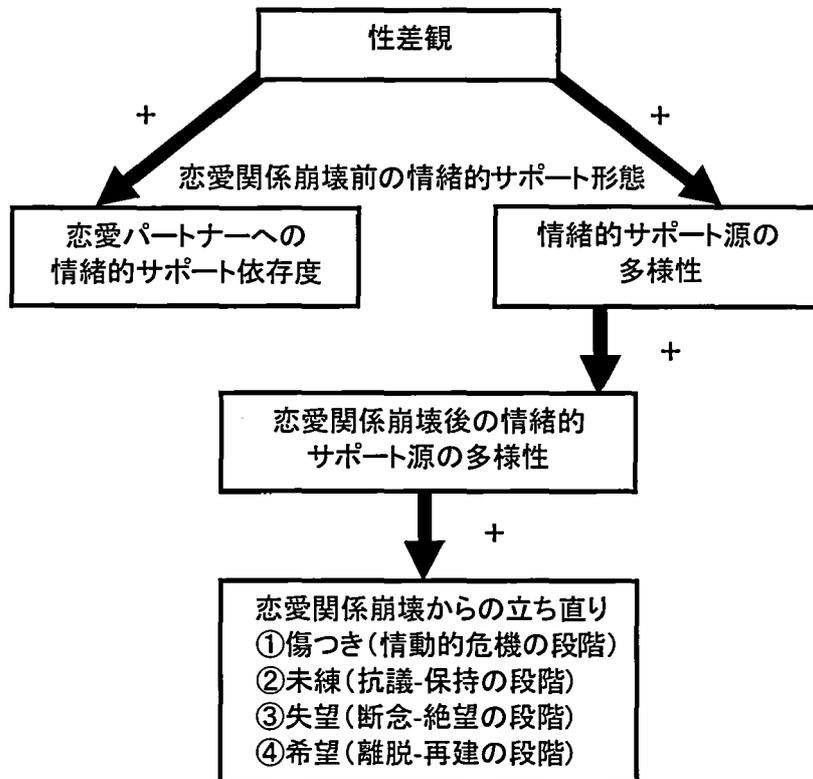


Figure8-2 女性において認められた恋愛関係崩壊からの立ち直り過程

しかし、これらの過程で認められたジェンダー差は、社会における性役割に多大な影響を受けていると考えられる。性役割の内在化の程度の指標である性差観が強いほど、男女ともに恋愛パートナーからの情緒的サポートに頼る傾向が強くなるが（研究2）、男性のみで、情緒的サポートの多くを恋愛パートナーから得ることで、その他の情緒的サポート源を失い、その結果、恋愛関係崩壊後の情緒的サポート源も少なくなるというプロセスが認められている（研究5）。男性は、他者に悩み事を打ち明けたり、傷ついているという感情を表出すると、男性役割から逸脱しているとみなされやすく、他者への気配りや支援を行なう役割を担う恋愛パートナーから情緒的サポートを得られるようになると、他の関係からの情緒的サポートを抑制する可能性が高い。しかし、性差観の強い男性は弱い男性に比べて、性役割に沿って情緒的サポートを異性に依存する傾向が強い（研究2）という結果をふまえると、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへの情緒的サポート依存度が恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源の多様性に影響を与えるプロセスには、性差観による個人差が認められる可能性が高い。

以上の結果より、恋愛関係崩壊というネガティブな出来事から立ち直り、ポジティブな変化を経験するためには多様な情緒的サポートが必要であること、恋愛関係崩壊からの立ち直りに関するジェンダー差は、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート形態から生じていること、これらの影響過程にはジェンダー・スキーマ（性差観）が影響を及ぼす可能性が高いことが明らかとなった。

2. 本論文を通して得られた新たな知見

本論文で得られた結果が、従来の恋愛関係崩壊研究に対して、どのように貢献しうるかという点について述べる。本論文で示された結果は以下の3つの点において、従来の研究に対して新たな貢献をなすと考えられる。

まず、恋愛関係崩壊研究の前提となるべき「恋愛関係崩壊からの立ち直りとは何か」という問題について可能な限り体系的に捉え、整理した点を挙げることができる。その結果、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程を評価する尺度の確定が可能となった。これまで恋愛関係崩壊に関する先行研究においては、一貫した恋愛関係崩壊からの立ち直りの定義が存在せず、それを反映するかのように、恋愛関係崩壊からの立ち直り尺度についても様々な尺度が用いられてきた。本論文では、恋愛関係崩壊研究を概観し、これまで恋愛関係崩壊からの立ち直りが、①抑うつやショック度、感情などの恋愛関係崩壊後の心理的反応、②恋

愛関係崩壊後、立ち直りを容易にする行動がとれるか否かを、立ち直りを予測するものとして測定する行動的反応、③恋愛関係崩壊からの立ち直りの評価や恋愛関係崩壊後の肯定的な変化に関する評価など立ち直りに関する主観的評価という3つの観点から捉えられてきたことを見出した。そして、このような先行研究のレビューより、恋愛関係崩壊からの立ち直りは③の観点から評価するのが適切であることを導いた。

また、より明確に恋愛関係崩壊からの立ち直り状態について定義するために、本論文においては愛情や依存の対象を、その死によって、あるいは生き別れによって失う体験である対象喪失からの立ち直りモデル(Bowlby, 1961)を援用した。恋愛関係崩壊という経験は、まさに愛情や依存の対象であったパートナーとの関係を失い、激しい苦悩に襲われる経験である。したがって、対象喪失からの立ち直り過程に関するモデルを恋愛関係崩壊経験に援用することは妥当であったと考える。このような対象喪失からの立ち直り過程に関するモデルを基に、恋愛関係崩壊からの立ち直りを「恋愛パートナーから心が離れ、恋愛関係崩壊を肯定的に捉えることができる状態」と定義し、恋愛関係崩壊からの立ち直りを測定するための尺度について確定した。この尺度については、3つの研究(研究3, 研究4, 研究6)において、ほぼ同様の構造が繰り返し認められた。また、信頼性についても、傷つき(情動的危機の段階; $\alpha > .85$), 未練(抗議-保持の段階; $\alpha > .86$), 失望(断念-絶望の段階; $\alpha > .80$), 希望(離脱-再建の段階; $\alpha > .79$)と、いずれも高いことが確認された。さらに、一般的心理的健康、恋愛関係崩壊の質、恋愛関係崩壊後の成長などとの関連も検討し、概念的妥当性についても確認した。その結果、本研究で確定された恋愛関係崩壊からの立ち直り段階を評価する尺度は信頼できることが示された。特に、恋愛関係崩壊研究に貢献しうる点として、恋愛関係崩壊からの立ち直りをプロセスとして捉えたため、一時的な適応状態と長期的な適応状態の両方を評価できる点が挙げられる。しかし、恋愛関係崩壊後の立ち直り段階尺度の段階性については確認できていないため、今後、更なる検討が必要であると考えられる。

次に、恋愛関係以外の対人関係も含めて恋愛関係を評価する取り組みによって、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態(恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへのソーシャル・サポート依存度や恋愛関係以外のソーシャル・サポート源の多さ)が恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を及ぼすことを明らかにした点を挙げる。従来の恋愛関係崩壊研究では、恋愛関係が崩壊する前の恋愛関係の質と恋愛関係崩壊後の立ち直りとの関連のみに焦点が当てられてきた。たとえば、恋愛関係崩壊からの立ち直りには交際期間や関係満足度など

が関連している(e.g., Simpson, 1987; Mearns, 1991)といった研究である。したがって、恋愛関係という関係の中だけで恋愛関係崩壊からの立ち直りの良好さが検討され、その他の要因についてはあまり検討されてこなかった。しかし、人は様々な関係を保ちながら生活しており、恋愛関係が維持されている間、これらの関係から全く影響を受けないと仮定するのは困難である。また、恋愛関係を喪失した場合でも、様々な対人関係に支えられながら、恋愛関係崩壊からの立ち直りを経験すると考える方が容易である。そこで、本論文では、恋愛関係以外の関係（友人関係・家族関係など）を含めた対人関係全体の中で恋愛関係を捉え、ソーシャル・ネットワークと恋愛関係崩壊後の立ち直りについて検討を行なった。たとえば、従来の恋愛関係崩壊研究では、恋愛パートナーの重要性として主観的な評価を測定する研究が多かったが、本論文ではソーシャル・ネットワークにおける実際のソーシャル・サポート受容を比較して、サポート資源としての恋愛パートナーの重要性を評価した。そして、女性と男性では情緒的サポート資源としての恋愛パートナーの重要性に差があることを示した。このような取り組みによって得られた本研究の知見は、恋愛関係及びその崩壊に関する研究領域に新たな視点をもたらすと考える。

最後に、多くの恋愛関係崩壊研究によって認められてきた立ち直りに関するジェンダー差を整理し、そのジェンダー差がなぜ生じるのかという問題について、1つの可能性を示すことができた点を挙げる。従来の恋愛関係崩壊研究においては、①女性は男性より恋愛関係崩壊によって傷つく程度が大きい(e.g., Monroe et al., 1999)、②女性は男性より恋愛関係崩壊からの立ち直りに結びつきやすい行動（別れの主導権や原因帰属において）をとることができる(e.g., Hill et al., 1976; Frazier & Cook, 1993)など様々なジェンダー差が認められてきた。しかし、このようなジェンダー差が生じる理由として、性役割の内在化(e.g., Moran & Eckenrode, 1991; Kenny et al., 1993)やコミットメントのジェンダー差(松井他, 1990; 和田, 1994)などの観点から理論的な提案はなされてきたものの、実証的な検討が充分にはなされてこなかった。本論文では、ソーシャル・サポート源の多様性に関するジェンダー差に着目し、①情緒的サポート源としての恋愛パートナーの重要性が女性より男性の方が高いというジェンダー差が存在すること、②男性において、恋愛関係崩壊前に多くの情緒的サポートを恋愛パートナーに依存すると、恋愛関係崩壊後の立ち直りが困難になるという過程が存在することを明らかにした。さらに、これらのジェンダー差が、社会における性役割という社会的要因に規定される可能性を示した。社会においては、「男性は強く、独立的で、女性は弱く、依存的である」という伝統的な性役割規範が存在し、

自らの性に沿った性役割規範に従うよう期待される。しかし、このような伝統的な性役割規範を内在化する程度には個人差が認められ、伝統的な性役割規範に対する反応は様々である。本論文では、性役割の内在化の指標の1つであるジェンダー・スキーマ（性差観）に着目し、その強度によって、誰を情緒的サポート源として選択するかが異なることを明らかにした。すなわち、性別に関わらず、性差観は恋愛パートナーからのソーシャル・サポートに頼る傾向を強める機能を持つが、男性においては、性差観の強い者は弱い者に比べて、性役割に沿って情緒的サポートを異性に依存する傾向が強いことを明らかにした。このことは、社会における性役割がソーシャル・サポート形態を規定するだけでなく、恋愛関係崩壊後の立ち直りについても影響することを示唆している。本論文で得られたソーシャル・サポート源の多様性に関するジェンダー差は、社会の性役割規範に由来するものであることが支持されたといえよう。

3. 本論文で示された結果の学術的意義と実践的意義

本論文は、恋愛関係崩壊というネガティブな出来事から立ち直り、ポジティブな変化を経験するためには何が必要なのかという問題について明らかにすることを目指した。これまで、対象喪失からの立ち直りモデルについては Bowlby (1961) によって提唱されていたが、このモデルは臨床的な事例より導かれたモデルであり、理論的示唆に留まるものであった。しかし、本論文では対象喪失の1つとして、恋愛関係崩壊後の立ち直りに着目し、これまでほとんど検討されてこなかった対象喪失からの立ち直り過程について実証的に検討できた点で意義があると考えられる。また、6つの研究を通して、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源の多様性が恋愛関係崩壊後の個人の適応に重要な役割を果たすという興味深い結果を明らかにした。さらに、恋愛関係崩壊後の立ち直りに影響を及ぼす恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態にはジェンダー差が存在することを明らかにし、その背景には性役割の内在化という社会的要因が存在することについても明らかにした。このような知見は、対象喪失や恋愛関係崩壊に関する先行研究で全く明らかにこなかった点で、関連領域に新たな貢献をなすものであると考えられる。そこで、本研究で示されたこれらの結果の学術的意義と実践的意義について詳細に述べる。

まず、本論文では、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源の多様性に着目し、恋愛関係崩壊後の立ち直りに及ぼす影響過程について詳細に検討を行ない、①恋愛関係崩壊後に多様なソーシャル・サポート源からソーシャル・サポートを受容することにより、恋愛

関係崩壊後の立ち直りが促進されること、②恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源が多様であるほど恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源も多様であること、の2点を明らかにした。

ソーシャル・サポートが心身の健康にポジティブな影響を及ぼす理由として、ある出来事がどの程度有害であるかという評価に影響を及ぼすこと、またストレスフルな出来事を解決するための適応的な対処行動を促進したり、ストレスの原因となった出来事について再評価を促したりすることの2つの緩衝効果が示唆されている(Cohen & Wills, 1985)。恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート源が多様であることによって、十分な量のソーシャル・サポートを受容できるため、恋愛関係崩壊というネガティブな出来事に対して、対処可能と評価することが容易になると考えられる。また、自ら適切であると予測した立ち直りのための対処行動が失敗しても、異なる背景を持つソーシャル・サポート源から状況に適した対処行動を学ぶことができ、恋愛関係崩壊後に生じる様々な困難に対処することが可能であろう。

しかし、本論文で得られた②の知見から考えると、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源が多様性に乏しかった人が、恋愛関係崩壊後、急に多様なソーシャル・サポート源を得ることは極めて困難であることが推測される。また、対象喪失の1つである死別に関する研究において、ネットワーク全体におけるソーシャル・サポートの利用可能性は社会的孤独感（対人関係の少なさに由来する孤独感）に対しては有効であるが、情緒的孤独感（親密な人との相互作用の少なさに由来する孤独感）に対しては効果を持たないことが示されている(Stroebe, Stroebe, Abakoumkin, & Schut, 1996)。大学生を対象として行なわれた研究においても、ネットワーク全体におけるソーシャル・サポートの利用可能性は社会的孤独感と、友人、恋人などの特定関係におけるサポートは情緒的孤独感と関連があることも示唆されている(Davis, Morris, & Kraus, 1998)。このような知見をふまえるならば、恋愛関係崩壊後、恋愛パートナーを失った苦しさや寂しさを低減させるために、恋愛関係崩壊前から維持されていた、ある程度親密な関係（家族や友人など）からのソーシャル・サポートが有効に機能する可能性が高い。本研究において、恋愛関係崩壊後の立ち直りを検討するうえで、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポートの多様性が非常に重要な要因であることを明らかにできた点は、学術的に意義があると考えられる。

さらに、これらの知見は、排他的な関係に陥りがちな恋愛関係のあり方に対して、周囲がどのように働きかけるべきかを示唆してくれる点で、実践的な意義もあると考えられる。

これまで、恋愛関係を開始すると、恋愛パートナーたちの間には内閉的世界と共存感情が生じることが示唆されており（詫摩, 1973）、2人だけの秘密を持ったり、他の人には分からない会話を楽しむなどの行動をとりがちであることが示唆されている。しかし、本研究の知見を踏まえるならば、恋愛関係中のカップルに対して、恋愛パートナー以外の多様な人々との関係を維持するよう働きかけることが、彼/彼女らの適応的な生活にとって重要だと言えるであろう。恋愛関係中から多様な人々とのつながりを保つことは、恋愛関係が崩壊した場合の立ち直りを促進する効果だけではなく、恋愛関係中の適応を促進する可能性もあることが指摘されている。たとえば、青年の恋愛関係は恋愛関係に関わる問題に対処することを学ぶ前に始まるため、交際中に生じる問題に対する他者からのサポートが非常に重要になる(Weisz et al., 2007)という指摘がある。つまり、恋愛パートナーとは異なる関係の者からソーシャル・サポートを受容できることによって、恋愛パートナーとの間に深刻な問題が生じた場合でも、心理的健康を良好に保つことができる可能性が高い。また、恋愛パートナーとの間に起こる些細な問題について、日常的に他者に相談できる環境にあることで、些細な問題が深刻化するのを防ぐことができるため、恋愛関係がより長く維持される可能性もある。恋愛関係中から多様なソーシャル・サポート源をもつことは、恋愛関係中も、そして恋愛関係が崩壊した場合も、心理的健康に肯定的に作用すると考えられるのである。

次に、恋愛関係崩壊後の立ち直りに影響を与える恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態のジェンダー差について得られた知見について考察する。

本論文においては、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態の多様性が恋愛関係崩壊後の立ち直りのために重要であることを明らかにした。しかし、恋愛関係崩壊前の恋愛パートナーへの情緒的サポートの依存度は、女性より男性の方が高いことが示唆された。また、男性においては、恋愛パートナーへの情緒的サポートの依存が恋愛関係以外のソーシャル・サポート源の少なさにつながるが、女性においては、恋愛パートナーへの情緒的サポートの依存度とソーシャル・サポート源の数に関連がないことも示された。このように、情緒的サポート源としての恋愛パートナーの重要性とその他の情緒的サポート源の多さとの関係を実証的に検討し、そのジェンダー差を明らかにできた点は、本研究の学術的な意義の一つであり、ソーシャル・サポート研究及びジェンダー研究の領域に新たな知見を加えるものであると考えられる。さらに、本研究では、性役割の内化の一つの指標である性差観の強さが、このようなソーシャル・サポート受容のジェンダー差を強調する働きを

する可能性をも示した。ソーシャル・サポート受容のジェンダー差の背景に性役割が存在している可能性については以前から指摘されていたが（たとえば橋本，2005a），性役割の内在化の指標がソーシャル・サポート受容のジェンダー差を調整することを実証した研究は極めて少ない。本研究で得られた性差観に関する知見は，ソーシャル・サポート受容に見られるジェンダー差の一端が，性役割という社会的要因に由来するものであることを明らかにした点でも意義があると言えよう。特に，本論文における研究では大学生を対象としており，社会人を対象とした場合に比べて，仕事や子供の有無，経済的事情，時間的制約など，性役割の内在化以外の社会的要因の影響を受けにくいと考えられ，性役割の内在化がソーシャル・サポート受容に及ぼす純粋な影響を検討することができたと考える。

性役割とソーシャル・サポートとの関連については，気遣いや情緒的表出性を強調する女性役割がソーシャル・サポート授受を促進するのに対し，達成や自律性，情緒的統制を強調する男性役割はソーシャル・サポート授受を困難にするという。多くの場合，自律性や情緒的統制を強調する男性役割が求められる男性は，依頼心の強さが許容されやすい女性と比較して，他者からソーシャル・サポートを受容する機会を失いやすい。たとえば，和田（1996）によると，男性は他者に対して自己の悩み，弱さなどの感情を開示することよりも，達成すること，強いことを期待されて育つため，男性が女性より自己開示することに抵抗感を感じやすいという。また，遠藤（1994）は，友人に悩みを自己開示しても解決されないという抵抗感が，女性より男性のほうが強いことを示唆している。このように，男性役割に影響を受けやすい男性は，多くのソーシャル・サポート源を持つことを期待しない。代わりに，ソーシャル・サポートの交換が望ましく，気遣いや援助をその役割とする恋愛パートナーである女性から，ソーシャル・サポートを受容しようとするのであろう。

このような親密なパートナーへの情緒的サポート依存に関する頑健な結果は，性役割規範の変化しにくさを反映していると考えられる。湯川（2002）は，女性的性格，男性的性格を表すとされた形容詞に関する1970年代から1990年代の20年間の変化について検討を行なっているが，性別や年代を越えて，ほとんど変化がないことを示唆している。また，社会から期待される性役割は，男性か女性かという生物学的な要因に基づいて，ごく幼少の頃から徐々に内在化される。そのため，男性はソーシャル・サポート・ネットワークを形成するための対人スキルを学ぶ機会が少ないまま成長してしまう可能性もある。実際，年齢が高いほど伝統的な性役割態度を示すことが示唆されており（Morgan & Walker,

1983; 鈴木, 1994), 年齢に伴って, 性役割規範からの逸脱は困難になると考えられる。

ただし, 性役割が社会的要因である以上, その内在化には個人差が存在する。本論文では, 性役割の内在化の1つの指標である性差観に着目し, 性差観の強い男性は弱い男性に比べて, 性役割に沿って情緒的サポートを異性に依存する傾向が強いという示唆を得た。このような示唆をふまえるならば, 男性が性役割にこだわりを持つことが, ソーシャル・サポート源の減少につながり, 個人の適応を阻害する可能性がある。男性にとって, 性役割へのこだわりの強さは, 恋愛パートナー以外の関係へのサポート希求の機会を減らすだけでなく, 恋愛パートナー以外の関係から提供されたサポートの知覚も困難にするだろう。もちろん, 女性役割に影響を受けやすい女性もその役割にこだわりすぎると, 他者からのサポートに依存しすぎて, 自ら解決する努力を怠ってしまう危険性はあるが, 一般的に多様なソーシャル・サポート源は個人の適応を促進するために役立つと考えられる。たとえば, 社会から期待される性役割が変化しにくいものであったとしても, 自らの性役割に対する意識を振り返り, コントロールすることがある程度可能であると考ええる。特に, 恋愛関係にある男性は心理的健康を維持するために, 自らの性役割にとらわれず, 恋愛関係崩壊前から多様なソーシャル・サポート源の維持を意識する必要があるだろう。

最後に, 本論文を通して得られた知見が, 離婚という婚姻関係の崩壊に適用できる可能性について述べておきたい。本論文では, 恋愛関係という社会的制約の少ない関係の崩壊に着目したが, 婚姻関係の解消についても同様のプロセスが認められる可能性がある。離婚後の適応状態についてのジェンダー差は一貫しておらず, 男性より女性の方が適応的である(Zeiss, Zeiss, & Johnson, 1980; Keith, 1986), 女性より男性の方が適応的である(Kurdek, 1991), ジェンダー差は認められない(Colburn, Jr., Lin, & Moore, 1992)など様々な結果が示されている。しかし, 10年間の縦断的調査によって, 離婚を経験した女性に比べて離婚を経験した男性は, 未婚の男性や死別した男性より家族や友人から孤立しやすく, 離婚によってダメージを受けやすいことが示唆されている(Keith, 1986)。また, 離婚を経験した男性よりも離婚を経験した女性は, ソーシャル・ネットワークの中で離婚する前の友人が占める割合が大きく, 対人的な問題について話す頻度が高いことも示唆されている(Gastel, 1988)。第1章でも述べたが, 女性より男性のほうが配偶者からのソーシャル・サポートに頼りやすい(e.g., Antonucci & Akiyama, 1987)というソーシャル・サポートに関するジェンダー差が認められることをふまえると, 本研究で得られた結果と同様の過程が存在する可能性が高い。しかし, 離婚後の適応を考える際, 経済的な安定, 子どもの有無

など恋愛関係とは異なる要因が影響を及ぼし、同じサポート源であってもその機能や機能の有効性に違いが生じることも考えられる。たとえば、離婚後のソーシャル・サポートに関する研究においても、離婚を経験した女性にとって、親族との関係は経済的な援助や労働力の提供など実質的な援助を得るために重要となり、親族との関係を維持することで抑うつ傾向が低下する。しかし、離婚を経験した男性にとって親族との関係は、情緒的援助や社会的援助を得るために重要であるが、その関係が維持されることは少なく、むしろ親族との関係の維持は抑うつ傾向を高めるという示唆が得られている。今後はこれらの問題も含めて、婚姻関係中のソーシャル・サポート形態が離婚後の適応に及ぼす影響について検討する必要がある

4. 今後の課題

最後に、今後の研究に対する具体的な課題と展望について述べる。

まず、本論文において検討を行なったソーシャル・サポートの種類に関する問題点について述べる。これまで対象喪失からの立ち直りには、自分の気持ちに共感してくれること、励ましてくれること、自分の話に耳を傾けてくれることなどが重要であることが示唆されている(小此木, 1997; Harvey, 2000)。そのため、恋愛関係崩壊後、個人の心理的な不快感を軽減したり、自尊心の維持・回復を促すような機能を提供する情緒的サポートが有効に機能すると推測された。また、女性は多様な関係からソーシャル・サポートを受けるが、男性は配偶者からのソーシャル・サポートに頼るという傾向は、特に情緒的サポートで顕著である(Antonucci & Akiyama, 1987)ことも示唆されている。したがって、本論文において、恋愛関係崩壊前の情緒的サポート形態のみが恋愛関係崩壊後の立ち直りに影響を及ぼすという影響過程が認められたことは妥当な結果であると考えられる。しかし、ソーシャル・サポート源の多様性の効果は、情緒的サポートだけでなく、むしろ問題解決のためのアドバイスや知識の提供などの情動的サポートや、個人が直面している問題そのものを直接的・間接的に解決する道具的サポートにおいて、有効性を発揮するように思われる。それではなぜ今回、これらのソーシャル・サポートでソーシャル・サポートの多様性の効果が認められなかったのであろうか。友人、恋人などの特定関係におけるサポートは情動的孤独感を緩和する(Davis et al., 1998)という知見を考慮すると、恋愛関係崩壊後、家族や友人などの情緒的サポートによって恋愛パートナーを失った苦悩が軽減された後でなければ、情動的サポートや道具的サポートは有効に機能しない可能性がある。つまり、情動的サポ

ートや道具的サポートのみでは、恋愛関係崩壊からの立ち直りを促進する機能を持たないと考えられる。今後、恋愛関係崩壊からの立ち直りとソーシャル・サポートの種類との関連については、さらに検討される必要があるだろう。

次に、本論文では、恋愛関係崩壊前から多様な情緒的サポート源を持つことが、恋愛関係崩壊後の立ち直り状態を良好にする可能性を示した。通常、恋愛関係崩壊後は悲しみや苦悩といった非常にネガティブな情動が経験されるので、そのような状況において新しい対人関係を獲得することは困難であると考えられる。そのため、恋愛関係崩壊前から多様な情緒的サポート源を維持しておくことは重要である。しかし、仮に恋愛関係崩壊前に情緒的サポート源が限定されていた者であっても、恋愛関係崩壊後、情緒的サポートを得るために新たなネットワークを獲得しようと動機づけられ、多様な情緒的サポート源を持つ可能性がある。もしくは、あまり親しくないと感じていた友人が重要な情緒的サポート源として再認識され、恋愛関係崩壊からの立ち直りのための情緒的サポート提供者として有効に機能する可能性もある。したがって、今後は恋愛関係崩壊前後のネットワークの変化に着目し、恋愛関係崩壊後に多様な情緒的サポート源を獲得することは可能なのか、恋愛関係崩壊後に獲得した情緒的サポート源は立ち直りにとって有効なのか、もし有効だとすれば、恋愛関係崩壊後の新たな情緒的サポート源の獲得にはどのような要因が影響を及ぼすのかという問題について検討する必要がある。

最後に、方法論に関する限界について述べる。本論文では恋愛関係崩壊からの立ち直りについて回顧法を用いて検討を行った。これまで恋愛関係崩壊に関する23編の論文のうち、縦断的手法で立ち直りを検討した論文は9編であり、回顧法を用いた検討の方が相対的に多い。特に、傷つきといった一時的な心理的状态の検討だけでなく、恋愛関係崩壊から一定期間を経た後の「恋愛関係崩壊からの立ち直り」という現象を捉えるためには、回顧法を用いることが有効であると考えられる。しかし、記憶の影響を受けやすいという欠点があることも否めない。特に、恋愛関係崩壊前のネットワークについて検討を行なった研究5、研究6において、恋愛関係崩壊前のネットワークを想起できなかった回答者が13%-15%ほど存在した。本研究では、恋愛関係崩壊からの経過期間を統制するという分析手法によって、できる限りこの影響を減じる工夫をしたが、今後、縦断的な調査、もしくはごく短期間に恋愛関係崩壊を経験した者を対象に、ソーシャル・ネットワークが恋愛関係崩壊からの立ち直りに果たす役割について検討していく必要もあるだろう。

5. 本章の要約

恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について総括した。従来、検討されてきた恋愛関係の質が恋愛関係崩壊後の立ち直りに影響するという恋愛関係内の影響過程を超えて、本論文では恋愛関係崩壊前の恋愛関係以外のソーシャル・サポート源の多さが、恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を及ぼすということを明らかにした。また、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態のジェンダー差の背景には、性役割規範の内在化という社会的要因が存在することについても有効な示唆を得た。本論文で示されたこのような知見は、恋愛関係崩壊研究に貢献するだけでなく、ソーシャル・サポート研究やジェンダー研究の領域にも新たな知見を加えるものであることについて論じた。また、恋愛パートナーへのソーシャル・サポート依存のジェンダー差の背景に性役割が存在し、性役割に対するこだわりが個人の適応を阻害する可能性について述べた。さらに、本論文で得られた知見が、婚姻関係の解消である離婚という現象にも応用可能であることを示唆した。最後に、今後の課題及び展望について考察した。

本論文の要約

本論文では、大学生を対象に、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態の多様性が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について検討した。

従来、恋愛関係において生じる問題は若年者にとってありふれた出来事でありながら、強いショックを与え、ネガティブな心理的反応を誘発する可能性が高いこと（飛田, 1997）が指摘されており、恋愛関係崩壊からの立ち直りに着目した研究が進められてきた。しかし、先行研究によって恋愛関係崩壊に関する定義は様々であり、多種多様な測定方法で恋愛関係崩壊からの立ち直りを捉える試みがなされてきた。そこで、本論文では、恋愛関係崩壊研究を概観し、①これまでの恋愛関係崩壊研究において曖昧にされてきた「恋愛関係崩壊からの立ち直り」の定義について明らかにすること、②Bowlby(1961)の対象喪失からの立ち直りモデルを理論的背景とした恋愛関係崩壊からの立ち直り尺度を確定することを第1の目的とした。恋愛関係崩壊に関する先行研究を概観し、対象喪失研究からの理論的示唆についても考慮した結果、恋愛関係崩壊からの立ち直りを「恋愛パートナーから心が離れ、恋愛関係崩壊を肯定的に捉えることができること」と定義することが妥当であると考え、その妥当性について検討を行った。

また、第2の目的として、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が、恋愛関係崩壊後の立ち直りに及ぼす影響について明らかにすることを挙げた。先行研究において、恋愛関係崩壊からの立ち直りは恋愛関係崩壊前の関係の質によって規定されることが示唆されてきた（e.g., Simpson, 1987）。しかし、人は様々な関係を保ちながら生活しており、恋愛関係が維持されている間、これらの関係から全く影響を受けないと仮定するのは困難である。また、恋愛関係を喪失した場合でも、様々な対人関係に影響を受けながら、恋愛関係崩壊からの立ち直りを経験する可能性が高いと推測される。先行研究を概観すると、恋愛関係崩壊からの立ち直りには様々なジェンダー差が認められており、女性の方が男性より恋愛関係崩壊からの立ち直り評価が高い可能性が見出された。この原因として、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態に、女性より男性の方が恋愛パートナーに多くのソーシャル・サポートを依存しやすいといったジェンダー差が存在すると予測した。このような予測に基づいて、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について実証的な検討を行なった。各章の詳細については、以下に示す。

第1章 恋愛関係崩壊に関する先行研究と本論文の目的

恋愛関係崩壊に関する先行研究を概観し、対象喪失研究からの理論的示唆についても考慮したうえで、恋愛関係崩壊からの立ち直りを「恋愛パートナーから心が離れ、恋愛関係崩壊を肯定的に捉えることができること」と定義した。また、恋愛関係崩壊後の立ち直りを促進する要因としてソーシャル・サポートに着目する理由について述べ、特に、ソーシャル・サポート源の多様性が重要である可能性について示唆した。最後に、恋愛関係崩壊に関する先行研究をジェンダー差という観点から概観すると、女性より男性の立ち直りが困難であるというジェンダー差が認められることを示した。そして、これらのジェンダー差の背景に恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態のジェンダー差が存在する可能性を示唆した。これらの論拠に基づいて、本研究の枠組みを示した。

第2章 対人関係における情緒的サポート源としての恋人の重要性に関する検討

恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態に、女性より男性の方が恋愛パートナーに多くのソーシャル・サポートを依存しやすいといったジェンダー差が存在するかという問題について検討を行なった。まず、研究1では対人関係ネットワークからのサポート授受という観点から、対人関係における「恋人」の重要性にジェンダー差が認められるか検討された。現在、恋愛関係にある大学生を対象に検討したところ、男性は他の関係より恋愛パートナーから提供される情緒的サポート量が最も高いのに対し、女性は恋愛パートナーと同性友人の情緒的サポート量が同程度に高いことが示された。この結果は、女性は多様な関係からサポートを受けるが、男性は配偶者からのサポートに頼るという先行研究 (Antonucci & Akiyama, 1987; 野辺, 1999) と一貫した結果であり、婚姻関係ほどには社会的制約のない恋愛関係においても同様のジェンダー差が見られることが明らかになった。次に、研究2では、このような結果は生得的な性差ではなく、その背景に性役割の内化の程度が影響する可能性について述べ、個人が持つ性差観とソーシャル・サポートの受容との関連が検討された。その結果、性別に関わらず、性差観の強い者は他の関係より恋愛パートナーから多くの情緒的サポートを受けていたが、ソーシャル・サポート源の多さにはジェンダー差が認められる可能性が示唆された。具体的には、性差観が「男性は強く、自立的であり、女性は弱く、依存的である」という意識を活性化させ、男性にとっての性差観はソーシャル・サポート源を減少する機能、女性にとっての性差観はソーシャル・サポート源を拡大させる機能を持つことが示唆された。

第3章 恋愛関係崩壊からの立ち直り段階尺度の確定とその妥当性の検討

恋愛関係崩壊からの立ち直りに関する検討で用いる、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程尺度の確定を行なった（研究3）。Bowlby(1961)の提唱した対象喪失からの立ち直り過程を恋愛関係崩壊からの立ち直り過程に援用し、「離脱-再建の段階」を立ち直り状態として捉えることの内容的妥当性について検討された。その結果、恋愛関係崩壊からの立ち直り過程尺度については高い信頼性が得られた。内容的妥当性については、離脱-再建の段階にあたる希望と心理的健康の指標（GHQ 及び孤独感）との間には負の相関が存在した。また、恋愛関係崩壊後の成長のうち肯定的な側面（視野の拡大、自己向上、関係の重視）との間には正の相関が存在した。これらの結果より、離脱-再建の段階は、心理的健康度の回復や恋愛関係崩壊に伴う肯定的な変化と関連があることが示唆された。したがって、離脱-再建の段階を立ち直りの状態として定義することは妥当であることが確認された。

第4章

恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響

恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート源の多様性が、恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態に影響を与え、恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を及ぼす過程について検討した。その結果、研究4においては恋愛関係崩壊後の情緒的サポート源の多様性が、恋愛関係崩壊からの立ち直りにポジティブな影響を及ぼすことが示唆された。また、研究5においては、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後のソーシャル・サポート形態に及ぼす影響過程にはジェンダー差が認められることが明らかとなり、恋人への情緒的サポート依存度が恋愛関係崩壊後の情緒的サポートの多様性に影響するのは男性だけであることが示唆された。研究6では、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊後の立ち直りに及ぼす影響について検討した。その結果、男性は恋人への情緒的サポート依存度、女性は恋愛関係崩壊前の情緒的サポートの人数が、恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を及ぼすことが示唆された。このようなソーシャル・サポート形態の違いが、先行研究で認められてきた恋愛関係崩壊からの立ち直りのジェンダー差の1つの原因である可能性について述べた。

第5章 総括と今後の課題

恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態が恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼす影響について総括した。従来、検討されてきた恋愛関係の質が恋愛関係崩壊後の立ち直りに影響するという恋愛関係内の影響過程を超えて、本論文では恋愛関係崩壊前の恋愛関係以外のソーシャル・サポート源の多さが、恋愛関係崩壊からの立ち直りに影響を及ぼすということを明らかにした。また、恋愛関係崩壊前のソーシャル・サポート形態のジェンダー差の背景には、性役割規範の内在化という社会的要因が存在することについても有効な示唆を得た。本論文で示されたこのような知見は、恋愛関係崩壊研究に貢献するだけでなく、ソーシャル・サポート研究やジェンダー研究の領域にも新たな知見を加えるものであることについて論じた。また、恋愛パートナーへのソーシャル・サポート依存のジェンダー差の背景に性役割が存在し、性役割に対するこだわりが個人の適応を阻害する可能性について述べた。さらに、本論文で得られた知見が、婚姻関係の解消である離婚という現象にも応用可能であることを示唆した。最後に、今後の課題及び展望について考察した。

引用文献

- Agnew, C.R., Loving, T.J., & Drigotas, S.M. 2001 Substituting the forest for the trees: social network and the prediction of romantic relationship state and fate. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 1042-1057.
- 赤澤淳子 1998 恋愛後期における性別役割行動の研究 今治明德短期大学研究紀要, 22, 47-63.
- Antonucci, T.C., & Akiyama, H. 1987 An examination of sex differences in social support among older men and women, *Sex Roles*, 17, 737-749.
- Aron, A., Aron, E.N., & Smollan, D. 1992 Inclusion of Other in the Self Scale and the Structure of Interpersonal Closeness. *Interpersonal Relation and Group Processes*, 63, 596-612.
- 東清和・鈴木淳子 1991 性役割態度研究の展望 心理学研究, 62, 270-276.
- Baumeister, R.F., & Sommer, K.L. 1997 What do men want? Gender differences and two spheres of belongingness: Comment on Cross and Madson (1997). *Psychological Bulletin*, 122, 38-44.
- Bem, S. L. 1981 Gender schema theory: A cognitive account of sex typing source. *Psychological Review*, 88, 354.
- Berkman, L.F. & Syme, S.L. 1979 Social networks, host resistance and mortality: A nine-year follow-up study of Alameda County residents. *American Journal of Epidemiology*, 109, 186-204.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A.M. 1989 The Relationship Closeness Inventory: Assessing the closeness of Interpersonal Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- Blazer, D.G. 1982 Social support and mortality in an elderly community population. *American Journal of Epidemiology*, 115, 684-694.
- Bowlby, J. 1961 Processes of Mourning. *The International Journal of Psycho-Analysis*, 42, 317-340.
- Buehler, C. 1987 Initiator Status and the divorce transition. *Family-Relations; Journal of Applied Family and Child Studies*, 36, 82-86.

- Buunk, B., & Hupka, R. B. 1987 Cross-cultural differences in the elicitation of sexual jealousy. *Journal of Sex Research*, 23, 12-22.
- Burda, P.C., Jr., Vaux, A., & Schill, T. 1984 Social support resources: Variation across sex and sex role. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 10, 119-126.
- Buss, A. H. 1986 A theory of shyness. W. H. Jones, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment*. New York: Plenum Press Pp.39-46.
- Butler, T., Giordano, S., & Neren, S. 1985 Gender and sex-role attributions as predictors of utilization and natural support systems during personal stress events. *Sex Roles*, 13, 515-524.
- Caldwell, M.A. & Peplau, L.A. 1982 Sex Differences in same-sex friendship. *Sex Roles*, 8, 721-732.
- Campbell, K.E., Marsden, P.V., & Hurlbert, J.S. 1986 Social resources and socioeconomic status. *Social Networks*, 8, 97-117.
- Choo, P., Levine, T., & Hatfield, E. 1996 Gender, love schemas, and reactions to romantic break-ups. *Journal of Social Behavior and Personality*, 11, 143-160.
- Cobb, S. 1976 Social support as moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314.
- Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- Colburn, K., Jr., Lin, PL, & Moore, MC 1992 Gender and divorce experience. *Journal of Divorce and Remarriage*, 17, 87-108.
- Cross, S., & Madson, L. 1997 Models of the self: Self-construals and gender. *Psychological Bulletin*, 122, 5-37.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現—コミュニケーションに見る発展と崩壊— 心理学評論, 33, 322-352.
- Davis, D., Shaver, P.R., & Vernon, M.L. 2003 Physical, emotional, and behavioral reactions to breaking up: The roles of gender, age, emotional involvement, and attachment style. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 871-884.

- Davis, M.H., Morris, M.M & Kraus, L.A. 1998 Relationship-specific and global perceptions of social support: Associations with well-being and attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 468-481.
- 土肥伊都子 1995 性役割志向性・実行度および愛情・好意度に及ぼす性別とジェンダー・パーソナリティの影響 関西学院大学社会学部紀要, 73, 97-107.
- 土肥伊都子 1996 ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教育心理学研究, 44, 187-194.
- 遠藤公久 1994 自己開示における抵抗感の構造に関する検討 筑波大学心理学研究, 16, 191-197.
- Erikson, H. 1950 *Childhood and Society*. Norton (仁科弥生(訳)(1977). 幼児期と社会みすず書房 Pp.336-337.)
- Frazier, P.A. & Cook, S.W. 1993 Correlates of Distress Following Heterosexual Relationship Dissolution. *Journal of Social and Personal Relationships*, 10, 55-67.
- 藤原武弘 1997 社会心理学用語辞典 小川一夫(編) 北大路書房 Pp.352.
- 福岡欣治 1999 友人関係におけるソーシャル・サポートの入手-提供の互惠性と感情状態-知覚されたサポートと実際のサポート授受の観点から- 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 13, 57-70.
- 福岡欣治 2000 大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向-達成動機を媒介要因とした検討- 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 14, 1-10.
- 福岡欣治 2001 労働者の生活ストレスにおける対人的調整要因の社会心理学的研究-職場内外のソーシャル・サポート・ネットワークと心理的適応- 静岡県立大学短期大学部浜松校 特別研究報告書(平成11・12年度), 1-11.
- 福岡欣治・橋本治 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68, 403-409.
- 福岡欣治・橋本治 1997 ソーシャル・サポート・ネットワークの「広さ」と「深さ」からの指標化の試み-大学生と中年成人を対象として- 同志社心理, 44, 6-23.
- Gastel, N. 1988 Divorce and kin ties: The importance of gender. *Journal of Marriage and the Family*, 50, 209-219.

- Griffith, J. 1985 Social support providers: Who are they? Where are they met? And the relation. of network characteristics to psychological distress. *Basic and Applied Social Psychology*, 6, 41-60.
- Haberman, J. 1974 *The analysis of frequency data*. Chicago University Press.
- Harvey, J. 2000 *Give Sorrow Words: Perspectives on Loss and Trauma*. Philadelphia: Brunner/Mazel Pp.269-273.
- (ハーヴェイ, J. 安藤清志 (訳) (2002) . 悲しみに言葉をー喪失とトラウマの心理学ー 誠信書房)
- 橋本 剛 2005a 対人関係に支えられる 和田 実(編) 男と女の対人心理学 北大路書房 Pp.137-158.
- 橋本 剛 2005b ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版 Pp.1-27.
- Hays, R.B. 1984 The development and maintenance of friendship. *Journal of Social and Personal Relationships*, 1, 75-98.
- Hays, R.B., Oxley, D. 1986 Social Network Development and Functioning During a Life Transition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 305-313.
- Hazan, C. & Shaver, P.R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Helgeson, V.S. 1994 Prototypes and dimensions of Masculinity and Femininity. *Sex Roles*, 31, 653 - 682.
- Hendrick, C. & Hendrick, S.S. 1986 A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 392-402.
- 飛田 操 1989 親密な対人関係の崩壊過程に関する研究 福島大学教育学部紀要, 46, 47-55.
- 飛田 操 1997 失恋の心理 松井 豊(編) 悲嘆の心理 サイエンス社 Pp.205-218.
- Hill, C.T., Rubin, Z., & Peplau, L.A. 1976 Breakups Before Marriage: The End of 103 Affairs. *Journal of Social Issues*, 32, 147-168.
- Hirsh, B.J. 1979 Psychological dimensions of social network: A multimethod analysis. *American Journal of Community psychology*, 7, 63-277.
- Hirsh, B.J. 1980 natural support system and coping with major life change. *American Journal of Community psychology*, 8, 159-172.

- 久田満・箕口雅博・千田茂博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1)
日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- Hodgins, H. S., Liebeskind, E. & Schwartz, W. 1996 Getting out of hot water: Facework
in social predicaments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 300-314.
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34,
116-128.
- House, J. S., Landis, K. R., & Umberson, D. 1988 Social relationships and health.
Science, 241, 540-545.
- 伊藤裕子 1997 高校生における性差観の形成環境と性役割選択: 性差観スケール (SGC)
作成の試み 教育心理学研究, 45, 366-404.
- 伊藤裕子 1998 高校生のジェンダーをめぐる意識 教育心理学研究, 46, 247-254.
- 石本奈都美・今川民雄 2001 青年期における失恋後の立ち直り過程 対人社会心理学研
究, 1, 119-132.
- 石本奈都美・今川民雄 2003 青年期における恋愛関係崩壊による心理的变化について
対人社会心理学研究, 3, 39-45.
- Josephs, R. A., Larrick, R., Steele, C. M., & Nisbett, R. M. 1992 Self-esteem and risk
aversion in decision-making. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62,
26-37.
- 金政祐司 2005 第四章恋する・愛する 和田実 (編) 男と女の対人心理学 北大路書
房 pp.64-91.
- 加藤 司 2005 失恋ストレスコーピングと精神的健康との関連性の検証 社会心理学
研究, 20, 171-180.
- 柏木恵子 1972 青年における性役割の認知 II 教育心理学研究, 22, 1-11.
- 勝谷紀子・若尾良徳・天野陽一 2003 恋人がいる人はすてきな人? -日本の若者にみら
れる恋愛普及幻想と恋愛ポジティブ幻想 (3) - 日本心理学会第67回大会発表論文
集, 101.
- 川浦康至・伊藤裕子・池田政子・本田時雄 1996 既婚者のソーシャルネットワークとソ
ーシャル・サポート—女性を中心に 心理学研究, 67, 333-339.
- Keith, P. M. 1986 Isolation of the unmarried in later life. *Family Relations*, 35,
389-395.

- Kenny, M. E., Moilanen, D. M., Lomax, R. & Brabeck, M. M. 1993 Contributions of parental attachment to view of self and depressive symptoms among early adolescents. *Journal of Early Adolescence*, 13, 408-430.
- Kelly, H.H., Cunningham, J.D., Grisham, J.A., Lefbure, L.M., Sink, C.R., & Yablon, G. 1978 Sex Difference in comments made during conflict within close heterosexual pairs. *Sex Roles*, 4, 473-492.
- Klein, R., & Milardo, R. M. 2000 The Social Context of Couple Conflict: Support and Criticism from Informal Third Parties. *Journal of Social and Personal Relationships*, 17, 618-637.
- 栗林克匡 2001 失恋時の状況と感情・行動に及ぼす関係の親密さの影響 北星論集, 38, 47-55.
- Kurdek, L.A. 1991 Marital stability and changes in marital quality in newlywed couples: A test of the contextual model. *Journal of Social and Personal Relationships*, 8, 27-48.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.
(ラザルス, R. S., フォルクマン, S. 本明 寛・春木 豊・織田正美 (監訳) 1991 ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版)
- Leavy, R.L. 1983 Social support and Psychological disorder: A review. *Journal of Community Psychology*, 11, 3-21.
- Lee, L.A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 173-182.
- Lloyd, S. & Cate. R. 1985 Conflict in the developing relationship: The case of premarital relationship dissolution. *Journal of Social and Personal Relationships*, 2, 179-194.
- Lydon, J., Pierce, T., & O'Regan, S. 1997 Coping with moral commitment to long-distance dating relationships. *Journal of Personality and Social Psychology* 73, 104-113.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要, 23, 13-23.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.

- 松井 豊 1993 恋ごろの科学 サイエンス社 Pp.134-152.
- 松井 豊 2001 第8章 親密な対人関係の形成と発展 高木修(監) 土田昭司(編) 対人行動の社会心理学 北大路書房 Pp.94-107.
- Mearns, J. 1991 Coping with a breakup: Negative mood regulation expectancies and depression following the end of a romantic relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 327-334.
- 南 隆男・稲葉昭英・浦 光博 1988 「ソーシャル・サポート」研究の活性化に向けて - 若干の資料 哲学, 85, 151-181.
- 宮下一博・臼井永和・内藤みゆき 1991 失恋経験が青年に及ぼす影響 千葉大学教育学研究紀要, 39, 117-126.
- Molidor, C. & Tolman, R.M. 1998 Gender and contextual factors in adolescent dating violence. *Violence Against Women*, 4, 180-194.
- Monroe, S.M., Rohde, P., Seeley, J.R., & Lewinsohn, P.M. 1999 Life Events and Depression in Adolescence: Relationship Loss as a Prospective Risk Factor for First Onset of Major Depressive Disorder. *Journal of Abnormal Psychology*, 108, 606-614.
- Moran, P. & Eckenrode, J. 1992 Protective personality characteristics among adolescent victims of maltreatment. *Child Abuse and Neglect*, 16, 743-754.
- 無藤 隆・久保ゆかり・遠藤利彦 1995 現代心理学入門 2 発達心理学 岩波書店 Pp.viii.
- Nadler, A., Maler, S., & Friedman, A. 1984 Effects of helpers sex, subjects androgyny and self-evaluation on males and females willingness to seek and receive help. *Sex Roles*, 10, 327-340.
- 野辺政雄 1999 高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて 社会学評論, 50, 375-392.
- 小此木啓吾 1997 対象喪失とモーニングワーク 松井 豊(編) 悲嘆の心理 サイエンス社 Pp.113-134.
- 尾見康博 1999 子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究 教育心理学研究, 47, 40-48.

- Orlofsky, J. L., & O'Heron, C. A. (1987). Development of a short-form Sex Role Behavior Scale. *Journal of Personality Assessment*, 51, 267-277.
- Park, C., Cohen, L., & Murch, R. 1996 Assessment and Prediction of Stress-Related Growth. *Journal of Personality*, 64, 71-105.
- Pettit, E. J., & Bloom, B. L. (1984). Whose decision was it? The effects of initiator status on adjustment to marital disruption. *Journal of Marriage and the Family*, 46, 587-595.
- Persons, T. & Bales, R.f. 1955 Family, Socialization and interaction process. The Free press. (橋爪貞雄訳 1970・1971 核家族と子供の社会化(上・下) 黎明書房)
- Rook, K. S. 1987 Reciprocity of Social Exchange and Social Satisfaction Among Older Women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 145-154.
- Ross, C. E., J. Mirowsky, & K. Goldsteen. 1990 The Impact of the Family on Health: The Decade in Review. *Journal of Marriage and the Family*, 52, 533- 546.
- Roy, F.B., Sara, R.W., & Arlene, M.S. 1993 Unrequited love: On heartbreak, anger, guilt, scriptlessness and humiliation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 377-394.
- Rusbult, C.E., Martz, J.M. & Agnew, C.R. 1998 The Investment Model Scale: Measuring commitment level, satisfaction level, quality of alternatives, and investment size. *Personal Relationships*, 5, 357-391.
- Salazar, L.F., Wingood, G.M., DiClemente, R. J., Lang, D.L. and Harrington, K. 2004 The role of social support in the psychological well-being of African American adolescent girls who experience dating violence. *Violence & Victims*, 19, 171-187.
- Seeman, T.E., & Syme, S.L. 1987 Social networks and coronary artery disease: a comparison of the structure and function of social relations as predictors of disease. *Psychosomatic Medicine*, 49, 341-354.
- Shaffer, D. R., Pegalis, L. J., & Bazzini, D. G. 1996 When boy meets girl (revisited): Gender, gender role orientation, and prospect of future interaction as determinants of self-disclosure among same- and opposite-sex acquaintances. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 495-506.

- Shumaker, S. A., & Brownell, A. 1984 Toward a theory of social support: Closing conceptual gaps. *Journal of Social Issues*, 40, 11-36.
- 嶋 信宏 1991 大学生のソーシャル・サポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39, 440-447.
- 嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャル・サポートの日常生活ストレスに関する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- Simpson, J. A. 1987 The Dissolution of Romantic Relationships: Factors involved in Relationship Stability and Emotional Distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 683-692.
- 相馬敏彦 2005 親密な関係における排他性が個人の適応に及ぼす影響 広島大学大学院生物圏科学研究科博士論文 Pp.23-37.
- Spence, J. T., & Helmreich, R. L. 1978 *Masculinity and femininity: Their psychological dimensions, correlates and antecedents*. Austin: University of Texas Press.
- Sprecher, S. 1994 Two sides to the breakup of dating relationships. *Personal Relationships*, 1, 199-222.
- Sprecher, S., Felmlee, D., Metts, S., Fehr, B., and Vanni, D. 1998 Factors associated with distress following the breakup of a close relationship. *Journal of Social and Personal Relationships*, 15, 791-809.
- Sternberg, R. J. 1986 A triangular theory of love. *Psychological Review*, 93, 119-135.
- Stroebe, W., Stroebe, M., Abakoumkin, G., & Schut, H. 1996 The role of loneliness and social support in adjustment to loss: A test of attachment versus stress theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1241-1249.
- 鈴木淳子 1994 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- 鈴木淳子 1996 男性と女性に期待されるもの—性役割— 宗方比佐子・佐野幸子・金井篤子 (編) 女性が学ぶ心理学 福村出版 Pp.138-143.
- 周 王寧 1997 社会心理学用語辞典 小川一夫(編) 北大路書房 Pp.127-128.
- 詫摩武俊 1973 恋愛と結婚 現代青年心理学講座 5 現代青年の性意識 金子書房 Pp.143-193.

- 谷口弘一・福岡欣治 2006 対人関係と適応の心理学 - ストレス対処の理論と実践 北大路書房 Pp.97-115.
- Tashiro, T.Y., & Frazier, P. 2003 "I'll never be in a relationship like that again": Personal growth following romantic relationship breakups. *Personal Relationships*, 10, 113-128.
- Tedeschi, R., Calhoun, L. 1996 The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the Positive Legacy of Trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9, 455-471.
- Terhell, E. L., Broese van Groenou, M. I., & Van Tilburg, T. 2004 Network dynamics in the long-term period after divorce. *Journal of Social and Personal Relationships*, 21, 719-738.
- 遠矢幸子 1995 異性間の友人関係の特性 (1) 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 100-101.
- 浦 光博 1992 支えあう人と人 サイエンス社 Pp.21-45.
- Vaux, A. & Harrison, D. 1985 Support network characteristics associated with support satisfaction and perceived support. *American Journal of Community Psychology*, 13, 245-268.
- 和田 実 1992 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, 40, 386-393.
- 和田 実 1994 恋愛に対する態度尺度の作成 実験社会心理学研究, 34, 153-163.
- 和田 実 1996 同性の友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, 67, 232-237.
- 和田 実 1998 大学生のストレスへの対処, およびストレス, ソーシャル・サポートと精神的健康の関係 - 性差の検討 実験社会心理学研究, 38, 193-201.
- 和田 実 2000 大学生の恋愛崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的反応 実験社会心理学研究, 40, 38-49.
- 和田 実 2002 恋愛と性行動 和田 実・諸井克英 青年心理学への誘い - 漂流する若者たち ナカニシヤ出版 Pp.87-106.
- Weisz A.N., Tolman R.M., Callahan, M.R., Saunders, D.G. 2007 Informal helpers' responses when adolescents tell them about dating violence or romantic relationship problems. *Journal of Adolescence*, 30, 853-868.

Wellman, B., Wortley, S. 1989 Brothers' keepers: situating kinship relations in broader networks of social support. *Sociological Perspectives*, 32, 273-306.

山岸俊男 1998 信頼の構造 東京大学出版会 Pp.149-183.

Zeiss, A. M., Zeiss, R. A., & Johnson, S. M. 1980 Sex differences in initiation of and adjustment to divorce. *Journal of Divorce*, 4, 21-33.

資料：本論文で用いた測定項目

研究1で用いた主な測定項目

◆各対人関係から提供されたサポートの測定

あなたの対人関係（友人、恋人、家族）についておたずねします。あなたが普段生活していて、会う回数に関係なく、最も重要であると思う人を各関係につき1人だけ思い浮かべて、以下の項目について回答してください。ただし、その関係にある人がいない場合は、無理に挙げる必要はありません。なお、イニシャルを挙げていただくのは、具体的にイメージしていただくためであり、個人を特定するためのものではありませんので、安心してご回答ください。

教示（想起した相手を「Aさん」とする）

あなたは、以下の項目のような援助をどの程度Aさんからしてもらっていますか。あてはまる数字に○印をつけてください。

選択肢

「全くない」から「頻繁にある」までの5件法

項目

1. 私が落ち込んでいる時、元気づける
2. 私に引越しなどの大がかりな用事があるとき、その手伝いをする
3. 私がやっかいな問題に頭を悩ませているとき、冗談を言ったり、一緒に何かをやったりして、私の気をまぎれさせる
4. 私が病気で数日間寝ていなくてはならないとき、看病や世話をする
5. 私が忙しくしている時、ちょっとした用事（家事や簡単な仕事）を手伝う
6. 私が精神的なショックで動揺している時、なぐさめる

*以上の項目について、「同性友人」、「異性友人」、「恋人」、「同性家族」、「異性家族」の5つの関係を対象に回答する。

研究2で用いた主な測定項目

◆対人関係からの情緒的サポートの受容

教示

あなたの人間関係についておたずねします。ここでいう人間関係とは、会う回数とは関係なく、あなたが身近に感じる人との関係です。例えば、家族、友人、恋人、先輩・後輩などです。

回答方法

1. まず、あてはまる人のイニシャルをできるだけたくさん挙げてください。ただし、最高10人までとします。あてはまる人がいない場合は無理に挙げる必要はありません。
2. 次に、あなたが挙げた人の性別、あなたとの関係を教えてください。
3. 最後に、その人々から受けているサポート量の全てを100%とすると、それぞれの人がどの程度サポートを受けているか、だいたい割合で回答してください。

記入例

病院にお見舞いに来てくれた人は誰ですか？

イニシャル	性別	関係	サポートの割合
[あい・みつ]	[<input checked="" type="radio"/> 同性・異性]	[<input checked="" type="radio"/> 家族・友人・恋人・その他()]	[35]%
[かな・こと]	[<input checked="" type="radio"/> 同性・異性]	[家族・友人・恋人・その他(先輩)]	[25]%
[さか・けん]	[同性・ <input checked="" type="radio"/> 異性]	[家族・友人・ <input checked="" type="radio"/> 恋人・その他()]	[15]%
[しな・ふみ]	[<input checked="" type="radio"/> 同性・異性]	[家族・ <input checked="" type="radio"/> 友人・恋人・その他()]	[25]%
			合計 100%

姓：ひらがな2文字
名：ひらがな2文字
で回答する。

あてはまるものに○印をつける。その他を選択した場合は、具体的に書く(先輩、先生など)。

全員で100%になるようにする

項目

あなたに共感してくれることやあなたを信頼してくれることが多く、あなたを大切に思ってくれる人は誰ですか

◆性差意識尺度

教示

あなたは普段、男性と女性が違うということを、どれくらい意識しますか。以下の項目について、あなたの意識に最もあてはまる数字に○印をつけてください。

選択肢

「全く意識しない」、「ほとんど意識しない」、「あまり意識しない」、「やや意識する」、「かなり意識する」、「非常に意識する」の6件法

項目

1. 持久力（長くもちこたえる力）
2. 筋力
3. 敏捷性（動作のすばやさ）・瞬発力
4. 身体・生理
5. 行動力
6. 勉強・学力
7. 対人関係
8. 性格
9. 表現力（感情や精神など内面的なものを目に見える形で表す力）
10. 感情
11. ものの考え方・価値観（ものを評価する基準）

研究3で用いた主な測定項目

◆恋愛関係崩壊時のショック度に関する項目

教示

あなたはAさんと別れた直後、どのようなことを経験しましたか。以下の項目について、あてはまる数字に○印をつけてください。

選択肢

「全くあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「どちらでもない」、「ややあてはまる」、「非常にあてはまる」の5件法

項目

1. 失恋した時、悲しかった
2. 失恋した時、胸がしめつけられる気持ちだった
3. 失恋した時、相手の人が愛してくれないのなら死んだ方がましだと思った
4. 失恋した時、苦しかった
5. 失恋した時、全てが失われた気がした

6. 失恋した時、生きている意味がわからなくなった
7. 失恋した時、相手の人を思うと、涙がとめどなくあふれた
8. 失恋した時、相手の人なしでは、これからどうしたらよいのか分からなかった

◆恋愛関係崩壊後の立ち直り過程と立ち直り状態

教示

あなたは A さんと別れてから、どのようなことを経験しましたか。以下の項目について、あてはまる数字に○印をつけてください。

選択肢

「全くあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「どちらでもない」、「ややあてはまる」、「非常にあてはまる」の5件法

項目

1. 失恋によって何かを学んだと思えるようになった
2. 偶然を装って、相手の人と会おうとした
3. 相手の人を恨んだ
4. 何かに夢中になった
5. 失恋を肯定的に捉えられるようになった
6. 相手の人を忘れてしまおうと思った
7. 何か他の楽しいことを考えた
8. 次の恋を見つけようという気持ちになった
9. 誰かに愚痴を言った
10. 相手の人と連絡をとろうとした
11. 他の異性を好きになった
12. 失恋したことを信じようとしなかった
13. 何かにつけて、相手の人を思い出した
14. 相手の人に幻滅した
15. 相手の人との楽しい出来事を思い出した
16. 他の異性とデートした
17. 相手の人のことを考えるのが嫌だった
18. 自分を磨く努力ができるようになった
19. 失恋した後も、相手の人を愛した
20. 関係が戻るのではないかと期待した
21. 写真など、思い出の品を取り出して眺めた

22. 失恋のよい面を見つけられるようになった
23. 思い出の場所に出かけた
24. 相手の人の悪口を言った
25. スポーツや趣味に打ち込んだ
26. 気にしないようにした
27. 別れたことを悔やんだ
28. 相手の人を避けた
29. 失恋が自分の成長に役立つと思えるようになった

◆恋愛関係崩壊後の成長

教示

あなたはAさんと別れて「現在」、どの程度、以下のような項目について感じるでしょうか。あてはまる数字に○印をつけてください。

選択肢

「全く感じない」、「あまり感じない」、「どちらでもない」、「やや感じる」、「非常に感じる」の5件法

項目

1. ありのままの自分を受け入れてくれる人がたくさんいると思う
2. もっと自分を向上させたいと思う
3. 人生は悪いことばかり続くはずないと思う
4. 自分にとってかけがえのない人を大切にしようと思う
5. 失敗から学んだ、恋愛関係を維持するために必要なことを活かしたいと思う
6. 辛いことが起こっても、希望を見出すことができる
7. 失恋前より、優しい人間になったと思う
8. 自分の長所も短所も冷静に受け入れることができる
9. 恋愛関係を築く時には注意深く考えることが必要だ
10. 異性を信じられない
11. 恋愛関係に関心が持てない
12. 多くの人に支えられて生きている実感がある
13. 失恋前より、自分の気持ちに正直に生きることができる
14. 恋愛関係の大切さを感じる
15. 周囲の人にサポートを求められたら、力になりたいと思う
16. 他の人と過ごす時間だけでなく、自分1人の時間も楽しむことができる

17. 失恋は辛いので、もう恋愛をしたくないと思う
18. 自分が求めている恋人像を具体的に描くことができる
19. 失恋したことよりも、相手と恋愛関係をもてたことに幸せを感じる
20. 失恋前より、交際範囲が広くなり、視野が広がった
21. 何があっても味方になってくれる人がたくさんいると思う
22. 今までより、他の人の気持ちを考えることができる
23. もう人を好きになれないと思う
24. 相手の気持ちや置かれている状況を考えることができる
25. 人によって、様々な恋愛観があると思う
26. いい出来事も、悪い出来事も人生の糧になると思う
27. 恋愛対象としての自分に自信が持てない
28. 自分と価値観や考え方が異なる人とも仲良くできる
29. 誰かに頼らず、1人でも生きていけると思う
30. この先、どんな悪いことが起こっても、乗り越えていけると思う

◆恋愛関係崩壊前後の特徴（想起した失恋相手を「Aさん」とする）

1. 失恋した相手との関係（2件法）

Aさんとはどのような関係でしたか。 （恋愛関係 ・ 片思い）

2. 失恋してからの経過期間

Aさんとの失恋からどれくらい経ちましたか。 （約 年 ヶ月）

3. 失恋するまでの交際期間

Aさんとの恋愛期間（片想いの人はAさんに想いを寄せていた期間）は、どのくらいでしたか。 （約 年 ヶ月）

4. 失恋した相手との関係の重要性

つき合っていた時（もしくは、片想いをしていた時）、あなたにとってAさんは他の関係（家族・友人関係など）と比べ、どの程度重要でしたか。あてはまる数字に○印をつけてください。

重要でない 1 — 2 — 3 — 4 — 5 非常に重要である

研究4で用いた主な測定項目

◆各対人関係から提供されたサポートの測定

⇒ 研究1と同様

◆恋愛関係崩壊後の心理的反応に関する質問

⇒ 研究3と同様

研究5, 研究6で用いた主な測定項目

◆現在, 対人関係から受容しているソーシャル・サポート形態の測定

教示

研究2と同様

回答方法

研究2と同様

項目

1. あなたに共感してくれることやあなたを信頼してくれることが多く, あなたを大切に思ってくれる人は誰ですか
2. あなたが個人的な問題や, 人間関係, 所属する集団における社会的な問題などに対処するために, 必要な情報や知識を与えてくれる人は誰ですか

◆失恋前に対人関係から受容していたソーシャル・サポートの測定

教示

研究2と同様

回答方法

研究2と同様

項目

1. Aさんと失恋する前に, あなたに共感してくれることやあなたを信頼してくれることが多く, あなたを大切に思ってくれた人は誰ですか
2. Aさんと失恋する前に, あなたが個人的な問題や, 人間関係, 所属する集団における社会的な問題などに対処するために, 必要な情報や知識を与えてくれた人は誰ですか

*失恋相手であるAさんについては1番目に回答するよう教示した。

謝辞

本論文の執筆にあたり、ご指導いただくとともに、最後まで温かく見守ってくださった指導教員の坂田桐子先生に深く感謝いたします。在学中はもちろんのこと、広島大学を離れ、流通経済大学に就職した後も、それまでと全く変わらぬ熱意でご指導いただきました。

これまで、論文執筆が思うようにいかず、何度も挫けそうになる日がありました。また、「忙しい」という言葉に甘え、自分を律することができない日もありました。しかし、先生の研究に対する真摯な姿勢に多くを学び、力強い励ましの言葉に勇気づけられながら、一步ずつ目標へ向かって歩むことができました。言葉は尽きませんが、坂田桐子先生にご指導いただけたことを、とても幸せに感じております。心より感謝いたします。

また、多くの適切なお指導、および、貴重なご助言をくださった浦光博先生、岩永誠先生、林光緒先生に感謝の意を表したいと思えます。論文執筆の経験の浅さから、時に客観的に自分の論文を眺めることが困難であった私にとって、先生方のご助言は非常にありがたいものでした。また、入野宏先生、野村理朗先生、磯部智加衣先生をはじめ、行動科学講座の諸先生からも、様々な励まし、ご示唆をいただきました。深く感謝いたします。

社会心理学研究室の先輩や後輩の皆さんには、ゼミや日常的な会話を通して、多くの有益な示唆をいただきました。特に、高口央先生、早瀬良さんをはじめ、坂田桐子先生のゼミメンバーには研究を進めるにあたり、幾度となくサポートしていただきました。本当にありがとうございました。常に研究室のメンバーの「研究への熱意」を感じることができ、環境で過ごせたことをとても誇りに思います。

さらに、角野充奈さん、玉置應子さんには公私ともに親しくしていただき、いつも励ましの言葉や有益な助言をいただきました。お二人がいたからこそ、健やかに研究に取り組むことができたと思えます。博士論文の執筆に向けた研究を進めるにあたり、時に辛いこともありましたが、お二人と同じ時間を過ごすことができ、本当に素晴らしい6年間となりました。ありがとうございました。

最後に、いつも私を支え続けてくれた友人たちに感謝の意を表します。また、博士論文の完成を見ないまま旅立った家族を含め、初めて研究者を志すことを決心してから、私の研究に対する熱意をずっと信じ続けてくれた家族に感謝いたします。私に有意義な時間を与えてくれたこと、本当に感謝の一言です。

多くの方々の支援を受けながら、ここに博士論文を完成させることができました。多様な対人関係に支えられる大切さを実感しております。しかし、研究者としては「今」スタートラインに立ったばかりです。これからも真摯に研究に取り組んでまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

2009年2月

山下倫実